
有恋歌

三木こう

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

有恋歌

【Nコード】

N2935T

【作者名】

三木こう

【あらすじ】

自称超常現象研究家、年上美人の恋歌^{れんか}さん。そんな彼女に振り回される童顔^{ゆづり}少年有理君。吸血鬼と異能力、二人は自身の異常を治療する術を探すため、オカルト現象に挑み続ける。彼らの行き先に待ち構えるは、超能力、心霊現象、なんでもござれ。二人は探求の先にどんな答えを導き出すのか！？

短い時間で読み進められる、一話完結の連作短編形式です。

プロローグ

首筋が疼いた。

大学からの帰り道、何も考えず、ただただ無心で歩く。

ふと顔をあげると、前方に一人の女性が待ち構えていた。

いや、正確には待ち構えていたかなんて知りようもないけれど、直感的にそんな感想を抱いてしまった。

雑居ビルに囲まれたどこにでもある街道での出来事。なのに、どこか現実離れたようにふわふわと身体が浮いていきそうになる。

「……ねえ、君」

長く、綺麗に伸びた黒髪。その中からのぞく整った顔立ちが妖艶な空気を纏ってこちらを射ぬく。

それだけで僕は動けなくなっていた。首筋が汗ばみ、敏感になった感覚がジンジンと自己主張を始める。

「……ねえ、ねえ君」

本来なら高く澄んだ綺麗な声も、今となっては僕の耳を浸食する捕食者の囁きでしかなかった。なんとか動かせるのは指先だけで、懸命にぐーとぱーを繰り返す。

「……ちょうだい、ほしいの」

女性は近づき、成熟した大人の色香を放ちながら、僕の頬に手を当てた。

それだけで僕はビクつき痙攣して、彼女の瞳から視線を逸らせない。こんな世界は知りたくない、きつと彼女は僕が歩んできた19年の人生とは似ても似つかない世界の住人だ。

「……いた、だきます」

最初に感じたのは痛み。

そしてじわりと広がる甘い香り。

血と、女と、異世界感とでも言えいいのか、どうしようもない

違和感が僕の中へと広がり続ける。

彼女は、僕の首筋に顔を埋めたまま妖艶に笑っているようだった。見なくてもわかる。

それぐらい今の僕は敏感で、過敏で、感覚的になっていた。

やがて彼女は満足し、首筋に宛てがっていた柔らかな唇を離すと、顔をあげ至近距離でこちらを見つめてくる。

それだけで、理由はいらない。

おそらく僕はすでに、この時点で、彼女に捕らえられていた。

まあ、簡単に……至極極端で俗物的で、なんの余韻もなく、一般的な解釈をするならば、きっと僕はこの時彼女に、恋をしたのだった。

一歌（1）

超常現象なんてクソ喰らえというのが彼女の口癖だった。

始まりはいつも突然に、例えば一本の電話からだったりする。

よくいえばアンティーク、悪くいえば時代遅れの産物である黒い回転ダイヤル式の電話機がけたましく音をならした。

時刻は夕時、いつものように縁側でのんびりとくつろいでいた僕は、小さくため息を吐き出しながら、受話器に向かって放たれる言葉の数々に聞き耳をたてる。

「——いつ？ ああそうなんだ。それで？ほんとに？ わかった、了解。それじゃあ」

よく通る澄んだ声はこの古びた日本家屋では筒抜けのようなものだった。

会話の内容はいつものような業務連絡で、特に変わった言葉は出てきていない。どうやら、我社……超常現象研究所としては珍しく、比較的まともな仕事にありつけるらしい。

もっとも、事務所の玄関の脇で忘れられている看板に記載された長つたらしい名称なんて、僕たちもお客さんも誰も使っていないけど。

縁側から日本庭園を眺めながらゆっくりと緑茶をすする。

なんとも風流で心が落ち着いた。

けれど、そんな安息の日々は長くは続かないことを、僕は経験から察知している。いうなれば今のは最後ののぼんタイムといったところだろう。

「有理君、出番よ、私たちのね」

「恋歌さん。いつもながら説明が適當ですね」

恋歌さん。僕のバイト先の上司、あるいは先輩にあたる人だ。

恋を歌うなんて乙女チックな名前をしてはいるが、それが本名か

どうかは怪しいものだ。一軒の日本家屋を貸し切って、事務所兼自宅としているのがこの平屋で、僕は大学の近くにアパートがあるというのに、ここに入り浸るのが習慣化していた。

まあ助手として、少なくともバイト代をもらってはいるのだけど。「説明なんて後からついてくるのだから問題ないわね。さつさと車に乗り込む、現場は待つてはくれないのだからね」

「日が沈みましたね……」

僕の最後の呟きが、暗がりには溶け込んでいく。時間も18時を回ったぐらい。春にしては随分今日は暗くなるのが早い気がした。

長い黒髪の女性がすうりとびた手足をばたつかせ、一階建ての平屋を走り回る。

あわただしく身支度を整える恋歌さんを横目で見ながら、僕も足に力を入れ立ち上がった。けれど、男の身支度なんて簡単なもので上着を羽織り、携帯や財布を入れるための小さなシオルダーバックを肩にかけるだけで準備は完了してしまった。

最後に洗面台の鏡を覗き込むと、猫毛な髪と無表情な童顔が映りこんでいた。

「先に出て車のエンジンかけておきますね」

いつものことなので気にはしないが、恋歌さんは自室に閉じこもったまま出てくる気配はない。

女性の身支度は色々と大変なのだろう。……僕も知識でしか知らないけれど。

ガラガラと音をたてながら玄関を出て、日本庭園に侵入気味の駐車場まで足を運ぶ。これまた使い込まれた藍色の軽自動車にキーを差し込み、エンジンをかけた。

「まあ、僕の免許はAT限定だから運転はできないけどさ」

誰もいないのに呟いてみたりした。

我ながらカッコがつかないったらありやしない。これは夏休み辺りにMT車への免許切り替えを考えるべきだろうか。

「お待たせ。どう、綺麗でしょ？ 当たり前すぎて訊くまでもない

ほどに」

「そうですね。恋歌さんはいつも通りお綺麗ですよ」

「なんか有理君……。そっけなくない？ お姉さん、傷つくよ」

「僕がそっけないのは昔っからですよ。嘘はつきませんけどね」

恋歌さんにとっての仕事着というよりユニフォームなのかもしれない、白のワイシャツと黒のスカート、そしてストッキングと伊達メガネ。

一見してできるOL風なチョイスだが、袖先や各所に存在するヒラヒラやふわふわがただの趣味だということを主張していた。

ちなみに伊達メガネを要所要所で取り出すのが、最近の恋歌さんのお気に入りらしい。

年上の綺麗なお姉さんたる恋歌さんの、着るもの付けるものが一々似合いすぎていて、僕は毎回心の中で、色んなフェチズムを開拓させている。最近は、少しばかりメガネ萌えに目覚めそうになっていた。

「見とれてる？」

「見とれてますよ。いつも」

「有理君。そういう台詞はもう少し恥じらいながら言ってくれないかな？ せつかくの年下属性が台無しだと思わない？」

恋歌さんがぼやきながら、右座席に乗り込む。

そして車のギアを華麗な手さばきで操り緊急発進。

「さて行きましょうか」

「僕はどこに、なにをしに行くのかすらわからないんですけどね」
ドライブに出かけるのも悪くない。

もっとも、僕にとって恋歌さんとのドライブは毎回行き先不明で始まるのだった。

一歌（１）（後書き）

そんなわけで、始めました、有恋歌。

簡単に説明しますと、有理君と恋歌さんがくっちゃべりながらオカルト現象に挑んでいくようなお話です。たまに戦ったり、推理のよ
うなことをしたり、恋愛っぽいことをしたり……。

各話は短編程度の長さで完結し、連作形式として繋がって行きます。
話数が進むごとに伏線？　っぽいものも回収していけたらなと思っ
ています。

一話、一話はそれほど長くはなく、サクッと読めるかと思いきいの
で、お目通しいただければ幸いです。

一歌（2）

「すっごいわね。あるところにはあるもんだわ。こんなお屋敷ってさ」

「なんだか恋歌さんと来る場所はなんちゃらサスペンス劇場の舞台みたいな所が多い気がします」

軽自動車のくせにやたら速い車で20分ほど走った先、僕たちが訪れたのはバカでかいお屋敷だった。

洋風のたたずまいのまま、横にも縦にも長いお屋敷がただっぴろい庭園の中にぽつりと存在している。恋歌さんの家も風流な日本家屋でそこそ良いお金がかかってるはずだが、この場所はきつとそれ以上だろう。

お金の使い方が真逆というか、ココは派手な方向に走ってしまったようだけれど、僕としては少し寂れたぐらいの日本的な屋敷の方がワビサビがあつてよいと思う。

「いらっしやいませ。お待ちしておりました。わたくし井上と申します」

バカでかい洋館に圧倒されていると駐車場までお手伝いさんが出迎えにやってきていた。名前を尋ねられることもなく本人確認が完了したのか、執事服に身を包んだ初老の男性が頭をさげ玄関までの案内を開始する。

「有理君。すっごいわね、執事よ、執事」

「ついついセバスチャンと呼びたくなりますね」

「真顔でボケるのは止めてくれない？ とてもシニールだわ」

僕としてはくすりと笑えるナイスジョークを繰り出したつもりだったが、どうやら無表情すぎたらしい。

「私もメイドさんでも雇おうかしら。好条件だせばひっかかりそうなものだけ」

「僕なら応募しませんね。もしくは一週間で辞める自信があります」

「いえ、ひっかかるわね。有理君はいつまでも私と一緒にいたいみたいだから」

「それはそうですね。僕はモノ好きなので、メイド服を着せられな
いかぎりは付き合いますよ」

さりげなくメイド服に対する予防線をはっておいた。

例えばこの屋敷でメイドやら執事に感動した恋歌さんが家に帰っ
てから僕にそれを求めるなんていうのは、ありがちな展開だった。

「それではどうぞ、お待ちしておりました。恋歌様に、有理様」

「どうもありがとう」

「すいません、おじゃまします」

玄関から館の中に足を踏み入れる。

ベタな螺旋階段なんかが存在していた。そして、床に敷き詰めら
れたジュータンは一目で高級なものだと判別できる。

ところで、僕たちのことは名前でしか呼ばれなかったが……なる
ほど、この業界ではそんな感じで通じてしまう所までできてしまっ
たらしい。

「すごいわね。こういう派手なのって一度は体験してみたいって
いうのが乙女心ってところかしら、お姫様みたいなベットとかさ」

本名かまではわからないが、恋を歌うなんて乙女チックな名前を
した成人女性がうつとりとした風に呟いていた。

「なに？ 私みたいなおばさんがこんなことってちゃダメかしら
？」

「いえいえ、恋歌さんはまだまだお若いですよ」

恋歌さんはタチの悪いことに地獄耳かつ読心術の達人だったりす
る。ポーカーフェイスな僕の心が読めるのだからきつとそういうこ
となんだろう。

「この部屋にて旦那様がお待ちです」

廊下をしばらく進み、大きな部屋の前につくと、執事さんが優雅
に扉を引いた。

ゆっくりと室内に足を踏み入れると、優しそうな顔をした中年男

性がこちらを向いた。

「これはこれはようこそいらつしやいました。わたくし、この屋敷の主人の宮城家永と申します」

「こちらこそおじゃまさせていただきます」

宮城さんと恋歌さんが大人の対応で挨拶を交わす横で、僕も子供ながらに頭を下げながらちらりと室内を眺め回した。

思ったよりも家具やデザインはシンプルで、綺麗びやかに装飾された屋敷の中にしては少々地味なぐらいの装飾だった。

「はっは、少々地味ですか。他の部屋と違いここは私の趣味よりな装飾なもので」

「いえ、そんな……。僕もこういう部屋の方が落ち着きます」

ついつい室内の装飾にたいする感想が顔に出てしまったのか、宮城さんにフォローされてしまった。

成金というイメージを持っていたがどうやらこの館の主人さんは中々に常識的な感性をお持ちのようだ。

「すいませんうちの子が……。って、別に実の子供とかそういうことではないんですよ。断じて、ただの助手みたいなものですから」

妙におばさん臭い反応に自分自身ショックだったのか、恋歌さんは自分で自分をフォローしていた。

大人にも色々な人間がいるのだった。

「思っていたよりも普通の人で安心しました。これなら家の娘をおまかせできます」

宮城さんは優しげに微笑ながらも、どこか影のある表情で椅子から立ち上がった。

「それではご案内します。娘のところまで……」

一歌（3）

「すでにおわかりのことと思いますが、私達はあくまで研究者というか物好きというかヘタの横好きみたいなもので、あまり期待はなさらないでくださいね」

「いえいえ、お二人の噂は聞き及んでいますよ。別にプレッシャーをかけるわけではないんですが、今の私には頼る相手がいるだけで貴重なのです」

その言葉にはどんな意味があったのだろうか。

大概僕たちが訪れる場所は手遅れになりかけの状況が多い。今回にいたってもそうだったのか、宮城さんは疲れた表情ながらも、胡散臭い僕たちみたいな連中に期待をよせてくれているようだった。

「ずいぶんひどいみたいね、娘さん」

宮城さんの後について歩きながら、恋歌さんは僕の耳元に近づくと小さな声で話かけてきた。

整った顔がすぐそこで、女性特有の柔らかくて良い匂いがして、ついつい胸がドキドキと高なってしまう。

「そうですね。恋歌さんを信じてるとかよっぽどですよ」

「有理君は厳しいわね。褒め言葉だと受け取っておくわ」

恋歌さんの表情が微妙に強ばっていた。

僕たちがイチヤイチヤと話しているうちに、目的の部屋についたよううで、可愛らしい装飾で彩られた扉の前で宮城さんが振り返った。

「こちらが娘の部屋です。嫌われてしまったのか私は一緒に入れませんが、どうか娘の力になってやってください」

宮城さんが丁寧に頭を下げる。

世間一般でいうところの良い大人がこれほどまでしてくれるというのは、まだまだガキと呼ばれる僕みたいな人間から思うところがあった。

なんだか嬉しくもあるし、仕事にたいするモチベーションや責任

感もあがるというものだ。

「わかりました。力になる、というのも大げさですが私達にできることがあれば、精一杯させていただきます」

宮城さんが娘さんの部屋から離れていくのを見守りながら頭を下げる。恋歌さんもやる気になってるのがさっきの台詞からも伝わってきた。

「……力になるっていうのは言い過ぎよね。結局私達も自分のために来てるわけだし」

うん、きつと責任感やプレッシャーに押しつぶされそうなんだ、さすがのこの人もさ。と、思おうとしたけれどよくよく考えてみると恋歌さんのそんな姿は想像できなかった。

「それじゃあさっさと行きましようか」

「ちよつと待ってください。深呼吸するんで」

「真顔で緊張してるのかね。ま、年頃の女子の部屋だもの、精々楽しみなさい」

何を楽しめというのだろうか。

おっさんみたいなボケをスルーしながら、恋歌さんの後ろについて部屋に足を踏み入れる。

一見して女の子の部屋だというのが見て取れる。ピンクっぽい壁紙に、ジュータン、そして部屋の中央に位置するのは漫画みたいなお姫様ベットだった。

ベットの上から垂れているレースみたいな薄いカーテンの裏側に人のシルエットが見えた。

「こんばんわ。娘さん……っていうのはおかしいね。宮城さん、でいいですかね？ 良ければ名前の方も教えてくれるかな？ って、他人に名乗る前に自分からってことで私は恋歌ですよろしく」

「あ、僕は有理です。よろしくです」

すらすらと長ったらしい自己紹介をこなす恋歌さんに続き、僕もどもり気味の声をあげる。

えらい違いだったが、まだまだガキな僕としては所詮はこの程度

なんだろう。

「……あの、霞美です」

霞美さんはベットのカーテンに隠れたまま声をあげる。小さな、か細い感じの声だった。

「じゃあ霞美さん。カーテン開けてもいいかな？」

「——はい」

カーテンの裏側でシルエットがゆっくりと戸惑いながらも頷いた様子が見えた。

「え？ あ、……はい？」

しかし霞美さんの素顔を覗く前に室内に異常が発生していた。慌てて変な声が出てきてしまう。

家具を伝って異常な振動が感じ取れた。地震かと思って隣の恋歌さんを見ると直立不動のままじっと霞美さんの方を見つめているだけだった。

その姿から、ああこれは地震じゃないんだなと理解しながら、周りに意識を張り巡らせる。

「これって、なんていうか、ベッタベタにポルターガイストとかいうやつですかね」

「だったら面白いとか思ってたけど状況的にそうみたいね。建物は揺れていないもの」

真剣な表情で恋歌さんが瞳を細める。

室内にあった家具——タンスや衣装ケースやらが浮いている。まだユラユラと宙に浮いているだけで、動きに指向性までは発生していないようだ。

「霞美さん。これってあなたの力なの？」

「え、あの……私は、私は別に……」

怯えた震えた声が聞こえる。霞美さんがベットの中で布団を抱きしめるような姿が見えた。

「逃げまじょうか有理君。今はただ浮いているだけだけど、よくよく見ると部屋のアチラコチラに重たいものが叩きつけられた痛々し

以後がついてるわよ」

「なんだかきちゃんと見ると面白いですね、これ。物理学とか完璧無視ですよ、これ」

モノが何の理由もなく浮くというのは中々に面白かった。

僕が学校でならった知識なんていうのはまったく効果もなく、超常的な外的要因が働いているわけだ。超能力とかハンドパワーとか、そういう世界だった。読み切り漫画の主人公なら使えても不思議はないんだろうけれど。

「有理君、バカいつてないでさっさと動く。それじゃあ霞美さん、また後でうかがいますね」

恋歌さんは満面の笑顔を霞さんに向けながらドアを閉めた。

部屋から出た後でドスンと重たいものが叩きつけられる音がした。どうやらポルターガイストは終了し、宙に浮いた家具が落ちたようだ。

「すごいっすね。僕、驚きました」

広々とした廊下でシミジミと呟いてみたりする。

「有理君、そういうのはもっと驚いた顔でいうものよ」

恋歌さんはあきれたようにため息を吐いていた。そういうあなたは家具が宙に浮く不思議空間でいつも通りの仁王立ちだったじゃないですか、という言葉は一応飲み込んでおいた。

この程度で心を乱してしまう僕が純粋なだけなんだろう。

「さって、これはこれは案の定というか話に聞いた通り、私達の領分な不思議で幻想的な事件になってきたわね」

恋歌さんは言葉のもつ胡散臭さとは裏腹に、楽しそうに笑いながら腰に手をあて指をパチリとならした。

「……なんでしようか恋歌様」

執事さんが現れた。

「かぁー、ありがとうね執事さん。こっそり打ち合わせしておいてよかったわ。見て、この有理君の驚き顔。珍しいのよこの表情」

驚きますよそりゃあ、でもちよっぴり呆れてもいます。

「恋歌さんのそういうところ、可愛らしいとは思いますが」

「さて、執事さん。少しばかりゆっくりできる部屋を貸していただけるかしら。ついでに事情聴取というか、情報提供もお願いできそうですかね」

僕の愛の言葉は軽く流され、恋歌さんがイキイキとし始めた。なんだかんだで、彼女は趣味でこういうことをしているのかもしれないと思いながら、僕は小さく嘆息するのだった。

一歌（4）

「というかよくよく考えたら僕たちいきなりあんな危ない部屋に入りましたけど、一言いつてくれてもよかったですね？」

「私は知っていたからね、有理君も知っていると思ってたんでしょね」
思い出したように尋ねてみると、恋歌さんは当たり前でしょ、という顔で返事をしてくれた。

それって騙されたってことじゃないですか、という言葉は飲み込んでおく。考えてみれば僕が情報弱者な状況は常日頃からあふれかえってるパターンでしかなかった。

「しっかしさすがドでかいお屋敷ね、紅茶とお菓子が美味しすぎるわ」

「そうですね。僕は日本茶の方が好きですけど」

客間として僕たちが通された一室には小さな机とチェアにタンスとベット、というシンプルな感じで家具が置かれていた。そのチェアに腰掛け慣れない光景にそわそわしながらも上品に紅茶をすすったりする夜の一幕。

簡単な夕食をいただいた後のティータイムだった。ちなみに、食事を簡素なものにしてもらったのは正直早く帰りがかったのと、呑気に腹を満たしているほど暇じゃなくなったからだ。

時間が時間なのか、屋敷内もどこか静かで家事をまかされているお手伝いさんたちもその大半が仕事先から開放され、家路についたようだ。残っているのは身内のようなかなり近い世話を任せている人だけらしい。

「さて、恋歌さんそれでわかったんですか？」

「なにがよ。あんな超常現象に理由なんてあるわけ？」

ニヤニヤした顔で質問を投げ返されてしまった。

「僕は信じてるんですよ。この世の現象にはすべて理由があるって恋歌さんの言葉を」

ついつい真面目な顔になってしまった。

「わかったわかった、ゆつくりと説明してあげるわよ。その変わりにきつちりと治療に協力すること」

なにか良からぬ雰囲気を感じ取れたけれど、仕方なく僕は頷いた。恋歌さんと一緒に、屋敷に出入しているお手伝いさんの話を数人分聞いたが僕では真相に辿りつけなかった。霞美さんのポルターガイスト現象に原因があるのなら知りたいというのが、人間の好奇心というものだと思う。

「じゃあ霞美さんの部屋につくまでにちょっとだけ話しておこうかしら。ってこういう探偵っぽい振る舞いは好きじゃないわ。私は決してそんなものではないし、そんなものとは似ても似つかない存在のはずなんだから」

客間を出て恋歌さんに連れられるままに霞美さんの部屋へと向かう。広大で似たような間取りの続く屋敷内をすいすいと移動する恋歌さんはさすがだった。

「じゃ、さっそく質問ね。有理君、霞美さんがどうして家具なんて持ち出して私たちを威嚇してきたと思う？ ややこしいから彼女が超能力的な力を手にしているという仮定での話でいいわよ」

「なんでですかね。やっぱり人に怯えているとか、トラウマがあるとか」

「うーん普通すぎる解答ね。それが正解だとすると、なぜ彼女は私たちが部屋に入ってきてベットの近くによって話かけるまで何もしてこなかったのかしら」

たしかにそういう部分で僕の解答は破綻している。

対人恐怖症とかの結果、あんな力をふるってきたのなら僕たちが彼女の部屋に普通に案内されたのもおかしい話だし、無理やりに入っていたとして無事に帰ってこれた意味がわからない。

「ヒントあげる。乙女にとってはとても重要なことよ」

「きつとそれ、重要なヒントっぱいんですけど。僕は乙女じゃないので理解できない気がします」

つつい意地悪三昧の恋歌さんにとげとげしい口調で返してしま
った。

理解している人と、理解していない人という図式だところやって
僕は集中攻撃にあってしまふのだった。気持ちがほんの少しばかり
ささぐれても仕方ないというものだ。

「ま、今からいやでもわかることだと思うけどね」

話している間に霞美さんの部屋の前についたらしく、見覚えのある
扉の前で恋歌さんが足を止めた。

「有理君。耳貸して」

「いやな気配がしますけど了解しました」

耳元でそつとささやかれる。

ところでなぜこんな場所で内緒話をしているんだろう、誰かに聞
かれる可能性でもあるというのだろうか。

「まじで、ですか……」

「そ、しっかり治療してあげなさい」

作戦を伝授された僕は、満面の笑みを浮かべる恋歌さんに見守ら
れながら扉をノックした。

一歌(5)

「あの、すいません。夕方遅くに訪ねた有理ですけど、よかったもう一度会ってくださいませんか？」

返事はない。

というよりも扉が開くまでは音で判断するしかないんだけど、僕の感覚では室内は静かなものだった。寝ているのか無視を決め込まれてしまったようだ。

たしかにあんな物騒な現象を巻き起こしてしまうかもしれないのなら、結果的に人に会いたくなくなるのもわかる。

「というわけで私の特技が役立つわけね。まったく鍵を開けるにもそれなりの苦労があるってのに……、お屋敷自体のセキュリティが完璧に近いからこういう個室単体には手を抜き気味なのが助かるわ。私みたいな素人にはアンティークな取っ手しか開けられそうにないからね」

恋歌さんは泥棒みたいな道具を取り出し、僕にはよく分からない動作で鍵穴をこねくり回していた。

怪訝な視線で恋歌さんを見る。

「ほら、一時期流行らなかった？ サブプライムターンとか」

「それをいうならサブターン回しだと思います」

僕の視線に気づいたのか、恋歌さんから話題をふってきた。つい冷やややかな態度でそれに返事をする。僕の記憶が確かなら恋歌さんのしている行為はサブターン回しの方法ではないと思う。

今さら驚くほどでもないんだろうけど、まったくこういう特技はどうかと思うんだ、常識的な人間として。

「さて開いた。この力チリって音が達成感をそそるわね」

「……恋歌さん。まあいいですけど、では行きます」

表情を引きつらせながら、不法な手段で扉を開ける。

できるだけ音をたてずに侵入すると、室内は電気はついたまま、

夕方に訪れた時のように霞さんはベットのカーテンの内側に腰掛け
ているようだ。

「だ、誰！ どうして……」

さすがに驚いているのか、大きめな声が漏れ聞こえてくる。

うん、イメージが掴めそうだ。

「綺麗な声ですね。できればもっと聞かせてほしいものです」

自分でもすんなりといえたことにちよっぴり驚いた。普段から冷
静を心がけていたのがこんな所で役に立ったのかもしれない。

「……っえ？」

露骨に警戒が緩んだのがわかる。

それでも僕が彼女のベットに近づくと異変の気配が迫ってく
るのがわかった。室内を注意深く見てみると家具がほんの少し揺れ
始めている。

「すいません突然！ どうしても一目見たかったもので……、失礼、
しますよ」

ゆっくりと緊張しながらカーテンをめくる。

「いや、いや——！」

とたんに部屋の中の家具が一斉に踊りだす。夕方とは違う、より
不規則な動きで慌てたように宙を行き来し始める。すごいもんだ、
いるところにはいるというか出来る人には出来るというか。

ふと、この手の能力に憧れを覚えてしまう。

週刊漫画雑誌的にはあの手の力を使いこなしてみたいという願望
もある。

今はそんな心の変化は押さえ込み、ただなすべきことをするため
に真っ直ぐと霞美さんの素顔を見つめた。うん、なんとかなりそう
だ。

「なぜ嫌がるのですか？ こんなにお綺麗なのに、いつまでも見て
いたいぐらいです。おっと、突然失礼でしたかね」

齒の浮くような台詞だった。

僕ってば役者にでもなれるかもしれないな、と内思いながらも

熱い視線はそらさない。

「僕は嘘はつかないんです。柔らかそうで透き通るような肌、整った目鼻立ちはお父様似ですかね」

「あの、それって」

「何度でもいいですよ。僕は嘘はつきません。思ったままのことをいつているだけですから。だからもつと自信をもってくださいね」

最後に取りっておきの笑顔をお見舞いしてみると、霞美さんは照れたように頬を染めうつむいてしまった。

それと同時に部屋中の家具がその場に落ちる音がした。中々の轟音なせいか人がこの部屋に向かってくる慌ただしい足音が聞こえてくる。

「それではちょっと失礼します。後片付けが残ってるみたいですから」

部屋の入口付近で意地悪な笑みを浮かべる恋歌さんを見ると、わかってますよ、というアイコンタクトが帰ってきた。

霞美さんの憧れを壊さないように、できるだけ優雅な動作で部屋から去る。

「……それじゃ最後まで聞かせてくださいよ。僕はきちんと協力したんですから」

「ところで有理君。あの笑顔は反則だと思うわよ。以後封印ということ」

微妙に頬を染めながら恋歌さんは早口でまくしたてた。僕としてはさつさと事の真相を説明してほしかったんだが、まあ珍しい表情が見れたからよしとしておこう。

一歌（6）

「それにしても、有理君って役者むいてるのかもね。普段無表情なせいか意識して丁寧に表情を変えられるみたいだから」

褒め言葉のはずなのにまったく嬉しくなかった。

霞美さんをお手伝いさんにまかせ、僕たちは最初に訪れた宮城さんの私室へと通されていた。時刻は日付が変わる少し前、けれど屋敷内はどこか明るい雰囲気満ちているようだ。

「いやー、ほんとうにありがとう。まさか久しぶりに娘の顔を見ることができるとは……しかもあんな笑顔。ほんとうに、ほんとうに感謝の気持ちで一杯だよ」

感謝されるのは素直に嬉しかったけれど実際それほどのことをしたという自覚もないので、なんだか申し訳なくもあった。

「いえいえ、私はただ自分の知的好奇心から治療を試しただけですから。今回に至っては乙女の味方もできたみたいですし、こちらこそ感謝したいぐらいです」

よくわからない理論だったが、なんだか恋歌さんはとても満足気だった。

特に乙女の味方というのが気に入っているのか、何度か小さく咳いているのが聞こえる。

「いえ、ですがなんというかなぜ急に……とは思ってしまいます。何人かの人間が娘を助けようと挑みましたがなんの変化もなく……むしろひどくなっていったぐらいですから」

「そうですね。私は探偵ではないので推理を披露するほどエンターテイナーではありませんが、簡単に説明させていただきましょう」
部屋の中にいた館の主人たる宮城さんを始め、お茶の用意をしてくれた数名のお手伝いにざわつきが広がっていく。

恋歌さんは胸ポケットから伊達メガネを取り出し装着すると、不敵な笑みを浮かべながら語り始めた。

「つまり娘さんは人に顔を見られることを極度に怖がっていたのです」

霞美さんはあんなに綺麗だというのに、贅沢な悩みだった。おか
けで僕は恥ずかしい台詞を惜しげもなく披露するはめになったのだ。
多少恨みたくもなる。

「勿体無い話ですよ。うら若き乙女が……。けれど、乙女だから
こそなのかもしれません。思春期の繊細な心が踏みにじられてしま
ったのは……」

「それってつまり」

僕が思わず聞き返そうとした言葉は、恋歌さんのアイコンタクト
によって遮られた。

「つまり、例えば、例えばですけど、娘さんに近しい人間が顔に
対するコンプレックスを植え付けていたとかですね。真相まではわ
かりませんが」

けれど、恋歌さんの話を聞く限り犯人はひとりしかいない気がし
た。

娘さんの部屋でポルターガイスト現象が発生するようになってか
らも唯一彼女と顔をあわせていた人間は、ひとりしかない。彼女の
身の回りの世話をしていた側近のお手伝いさんだ。

偶然なのか故意なのか、そのお手伝いさんもこの部屋にいる。彼
女は狼狽し、顔を伏せジュータンを凝視していた。

一応メイド服だったりするわけだけど、僕は個人的に彼女をメイ
ドさんと呼びたくはなかった。彼女の年齢のせいもあるけれど、美
的感覚的に抵抗があったのだ。まあ女性の好みなんて人それぞれだ
とは思っけれど。

「後はわかりません。娘さん自信がポルターガイストを起こしてい
たのか、自然発生なのか、他の誰かの仕業なのか。事実として彼女
は自分に会おうとする人間を危険にさらし続けてしまったことで、
深刻なコンプレックスを根付かせていったようですけれど」

僕みたいなナヲナヨした男の台詞で霞美さんが救われたとは思え

ない。ただ応急処理ぐらいにはなっていてほしいと思う。

資産家の令嬢で容姿端麗という出来すぎなプロフィール。妬まれるには十分すぎる。

まあ、こんなお金持ちな屋敷のことだ。原因さえわかれば後は専門的な人たちがなんとかしてくれるだろう。

能力を使ったのは、本人か、それ以外の人か。そんなのはきつと些細な問題だ。僕たちにとっては今日の体験そのものが貴重な財産となる。

「では私はこれで、人間の気持ちにはあまり興味がないので、後の処理はおまかせしますわ」

恋歌さんはあっさりと踵を返すと屋敷を後にするように部屋を出た。それにつられて後を歩き出した僕の後ろで騒がしい声が聞こえる。

たしかに、怒声やヒステリーな声を聞くのはあまりいい気分ではなかった。

一歌（7）

「有理君。なんだっけ、この世の現象にはすべて理由があるだっけ。昔それと同時に私がいった言葉、覚えてるわよね？」

「理由がないのは人の心ぐらいなものだ。ですか……」

屋敷の玄関を抜け駐車場へと向かう最中、僕は恋歌さんの言葉に納得せざるを得ない。

人の心の複雑怪奇さは特になんの理由もなく行動を決定し、ひどく簡単に人を傷つける。それらすべてに理由や原因を求めるというのはナンセンスなのかもしれない。

「やっぱりその言葉も信じないとですか……。ベタベタな女の嫉妬だったとか、いじめだとかそんなんで納得してちゃダメですかね」
僕はどちらかというとこっちの言葉は信じたくはなかった。

人の思考すらも理解したいなんて傲慢なことを心のどこかで思っ
てしまっているのかもしれない。

「そうね、それじゃあ一つだけ質問」

恋歌さんは意地悪なだけれどとびつきり魅力的な表情で微笑みながら僕の猫毛な頭を撫でた。

「有理君が私のこと好きなのって理由がある？」

容姿が綺麗だからとか。

性格が魅力的だからとか。

一般的な答えはいくつかある。けれど、それらはすべて本質的な意味では答えになっていないように思えた。人間の本能というか子孫を残すためのシステムなんかを説明するというのも屁理屈だし……
ロマンもヘツタクレもない。

なんというか、恋歌さんはこういう部分では乙女心一杯だった。

「答えになってないですけど、あえていうなら心がドキドキするか
らとでも答えておきましょう」

「よし、それでいいのだよ。少年」

頭をくしゃくしゃと撫でられる。

子供扱いされるのは妙な気持ちだ。嬉しくもあり、恥ずかしくもあり、そして、悔しくもある。

結局僕はお手伝いさんと霞美さんがどうしてあんなったのかわかる術もなく、恋歌さんと仲良くお屋敷を後にする他にないのだろう。まあ帰りたくないわけじゃない。夜も遅くなってきたしさつさとふかふかの布団に包まれて、眠りにつきたいという人間的欲求が増してきている。

「それじゃあ執事さん。色々と恋歌さんがご迷惑をおかけしました」「いえいえ、ありがとうございます。お嬢様の笑顔が久しぶりに見れて嬉しいかぎりです」

僕たちを駐車場まで送りにきていた執事さんは表情をゆるめながら深々と頭を下げてきた。

この日最深のお辞儀だった。

人に感謝されるのは、悪くない。

「あら、お嬢さん……。もう玄関まで出てきて……。ほんとうに元気になるたようですね」

執事さんの後ろ開かれた玄関の扉の影。遠目ながらに、可愛らしいパジャマ姿のままこちらを覗き込む霞美さんの姿が確認できた。

「乙女心ねえ。まったく有理君も可愛い顔してやるものだわ」

「それじゃあ失礼しますね。どうもありがとうございます」

恋歌さんの言葉をスルーしてさつさと車の助手席へと向かう。

もしかして、僕は取り返しのないことをしてしまったのだろうか。

数分後エンジンがかかり、動き出した車のミラーから見えた霞美さんの笑顔は魅力的だった。けれど、その姿が遠くになっていくほどに、どこかホツとしている自分がいた。

一歌（8）

「恋歌さんタバコはどうかと思いますよ」

「あら、仕事終りの一本ぐらいいは見逃してほしいものだわ。こんな時ぐらいしか吸わないんだから」

深夜の道路は空いていて嫌いじゃない。二人乗りの藍色軽自動車は軽快に速度をあげ、家路を急いでいた。

そんな中タバコを吸うおうとする恋歌さんに冷ややかな視線を向けてみたりする。

「有理君。ライターくれると助かるかな、なんて」

「はいどうぞ」

自分でも驚くほどに一瞬にしてライターを手渡すことができた。

どうやら、超常的な力が発動してしまったようだ。超スピードなんかじゃない、ただライターを渡したという結果だけが残る。そんな奇妙な体験。

……よくよく、思い出してみれば別に驚くことではない。僕はもともとこの手の力の片鱗が使えたりしたはずだった。

ぶすりと僕の首筋に痛みがはしる。

「恋歌さん……、唐突ですね」

「がぶ、がぶ」

別に血を吸われているというほどではない。ただ少し犬歯が発達していて痛みが走るだけ。でもきつとまた僕の首筋は絆創膏のお世話になるだろう。

「信号機青になったら教えて」

息継ぎのために顔をあげた恋歌さんが早口で呟く。

首筋を年上のお姉さんに噛まれながら目の前をぼーっと眺める。

しばらくすると、信号機がチ力チ力と赤色へと切り替わった。

「信号、変わりましたよ」

首筋を噛まれて数秒後、後ろに並ぶ車に迷惑をかけるわけにもい

かないので、仕方なく声をかける。実をいうと僕はこうやって首筋を噛まれるのが嫌いじゃない。

好きな人と密着したいというのは当然の願望だし、慣れたせいか、チクリとした痛みがなんだか心地良かったりもする。どうやら僕はだめな方向に進んでしまっているようだった。

「まったくいやな体質だわ。自分でもね。ニンニクも十字架も陽の光も苦手なんてベタにもほどがあるわよね。どうせなら不老不死とかにしてくれればよかったのに」

「無茶をいわないでください。人間、できることしかできない、というんじゃないですかね」

「有理君は現実主義ね。そんなのじゃ人生楽しめないわよ」

「そんなことないですよ。僕は恋歌さんのおかげで毎日楽しいですから」

心なしが恋歌さんの頬が染まった気がした。

普段あまり見せない隙だったので、こういう光景は貴重だった。

「僕だって読みきり連載漫画の主人公みたいな体質だったのが、恋歌さんのおかげで日々平凡に暮らせてるんですから」

「昔読んだ小説の吸血鬼が血を吸うことで主人公の能力を無効化したからって、今でもそのイメージを忘れられないんだから、驚きよ」

恋歌さんは吸血鬼だった。

僕は能力者だった。

なんて考え方をしていると恋歌さんにぶっ飛ばされそうだから訂正すると、恋歌さんはニンニクや十字架や陽の光が苦手で、犬歯がちょっと発達した時々人の首筋に噛み付きなくなるだけの体質だった。

僕はといえば、ただほんの少し人と違った力を使えるだけだった。自分でもあまりに使わないせいで、というよりも使えないせいで、どんな力を使えるかすら、正確なことはわかりはしないけど時々あやって突然変な現象を起こしてしまって、その度に自分で驚いたりしてしまう。

「超常現象的ですね」

首筋を押さえながら、再び車の運転に集中し始めた恋歌さんに語りかける。

「そんなもんじゃ断じてないわよ。どこかに理由があるはずなんだから……。今回だつてきちんと治療できたのに自分の症状が治らないんじゃ意味ないわよね」

「いいじゃないですか、ああやっっているんな症状を見ていればそのうちなんかヒントが出てきますよ」

今回だつてうまくいった。

ならいつかは恋歌さんの体質だつて元に戻せるのかもしれない。

「まったく人の心は複雑怪奇よ。不思議現象だつて起こせるんだから」

「大概の人は起こせないですけどね」

それほど簡単な話でもないはずだ。そんなに簡単に謎パワーに人々が目覚めたとあれば世界はほんとに漫画雑誌みたいになつてしまふ。

「それもそうね。所詮治せる症状なんて風邪みたいなもんよ。だから私も風邪なの、風邪が長引いてるだけなの」

「そうですね。そういうことにしておきます」

そつけない返事で恋歌さんを励まそうとしたが、効果はなかったようだ。

家が近づいてきたのか車の速度がさがっていく。

「さて、今日も終わりですね」

「そうね、仕事も終わったことだしゆっくり眠れそうだね。有理君はどう？」

「僕ですか……。そうですね」

一呼吸ため、あの時の表情を思い出す。

「恋歌さんのせいで首筋が疼いて火照つて、大変な夜になりそうです」

霞美さんに見せた封印していの笑顔をお見舞いしてやった。

恋歌さんは声にならない声をあげ、あやうくバック駐車で庭園に突っ込みそうになっていた。

今日一日分の意地悪へのお返しといったところだ。僕は恋歌さんの可愛らしい呆け顔が見れたので、存分に安眠ができそうだと清々しい気分で家の玄関をくぐるのだった。

一歌（8）（後書き）

なんとか一話目（一歌目）終了です。

正確には後、一話分ほど、エピソード的なまとめ話がありますが……。なんとなく雰囲気を読んでいただけてたら幸いです。

一歌（縁側）

縁側でぼけーとしながら、一息。春の中頃、休日のさわやかな過ごし方。

庭には朝日が注ぎこみ、草木が気持よさそうに揺れている。それを見ながら、淹れたての緑茶をひとすり。

今日は目覚めも良かったし、朝食用に作ったオムレツも綺麗な半熟具合で、朝から清々しい気分。課題やレポートなんかは忘れて、今日は一日のんびりと過ごそうと心が揺れる。

そんな中、

「あー頭痛い、有理君、お茶」

「恋歌さん、昨日遅かったみたいですね。大丈夫ですか？」

頭を押さえ、目元にうつすらとくまを浮かべた恋歌さんがからんでくる。春といっても、蒸し暑い日が続いているせいか、Ｔシャツにホットパンツというかなりラフな格好だ。

「うー癒される。癒されるよ、このさらさらの髪の毛に、ちっちゃい身体」

「恋歌さん離れてください。お茶が入れないです」

直に伝わる恋歌さんの感触にどきまぎしつつも、冷たく引き剥がそうとする。

ホントはとても嬉しい事態なんだけれど……。

「恋歌さんまたお酒飲みましたね。眠気覚ましになってるんですか、ほんとにそれ」

「なーにいつてんのよ。やっぱり夜中の作業には酒でしょ、酒！」
仕事終わりのタバコと、作業の景気付けの酒。機会は多くはないはずだけど、こんな時ばかりは愛する女性もおっさんくさく見えてしまう。

「僕は恋歌さんの身体だけ心配してます」

「苦勞をかけるねえ、おまえさん」

「それは言わない約束だよ……。ですか」

「ゆーり君。ノってくれたのはありがたいけど、その表情は止めて、なんだかいたたまれないわ」

僕がジト目になっていたせいか、恋歌さんが素に戻る。そして、差し出したお茶で一服、バツの悪そうな表情でこちらをチラ見。

「あのね、これはその、ちよつとだけよ、ちよつとだけ。前みたいにかバカバカやってないわよ」

「そこは信じてあげます。恋歌さんも仕事で忙しかったみたいです」

僕がほぼこっちの家に住むようになってからは恋歌さんの生活習慣もそれなりに改善されているので、実はそれほど心配はしてなかったりもする。

甲斐甲斐しく世話をし続けた結果だった。まるで通い妻みたいだ。

「なんの仕事だったんですか？」

「ん？ これよ、これ」

「ああ、何時ものレポートですか」

僕らが出会った複雑怪奇な異常現象。

それを『報告』するのが僕らの仕事で、何も人助けに四苦八苦しているわけじゃない。もつとも、自称乙女の味方な恋歌さんに引張られ、結果的に人助けに走るなんてのはありがちな展開だけれど。『機関、からのレポート……。それも報酬の一つですけど、僕はお給料の方だけ気にしてます」

「まあそっちの支払いも中々のもんだったわよ。もつとも、今回は依頼主さんからの直接報酬の方が大きかったけど」

宮城さん……。さすがは金持ち。それなりの規模やら権力やら財力をもっているはずの僕らの上司の支払いより羽振りがいいなんて、よほど今回の仕事に喜んでくれたようだ。

「でどうだったんですか霞美さんは？」

「あら、気になる、やっぱり。ふっふっふ」

気持ち悪い笑いを浮かべながら、恋歌さんが詰め寄ってくる。

「まあ教えたげる。結果はシロ。ほとんどただのパンピーよ。組織からの評価も最低ランクのD」

それはよかった、ほんとうに、アレはただの風邪みたいなものだったのだろう。

「その方が幸せですね」

「そりゃそうよ。これからはあの子も世間一般の乙女よろしく、恋にお菓子に大忙しでしょうから」

今まで引き籠っていた分、そうやって青春を是非謳歌してほしいものだ。

「まあ今回は乙女の心を傷つけたせいで起こった、超常現象だったわけだけ」

それほどまでに乙女の心は、巨大なパワーを秘めているようだ。少なくとも僕なら顔のことを言われたぐらいでは、不思議パワーに目覚めるような感情の起伏を感じることはできないだろう。

「兎にも角にも、女性の心はデリケートなんですね」

「恋は顔するものではないんだけどね」

さらに、乙女のようなことを言いながら、恋歌さんは縁側で寝転び大の字を表現。

「今日はなんもしない、ぼーっと過ごす」

「それは良い休日の過ごし方だと思います、この前大学の帰りに良なお茶請けを買ってきたんです。生もみじですよ、生もみじ」

恋歌さんの世話をするため、縁側から腰をあげる。

どうやら僕にとってのより良い休日の過ごし方というのは、この人の世話をすることだったらしい。

一歌（縁側）（後書き）

というわけで、一話目がやっとこさ終了です。

この縁側はエピソードという名の、まとめタイムです。私の場合、よく話を抽象的なまま終わらせたがるので、このような話が必要に……。

こんな感じで二人の活躍をいくつかの短編にわけて公開していきますので、よろしければお付き合い下さいませ。

二歌（１）

二つ返事は君の悪いところだ。
というのが、彼女の口癖になりそうな勢いだった。

「はい、どうぞ恋歌さん」

「あ・り・が・と・う。有理君」

のどかな縁側、差し出した緑茶が乱暴に奪われる。

きつい視線な気分は終わったのか、今は妙に落ち着いた、感情のない視線が日本庭園の池の方に注がれる。どうやら恋歌さんはご機嫌斜めなようで、僕としては気が気でない。

「怒ってますか、恋歌さん？」

「……有理君、そんな質問は論外よ。女性の機嫌をさらに悪化させる意味しかないのだから」

どうやら僕のフォローは失敗だったらしく、恋歌さんの整った顔立ちがほんの少しばかり歪んで見えた。

ああ、またやってしまったと、ひそかにうな垂れる。できることなら今すぐベットに横になって、嫌なことはすべて忘れてしまいたい。そして夢の中でくらは好きな女性とイチヤイチャ幸せに過ごしたいものだ。

「だいだいだね、ユーリ君。君はお人好しなのかただのめんどくさがりなのか、人の話を安請け合いですぎだよ」

「それはもう、返す言葉もございません」

縁側、恋歌さんの隣に腰掛けながら軽く頭を下げて謝罪する。

が、実のところあまり反省してなかったりするのだからタチが悪い。というよりも、この年になると自分のそういう部分を割りきってしまつて、治そうにも治せないと決めつけてしまっているのが悪いところだ。

「……どうせ言っても無駄なんでしょうけど。所詮は人の長所も短

所なんてのは同じ物なんだから」

「仰る通りでございます」

恋歌さんはそんな僕を一瞥してから、深い溜息をつくど、あきらめたように立ち上がった。

「わかりました、わかりました。そんなあなたと雇用契約してしまった私の負けでございます」

機嫌が治ったとはいい難いが、一応の及第点。

恋歌さんは仕事モードに入ったのか胸ポケットにしまっていた伊達メガネを取り出し、キリリと瞳を釣り上げる。

「さて、連れてってもらおうよ。依頼者の家までね」

二歌(2)

事の始まりは僕が大学のテスト前に、必死こいて食堂で勉強していた所からだったりする。

夏の訪れの迫る春の終盤、期末テストだけで評価するのは可哀想だと、生徒思いな先生方の配慮によって中間テストなるものが行われる。

バイト、と称して恋歌さんのところに入り浸っている僕にとって、とてつもなく重大な単位という壁。この単位ポイントを貯めないと卒業できないように、大学のシステムは出来上がっているわけ……。

「やばい、まじやばい」

中間テストが行われる授業まで残り3時間。時間は充分あるくせに、覚えることはまだまだたくさん。

この日のためにとある通販サイトで購入した先生制作の教科書という名の哲学書は、分厚さだけで内容がさっぱり入ってこない。少なくとも僕には合っていないシロモノだった。

「どうしよう、どうしよう」

要点を押さえ、勉強してはいるものの、不安は消えてはくれない。危なく独り言を呟き始めている時点で、僕にしては相当に焦っていると判断できた。

早朝の食堂は空いているが、さすがに中間テストの前だからか、チラホラと生徒の姿が見えた。周りの連中も似たようなものらしく、彼らの焦った様子がさらに僕の心配を加速させる。

こんな事なら普段から真面目に授業に出て、勉強していればよかったとまでは言わないが、テスト一週間前から対策に乗り出すべきだった……。

なんて、できもしない反省を繰り返しながら、テキストを消化していく。

「……あの、有理君？　もしかしてお困りです？」

「え、ああ、草薙さん？」

そんな僕に話しかけてきたのは、クラスメイトの草薙さんだった。ふわふわとした髪型のままに、どことなくふるふわとした雰囲気の女の子。そんな大学生らしい女の子が、僕にどんな用事なのだろう。

残念ながら、大学に真面目に通っているとは言い難い僕は学科からは浮き気味だというのに。

「あ、あたしの名前ちゃんと覚えてくれたんだね！　美香、嬉しいな！」

「いや、まあ一応同じ学科だしさ」

感極まったのか、一人称を自分の名前にしながら喜びを表現する姿は、素直に可愛いと思えた。

僕の一般的な感性はなんとか維持できているらしい。女性の好みなんてのは、恋歌さんのせいでめちゃくちゃに歪んでしまったらうけれど。

「だって、有理君あんまり大学来てないしさー、この不真面目さんめ！」

草薙さんは食堂の奥、窓側に腰掛けた僕の隣に座り込むと、ペラペラと話題を膨らませていく。

この前の休日に友達とカラオケに行ったあの、

この前の飲み会で行ったあの店がよかったあの、

この前のバイトの時店長がうざかったあの、

話が進みすぎて一周したのか、話がこの前の休日に戻り始めたその直後、草薙さんはやっと必死でテキストに貼りつく僕の姿に気づいてくれたらしい。

「あー、なりほどね！　哲学のテスト対策ってやつか」

「そうなんだよね。正直、草薙さんと話してる余裕、ないかも。頭の中、ソクラテスとかプラトンで一杯」

僕としてもクラスメイトを邪険に扱いたくはなかったが、しょう

がない。それぐらい単位というのは重いのだ。

「ふっふっふ、じゃっじゃじゃーん、これ、何かわかるかなー？」

そんな僕の訴えなどなかったかのように、草薙さんは可愛らしく自分で効果音をつけながら、何かを取り出した。

「これ、先輩とか友達から貰ったの、あたしなりにまとめてみたんだけど……」

そこに現れたのは、哲学のノートっぽいなものだった。見た感じ丁寧な、かつ色分けされてまとめられており、過去問対策つまで網羅されている。

「そ、それ！」

「だめー！」

ガッ！ とほぼ無意識で突き出した右手は、草薙さんによって防がれた。行き場を失った僕の右手が虚しく宙にとどまり続ける。

「えーっと、あたしのお願い聞いてくれたら、見せてあげてもいいかなーなんて」

「なに、なに？ 今ならなんか大抵のことにうんといういいそうだよ、僕」

思えば、この時点で僕は正常な判断能力を失っていた。

完全な安請け合い。恋歌さんに相談もせずに依頼を受託。結果、僕の手には負えない内容だったために恋歌さんに泣きつくハメになっ
てしまったのだった。

二歌(3)

「ストーカー事件なんて随分とベタなものね」

「それが結構悪質みたいで……」

恋歌さんに協力をお願いした最大の理由。それは今回の相手が暴力を振るってくる可能性があったからだ。

残念ながら一般的な成人男性どころか、近所の中学生なみの体力、腕力しかない僕にとって、リアルファイトというのは中々に難易度が高い。

「恋歌さん、この前の鍛錬、またお願いしますね」

「まったく、有理君は読み切り漫画の主人公みたいなチート能力持ってるっていうのに、弱いたらありやしないのね」

そのチート能力は恋歌さんの吸血行為によって封印されているわけで、そもそも僕は自由にその能力を操れた試しがない。

つまり、僕なんていうのは世間一般の大学生にも劣るただのもやしっ子でしかないのだ。

「恋歌さんもやっぱり強い男の人とかが好きなんですか？」

「そんなの気にするわけじゃない、だって私の方が強いもの、それはそうだ。」

恋歌さんが体得している武術は腕力の差なんてハンデにならないかのように、相手の力を利用している。ちぎっては投げ、ちぎっては投げ、なんて無双する光景を何度か見せられた。

曰く、合気道的なそうでないような、ものらしい。

もっとも、そんなスキルがなくなったら、恋歌さんなら口八丁手八丁で暴漢なんかどうにかしてしまいそうだけど。

「あ、ここです、このアパート」

「依頼主のお名前は……、草薙美香さんね。お金にはならないけど、たまにはいいわ」

恋歌さんは愉快げに口元を釣り上げると、スタスタとアパートの

玄関へと向かっていく。

確かに今回の仕事はお金にならない。まあ、僕らが行っているこういう行為は、慈善事業みたいなもので、恋歌さんがどこの調査機関に報告している超常現象レポートの対価こそが、僕らの飯の種なのだ。

「なんていうか、いよいよもって、なんでも屋が板についてきたみたいですね」

今回にいたっては、超常現象すら関係ないわけで。

まあ、僕としては単位の……行く行くは卒業のかかった大事な交換条件だったから、仕方がない、となんとか納得しておくことにした。恋歌さんも、大学ぐらいいは卒業しろって五月蠅いし。

「なるほど、これがアパート用の郵便受けね」

「それもあさられたりしているらしいですよ」

恋歌さんが部屋の番号を指で確認しながら、郵便受けの中を覗き込んだ。

僕もその後ろでこっそりと覗き込む。単調で派手な彩色が施された広告チラシが数枚、押し込まれていた。どこのアパートも同じようだ、僕も部屋に帰るといつもこんなのが待ち構えている。

「ピンクチラシ、見る？」

「なんでですか……」

適当に選びとった一枚のピンクチラシを手に取り、恋歌さんは僕の目の前でチラチラさせる。

それにどんな意味があったのか、考えるまでもない。こんなのはただのセクハラでしかないのだ。

二歌（４）

「あ、有理君こんにちわ！ 美香、待ってたんだよ！」

「こんにちは、草薙さん」

アパートのチャイムをならすとすぐさま元気に草薙さんが飛び出してきた。

「こんにちは、恋歌です」

「えっ……すいません、どなたですか？」

僕が事情を説明する暇もなく、恋歌さんがすつと間に入って自己紹介を始める。

「一応、有理君の上司にあたるものですわ。なんでも、お困りのよう。是非当社が助けしますよ」

普段自分たちのことを『会社』なんて思ってもいなくせに、白々しい台詞だった。

「ええっと……、そうなんですか」

草薙さんは引きつった笑いを浮かべながら僕らを招き入れるようにドアを引いた。

「お邪魔します」

靴を脱ぎ、少しドギマギしながら家へとあがる。

ほんのりと芳香剤の臭いが鼻孔をくすぐる。そんなところに女の子を感じながら、ゆっくりゆっくり足を進めた。

「有理君。どしたの、はやく」

さくさくと奥まで進んだ恋歌さんは案内されるままに座布団の上に腰掛け、差し出された麦茶をすすっている。

やはり機嫌は未だ良くなっていないようだ。

「すいませんね。一人増えてしまっ」

「うん、いいの。さあ有理君も座って」

あわてて用意したのか、新しい座布団と麦茶を持って草薙さんが僕の方を向いた。

恋歌さんの対面側に置かれた座布団の周りには、ぬいぐるみやら可愛い小物が転がっていて、そんなところで一々自分との違いを感じてしまう。

「えーっと、それじゃあその相談に乗ってくれてるってことですよね」
「ええ、私たちはそのために来ましたから」

草薙さんも僕の傍に腰掛け、さっそく話を切り出した。

テスト対策の交換条件として要求された『依頼』。それは彼女に付きまとうストーカーの影を見極めること。

「そうですね、最初は郵便受けの中身が勝手に持ち出されたりとかです。マンションの入り口にあったのが、勝手に？ 自室の郵便受けに入れられてたり」

学校に行く前に確認した封筒が、勝手に移動したりといった違和感が続いているようで、草薙さんは怯えたように話を続ける。

「気のせいだとは思ったんです。あたしも無意識にやったのかなとか……。でも、例えば最近は部屋の中で妙な人影を考えたり、物が微妙に動いてたり……」

「その言い方からすると、やはり違和感があるという感じで、ストーカー本人を確認したわけではないのね？」

「そうですね。なので今回もそのストーカーの影がないかをきちんと調べてもらって、いないならいいで安心したいなっというのが本音です」

恋歌さんは仕事モードに入ったのか、顎に手をあて考えこむような姿勢をとる。

「わかりました。それなればきちんと調査いたしますわ。あなたが安心できるように」

「はい、お願いします」

突然現れた見知らぬ人物に最初は戸惑っていた草薙さんも、恋歌さんの気配に押されたのか、すっかりこちらのペースに巻き込まれている。

ある意味、何時もの僕らの仕事と変わらない雰囲気だった。

二歌(5)

「とは言ったものの、私たちは探偵じゃないから、ストーカーの考える事なんてわからないわけよ」

「それじゃあどうすればいいんですか？」

草薙さんの部屋を調査の名目で一通り確認した後、外に出てきた僕らはマンション外側の郵便受けを物色しつつ言葉を交わしていた。「物が動いたり、なくなったり、ぶっちゃけ殆どの場合が気のせいではあるのだけど。曰く、ポルターガイストやら妖精さんのイタズラやらってね……」

「でもストーカーですよ、ストーカー。さすがに勘違いはないんじゃないんですかね？」

「まったく、有理君は乙女心がまるでわかっていないわね」

恋歌さんは郵便受けから適当な郵便物を手に取り、何かを確認すると、取り出したケータイでどこかに電話をかけた。始めは

「あ、ども、クロネコさん？ さっそくだけどちよつと調べてもらいたいことがあつて、なーに、簡単よ、簡単。多分あなたのネットワークだけで終わる問題だから」

ああ、クロネコさん相手か……と嘆息する。

クロネコさんというのは、変な名前の変人だ。ただおまけや趣味程度に情報屋のような仕事をしている関係で、僕らも世話になることが多い。

「ええ、ええ、住所は――。私達の事務所からちよつと歩いた所ね。えつ、直接会いに来ないのかですつて？ いえいえ、そちらも忙しいでしょうし、今回の案件ぐらいメールで充分……わかりました、わかりました行けばいいんですよ」

あの恋歌さんが、若干焦ったように対処する。

そんな相手は僕の知る限りで二人だった。一人は僕らの社長さんで、もう一人が情報屋のクロネコさんというわけだ。

「ふー、疲れた。有理君、クロネコさん。あなたに会いたがつてみたいよ」

「それは勘弁願いたいものです。あの人苦手なんで」

もつとも、あの人を得意とする人なんていそづにもないけれど。

恋歌さんがこちらに詰め寄り、がちりと僕の肩をつかむ。まあ、こんな事になるんじゃないかと思つてたけど。

「お・ね・が・い・ね。ユーリ君！」

「はっはっはっは、恋歌さん、顔が怖いですよ」

有無を言わせぬ、命令だった。

まあ今回の事件は僕が持ち込んだようなものだし、気は進まないが、仕方がない。草薙さんのアパートも、僕らの事務所やクロネコさんの根城と地味に近いというのもタイムリーだ。

歸りに、クロネコさんのトコに歩きで寄つて行こう……。どうせ、恋歌さんは付いて来てくれないだらうけど。

「にしても、これはこれは、予想外に楽しめそうだわね。今回はかりは乙女の味方にはなれそうもないけれど」

恋歌さんがにやりと笑い、楽しそうにスマートフォンを操作する。「うん、目処もたった、これで研究者としての活動ができそうで私は満足よ」

そしてスタスタと早足で歩き出す。

よほど楽しい発見があつたのか、どう見ても『ただの』ストーリーに対応するテンションではない。僕らの研究対象はいわゆるオカルトなんて呼ばれるものだからして、今回もやはり平凡無事には終わつてくれそうもなかった。

二歌(6)

「これはこれはこれは、有理君。首をながくしてお待ちしていましたよ」

えらいオーバリアクションで、黒のコートをはためかせるスタイルのいい男が、出迎えるに現れた。

「どうも、お久しぶりです。クロネコさん……」

恋歌さんと別れ、一人いつも待ち合わせに使っている電柱の前。ここから徒歩10分ぐらいの、僕らの事務所へ帰りたくて仕方がない。

「しばらく見ない間に、また成長されたようですね。男子三日会わざれば刮目して見よ、なんちゃって」

そつと僕の頬を撫でながら、心底嬉しそうに笑う男は、長めの前髪からのぞく切れ長の目をキラキラと輝かせている。いちいち、バツ！ とか ドド！ なんて効果音が聞こえてきそうな機敏な動きは、実際こんな普通の街路で見る限り、不自然でしかなかった。

近所に立ち並ぶ、一軒家やアパートの住民に見られてやしないかと、自意識過剰に辺りを見回してしまう。

「さて、いつものお約束。われわれ、悪の組織にいったいぜんたい何のごようですかね？」

頭にかぶったシルクハットを右手で押さえながら、黒のスーツの上から羽織ったコートが風もないのになびいている。曰く、これが彼にとつての正装で、悪の組織としてのプライドなのだそうだ。

「悪の組織って……これですか？」

クロネコさんの足元に、どこからともなく野良猫たちが寄ってくる。時間がたつといつもこうだ。さすがはクロネコ、と名乗るだけあって、猫には好かれているようだ。

「そちらの皆さんは私の同士ですよ。全国に広がるネットワークの構成要員なのでから」

「ほんとに、古風なインターネットですよ」

クロネコさんの持っている情報網の詳細まではわからないが、どうやら彼は小動物に好かれているようで、動物たちの力を借りたネットワークを形成している。知りたい情報はどこからともなく、構成要員とやらが持つてくる。本当に便利な情報屋。

「恋歌さんから聞いている通りです。人助けのため、ご協力お願いします」

「はい、わかりましたよ。こうやって直接会っていただけましたし、恋歌君のおかげですでに報酬も振り込まれております。と、いうわけではいい、どうぞ」

コートの下から、さっと取り出される一枚の茶封筒。

それを受け取ると、開けて中身を確認したい気持ちを抑え、脇に抱えた。クロネコさんは、執事みたいにお辞儀しながら、こちらをニマニマと見つめている。

これ一枚渡すだけでいいのに、さっさと最初に出しやがればよかったんだよ、という気持ちが膨らんでいく。

「最近楽しいですか？」

「楽しいですよ」

「最近仕事は儲かっていますか？」

「ぼちぼちですね」

「ふふ、聞きましたよ。宮城邸での活躍」

「それはどうも」

「どうぞ、存分に正義のために働いてください」

「そうさせて、いただきます」

最初っからすべて筒抜けだというのに、今更何を聞くつもりなのか……。受け取るものは受け取ったわけだし、さっさと帰らせてもらいたい。

「そっいえば……最近人を殺しましたか？」

「……」

途端、鋭い視線が僕を睨む。クロネコさんは僕の中の奥の方を探

るようにこちらを見ていた。

「冗談ですよ、冗談。相変わらず、恋歌君はあなたをきちんと教育されているようで、羨ましいかぎりです」

「なにがですか、なにが」

まったく……。

この人、ほんと何考えているかわかんないな。

二歌（7）

「うっはー。いやーひと仕事終わると気持ちがいいわぁ」

草薙さんから依頼を受けた次の日、早朝から恋歌さんは変にハイテンションだった。

昨日クロネコさんの相手をしたせいで、なんとなく精神的に披露した僕にその元気をわけてほしいもんだ。おかげで、昨日は事務所に帰ってきてから爆睡してしまった。

「コーヒーは自分で入れてくださいね。好みもありますし」

「ういー、了解」

仕事熱心とは到底呼べないような先輩ながら、これほど働いたというのは、趣味に関しての並々ならない情熱が発揮されたからだろう。こういうのも、趣味を仕事にしているとかいうやつかもしれない。もしくは自称研究者の探究心というやつだろうか。

事務所のキッチンでノホホンと朝食を作っていた僕は、追加で恋歌さんの分の卵を手取る。

「オムレツでいいですよね？」

「お願い、いつも通り、いや、いつも以上にふわふわのじゅくじゅくで」

Tシャツと、ジャージというラフな格好。

襟をパタパタさせながら、ぐったりと食卓の椅子に座る。ちらちらと何か柔らかくて幸せがつまってそうなものが見える。

胸とか、そういうの気にしてほしい……。もちろん、見たくないわけじゃないけど。

「結局、徹夜ですか？」

キッチンの作業スペースに向き直り、それなりに集中。

フライパンの熱に細心の注意をはらいながら、といった卵を投入する。

「そうよそうよ、クロネコさんの情報がビンゴでさー、つついし

なくていいのに報告書までつくっちゃったわよー」

卵が半熟で仕上がるぎりぎりのタイミングを見計らい、フライパンの縁でオムレツの形を整えていく。

「っていうことは、やっぱり超常現象がらみなんですか？」

「たしかにモノが無くなったり、動いたりってのはさー、超常現象にはありがちだよ。だけど、それと今回のが繋がってるってのはどうなのかなー」

ニマニマと恋歌さんが笑っている。

ああこれは僕をいじめている時の顔だと理解した。理解した時点で、今回の事件にオカルト的な要素が含まれているのは明白だった。「どうぞ、恋歌さん」

「ありがとう、やっぱ徹夜明けは熱々のコーヒーとコレにかぎるわねー」

自分で入れたらしいブラックコーヒーを飲むことで、恋歌さんの表情が微妙に覚醒していく。……ような表情。

「コーヒーってそんなにいいのですか？」

「そうねー、ブラックの美味しさのわからない有理君に教えてあげると……。これがあると目が覚めるし、気が引き締まるのよね、なんとなく！」

「なんとなく、ですか……」

なら、僕は甘々のミルクで砂糖なコーヒーで充分です。

「さて、朝御飯終わったら行きましようか、我社は迅速解決がモットーですから」

「そんなモットー初めて聞きましたよ」

なんだかいつもよりも、恋歌さんは今回の案件に対するモチベーションが高い気がする。

よっぽど草薙さんを助けたいと思ってくれているんだろうか。

「結局僕はクロネコさんのところにおつかいに行っただけなのに、もう解決ですか」

「いやー、私もびっくり。こんなスムーズに終わるなんて……。気

分がノっちゃって、報告用の資料も一晩で出来ちゃったし」

これが恋歌さんの本気というやつかもしれない。基本、やればやるほどできる人だから……。

「あ、やっぱりちよっと待って、このオムレツいつもより美味しいから、いつもより時間をかけて味わうわ」

「それはどうも、是非ゆっくり味わってください」

褒めてくれたのは単純に嬉しかった。

恋歌さんは、オムレツを一口食べ、なにやら頷いた後に、ちまちまコーヒーを飲むという作業を繰り返している。どうやら、出発まではもう少しかかるらしい。

二歌（８）

「こんにちは、草薙さん」

「ど、どうも……」

引きつった顔で僕らの招き入れる草薙さん。

そんな彼女なんかお構いなく、音符マークがつきそうな満面の笑顔でズカズカと上がりこむ恋歌さん。

二人の両極端な反応に、僕まで表情が引きつってくる。

「すいませんね、朝から。お昼ごはんの時間までには帰りますので」

「は、はあ……」

「急にごめんね、ほんとに。でも、草薙さんの身に何かあってからだと遅いしさ」

「うん、有理くん！　ありがとうね、心配してくれて」

草薙さんは元気を取り戻したようで、昨日と同じようにリビングまで僕らを案内した。

「で、どうでしたか？」

座布団の上に腰掛けると、いかにも心細い表情で草薙さんが切り出す。ストーカーがいるかもしれない、というのは女の子にとってかなりのストレスなんだろう。

「依頼の方、ストーカーの有無の確認でしたので、結果から申しますと……そういった人はいませんでしたね」

恋歌さんがキリつとした表情で仕事モードに入る。

けれど、僕は見てしまった。一瞬、草薙さんの方を見て、ニンマリと意地悪な笑みを浮かべた恋歌さんの姿を……。あれは意地悪をしている時の顔だった。

「ええー、こちら調査内容の報告書でございます」

恋歌さんは、胸ポケットにかけてあった伊達メガネをかけると、封筒に入れられていた１０枚程度のＡ４用紙を取り出した。

「恐らく、草薙さんが経験された不思議現象もイタズラあるいは、

気のせいだと考えられます。付近の住民などにも聞いたところ、最近その手のイタズラも増えているようで……詳しくは報告書の4ページをご覧ください」

僕のことは置いてけぼりで、どんどん説明が進んでいく。

今回ほとんど調査に関わっていない僕の出番はありそうもない。

「郵便受けにイタズラされてたのはあたしだけじゃなかったんですね」

「ええ、まあどこにでもある悪い子供のイタズラの一種でしょうね。他の住民の方も少なからず被害をうけているようで……。話を伺った所、大家さんが今後対抗策を行使してくださるみたいですよ」

草薙さんの表情が安心したように溶けていく。

よかった、よかった、やっぱり女性はそういう顔をしているのが一番だ。

「じゃあ室内の異変とかは……」

「そちらは8ページ辺りをご覧ください。出来合いのものですが、簡単に学術的な意味での、妖精論やポルターガイスト現象の情報を載せさせていただきました。まあ、一言でいって『気のせいだった』と思ってくださって結構ですよ。この部屋に生身の人間が荒らしにやってきたなんてことはありませんから」

冗談交じりに恋歌さんが笑う。

その様子に安心したのか、草薙さんはほっと一息つくと満面の笑顔で顔をあげた。

「ありがとうございます。ほんとに……ありがとうございますね、有理君！」

「えーっと、僕は特になにも」

今回ばかりは本気で何もしていないのだから、そうしか言えなかった。

しかし状況からいって引くかかることは多い。そもそも、こんな普通のストーカー事件に恋歌さんが報告書なんて大層なものをこさえるはずがないのだ。てつきり今回もオカルトな現象が絡んでいると予想していたし、安心していいなんて言葉、信じられるはずがな

い。

本当に大丈夫なんですよね……、と恋歌さんの方をジト目で睨む。
返ってきたのは、満面の意地悪顔だった。

二歌（8）（後書き）

毎週土曜日には更新するようになっていたのですが、ズレこみ……。すいません。

次回から解決というか解説編です。本日中にもう一話更新予定です。

二歌（9）

「ばいばいユーリ君。ほんとにありがとう。また連絡するね」

「僕は何もしてないよ……。それじゃあ、おじゃましました」

本当に今回は何もしてない。それがとても気持ちが悪い。

「ご依頼ありがとうございました。また何か御座いましたら、お気軽に、いつでもどうぞ。それでは、草薙さん、お・き・を・つ・けて。特に部屋の窓際とか……ね」

恋歌さんは去り際に、そんなことを言いながら、ふつと笑っていた。

草薙さんに音符マークのつきそうな声援で送り出された僕らはとぼとぼと帰路についた。アパートの階段を、妙に機嫌の良い恋歌さんと並んで下りていく。

「ストーカーはいなかった。ならハッピーエンドですね」

「それで終わるとでも？」

待っていましたとばかりに恋歌さんが意地悪な笑みを浮かべた。

ほんとに、この人はこういう時が一番輝いている節がある。さらりと長い黒髪をかき上げながら、恋歌さんが自分のコメカミの辺りを指で差した。

「この伊達メガネ、実はただのメガネじゃないのよね」

「はい？」

「文字通りの意味。ただものではないものが、『見える』の」

つい、ジト目になる。

信じていいのか、疑っているのか。あまりに胡散臭すぎる設定に半信半疑ながら、一応それが本物として話を進めることにした。

「人間……はいないですか？」

「少なくとも私たちのような『生身の人間』を、『人間』と定義するんならね」

それは言葉遊びなんだろう。

僕の目に、草薙さんの部屋には僕ら以外の知らない人は、誰も映らなかったことには変わりはない。

「ちなみにこの郵便受けが荒らされてたのは事実。恐らく誰かの『イタズラ』と判断されるようなことしか起こっていなかったのも事実」

アパートの入り口に並ぶ郵便受け。

これが全部荒らされたというのはどうということだろう。ターゲットが草薙さん一人なら、それは可笑しな話だ。可能性としてはイタズラと、何か得体の知れないもの、が今回の事件に同時に存在しているとか……。

「まったく、有理君は理屈で考えたがる。それは傲慢だよ、人の心なんてその節々で変わるんだから」

恋歌さんのヒントは相変わらずヒントにならなかった。

「これ、クロネコさんに貰った資料なんだけど、面白いことが書いてるよ」

渡された一枚のA4用紙に顔を近づける。

「成人男性の、交通事故死？　すぐそこの交差点ですね」

「そうそう、それが今回の事件の真相」

それが一体全体、何と関係があるというのか、僕は思考停止状態に陥って、ポカーンとアホのような顔をするしかなかった。

「私が見たのも多分その人の残り香みたいなのかな。……なんでも生前に同棲していた彼女の家が現在の草薙さんの家らしいわよ」

「それはなんとというか、草薙さんも物騒な物件を押し付けられたもんですね」

「そう？　死んでも愛した人の元に戻ろうとするなんて、立派なものよ。もつとも、辿り着くまでには色々郵便受けを漁ったりして調べたり、思い出したり、試行錯誤してたみたいだけど」

「それが、今回のストーリーカー騒ぎの真相なんですか？」

「少なくとも、生きた人間のストーリーカーなんてのはいないでしょ？　いるのは害のない立派な恋する男の子が一人だけ。窓際がお気に

入りで、生前はよくそこで彼女と談笑していたらしいわよ」

いまいち、釈然としなかった。

けれど、恋歌さんが害がないというのだから、それは本当なのだろう。さすがに、草薙さんに何かがあれば、僕らの仕事の信用に関わる。

「妙な同棲生活ですね……」

そう言葉にすると、少しだけ笑えてきた。

もっとも、人事だから笑えるだけで、僕個人としては絶対に願ひ下げだった。

二歌（9）（後書き）

日曜日中？　と言いきれない微妙な時間に投下……。お待ちせしました。

二歌目、ネタばらし。残りは軽いエピソードで終了の予定です。話の都合上、最後の方は一気に公開したくなりますね！。

二歌（学食）

「あ、草薙さん。おはよう！」

「ひっ！ ごめん。じゃあね」

露骨に女の子に避けられるリアクションというのは、思いの外心に深い傷を刻み付けるものだ。

「えー、なにかした……かな」

つつい小さい小さく呟き、愚痴をもらしてしまう。

時刻は早朝。午後からのテストに向けて、今日も今日とて学食の窓側の席で、勉強に興じていた。そんな僕に気づいた草薙さんのリアクションが、アレだった。

つい先日、土日の時間をつかってストーカーの心配を解決してあげはずなのに……。好感度はあがっても、なにか彼女に嫌われるようなことをした覚えはない。おかげさまで哲学のテストは乗り越えられたけれど……。

とはいうものの、中間テストはもう少し続く。今週さえ乗り切ればという最後の踏ん張りどころだった。もっとも、夏も本格的になつてくると今度は期末テストの心配をしないといけないわけだけだ。ああ、宮城さんの家にいたりしたGW辺りのことが懐かしい。

精神ダメージを一旦忘れ、再び勉強モードに入る。

「さて、さつさと中国語のお勉強に……」

「やつぽー、有理君。勉強進んでる？」

「れ、恋歌さん!？」

学食に突然現れた意外な人物。

あきらかに、学生の集団に馴染まない雰囲気をもった大人な女性、健全な男子生徒たちの視線を集めていた。夏っぽいキャミソールやひざ丈のジーンズは大学生っぽいラフさだったけれど、それだけでは恋歌さんのもつ大人っぽさは隠し切れなかったようだ。

「どとどとど、どうしているんですか？」

「いや、なんか大変みたいだから、応援しにきたただけけど」

シレッと言いながら、恋歌さんは当たり前のように、僕の横の席に腰掛ける。寂れた、油臭い学食に不釣り合いな光景だった。

「……疲れて昨日の夜から爆睡してたじゃないですか」

「いや、なんか目覚めがよくてねー。はっはっはっは」

草薙さんの事件の件で疲れが溜まっていた恋歌さんは、昨日は小学生みたいな時間に就寝して、僕が大学に出掛ける時も、布団を抱きしめて眠りこけていたのだった。

「もういいですよー。そういえば、さっき草薙さんに会いましたよ。露骨に避けられました……。ひどいと思いませんか？」

「はっはーん。にやにや」

恋歌さんはそんな僕の愚痴を聞くと、抑えきれないみたいにニヤニヤと頬を緩め始めた。

「まあ、そのね。彼女の身に何かあつてからだと遅いから、実は報告書の後ろのほうにこそつとね、注意書きというか蛇足の説明というか、例の同性カップルの片割れが交通事故で亡くなったって話を付け加えてて……」

「なるほど、気づいて、しまったと。窓際にご注意なんて、忠告までしてましたもんね」

「まあ一般的にいつて、害はないとはいえ、あんな場所さつさと引っ越すにかぎるでしょうね。ふっふ、愛し合うカップルの思い出の部屋に、他の女が居座るのも変な話だし」

死んだ後の人、幽霊のような存在の肩をもつ恋歌さん。

やつぱりこの人は根本的にロマンチストなようだ。

「でも幽霊つてたって、モノを少し動かしたりなんて物理干涉しかできないんですね。あのレベルだと……精々、アパート入り口の郵便受けに入ってた郵便物を、自室に持ち帰るぐらいしか」

「それでも十分にすごいだけだね。やはり習慣化していた行動というのは、物理現象化しやすいみたいね。おかげでお上の方に良い報告書が提出できそうだね」

「にしたって、そんなの気のせいレベルですよ。よく気づきましたね、ストーリーカーがいるかもしれないなんて」

どうしても、その理由がわからない。

おそらく、草薙さんの身の回りで起こったのは、郵便物が移動していたとか、部屋の物が勝手に整理されていたとかその程度のはずで、そこからストーリーカーに結びつけるなんて、いささか自意識過剰だと思ってしまう。

「有理君はわかってないねー」

「なにがですか？」

こういう時の恋歌さんは大体僕をいじめてくる。

曰く、お姉さんとしてのサガがそうさせるだの、そんなナリをしている僕が悪いだとか、めちゃくちゃな理屈だ。

「女の子はそういう意味では、見えないもの、聞こえないものを感じてしまうことが多いとも言えるわね」

「それは要するに、靈感が強いということですか？」

「うーん、恋する乙女は、好きな人に心配してほしい……なんて。

恋する乙女はみな、悲劇のヒロインなのかもねー。ま、今回はドンピシャ、事前に手を打ててよかった、よかった。二つの意味で」

恋歌さんは意味深なことを言うと、一人で満足したように、さつと切り替え、ずいっとこちらに寄って僕のテキストを覗き込んできた。

「あー、中国語ね。昔ちよつと話したことあるわ、これぐらいなら教えてあげれるかな」

「是非、お願い申し上げます」

「いいけど、交換条件。また今度、私のお願いなんでも聞いてもらうから」

二カッと、気持ち良い笑顔をした、恋歌さんの個人レッスンが始まる。

その『お願い』とやらの重さというか、なんかとんでもないこと頼まれそうだなー、なんて危機感もあったけれど、どうせ僕は二つ

返事しかできない。それが好きな人からのお願いとあれば、尚更だった。

二歌（学食）（後書き）

ええ、これにて二歌目、終了でございます。

今回はオカルト（心霊）現象が主なようにみえて、結局は恋愛が
らみだともいえるお話。

私は言葉を濁したがる典型的な日本人なため、抽象的な部分は察
していただければ幸いです。

恋歌さんが妙にやる気だった理由とか、草薙さんが有理君に依頼
した理由とか、とか……。まあ有理君はただの唐変木なわけですが
（笑）

次回、三歌目はオカルト（超能力）編です。有理君やら恋歌さん
の変な体質をちよろつと説明していけるかと思えます。多分、バト
ルもあるよ（笑）

では今回はこの辺りで、ではでは、また次回。

よろしければお気軽にご意見、ご感想いただければと思います。

コメントには（web拍手含め）返事させていただきます。

拍手の方、ありがとうございます。簡単なお礼掛け合いもござい
ますので、未見の方はよろしければどうぞ。

みなさまの応援が一番の創作の活力なのでございます。

三歌（1）

異能力なんてとんでもない、ただの病気よ、びよーき。

というのが、恋歌さんの主張だった。

「……」

「そんな目で見るな、照れる」

20代後半ぐらいの、爽やかな男性が僕の視線に照れていた。

場所は街中、久々に大学帰りに出勤する僕が、原付を止めて立ち寄ったコンビニで、適当なお菓子をチョイスし終えて店から出てきたその時。街道のベンチに座り込む男と目があつた。

ジト目になりながら、彼を見る。

それはその人がイケメンだったからとか、微妙にセンスのずれた珍妙な私服姿だったからとか、そういうわけじゃない。

「どうした、俺の方をそんなに見つめて……。嬉しいじゃないか」
キモい。

そこはかとなく、キモい。

肌蹴た柄シャツ。ダメージつき過ぎで露出の多くなった、ジーンズ。

色々と余分な属性がつきまくっている人だけど、見つけてしまったからには仕方がないと、嘆息する。

「あなた、人を殺したことがありますね？」

「……」

今度は男の人が黙る番だった。

「まさかとは思ったが、ばれるとはね。そういう君も、似たようなもんみたいじゃないか」

「それはそうかもしれませんが。けど、なんだか一緒にされるのは気に食わない気がします」

久しぶりの、濃度の高い異常者。そんな空気が彼にはある。僕や

恋歌さんと似た、一種の病人のような、違ふような……。

雰囲気には似たようなものを感じてはいるが、根本的な部分は人それぞれ、事情も、現れ方も、違ふというのが、オカルト現象の怖いところだ。

「何かお困りみたいですね？」

「あ、わかる。実は厄介ごとに巻き込まれててさー」

いたって深刻ではなさそうに、彼はヘラヘラと笑いながらそんなことを言う。

着ているシャツはしわくちゃで、かえり血こそないが、うつすらとした硝煙の臭いや、裏路地のゴミ溜めみたいな臭いが香水の奥にひっそりと残っている。服装のセンスだけじゃなく、まっとうな感じではない、直感的な感想を抱く。

「ついて来て下さい。事と次第によつては力になれるかもしれません。ま、お金とりますけど」

「お、ほんとに……。いやーこの辺りにその手の仕事してる輩がいるってんで探してたんだよね。君らも同業？ だったらついでに紹介してくれない。なんでも凄腕の便利屋がいるとかって……」

残念。

きつとそれは、僕らのことです。恋歌さんのいうならば、オカルト現象専門の便利やではなく、ただの人間研究が趣味のモノ好き、ってところだけど。

恋歌さんへの言い訳を考えながら、僕は男を事務所に案内するために原付を押して歩き出した。

三歌(2)

「有理君はもしかしたら凄腕の営業マンかもね。お金になるかはともかくとして」

嫌味というほどではなく、今回ばかりは褒められたようなニュアンスだったのは、偏に依頼主からお金の臭いを感じ取ることができたからだろう。

「いやー、なかなか古風な事務所っすね。その奥にこんな綺麗なお姉さんが鎮座してるとくりゃ、流行らないはずはないですよね」

「どうも、お褒めにあずかり光栄ですわ」

恋歌さんはしれっと流しながら、事務所の応接室的役割を果たすソファを置かれた一角で、例の男と対面する。

そんな恋歌さんの隣で僕も一応男が変なことしやしないかと、見守っていたりした。

「で、さっそく本題なのだけど……」

「俺は工藤勇太。まあ殺し屋みたいなことをしていた」

突然の工藤の告白に、恋歌さんは顔色一つ変えずに話を続ける。

「ただの殺し屋ではないみたいだけど？ 持ってるのかしら、いわゆる『異能』と呼ばれるのを？」

こんなひょろりとした今時の若者の平均みたいな体型の人が殺し屋というのだから、それはただの殺し屋ではない。

銃器や格闘技や隠密行動で、敵を追い込むのが本物の仕事。僕らみたいな異質な人間は、相手を油断させるほど、世間と同じ殻をかぶれるほど、優秀な殺し屋として行動できる。

なにせ、相手の経験則や戦闘経験は役に立たず、思いもしない攻撃方法で、人を殺せるのが異能というものだから。

「まあ、それはおいおい、な。さすがにあんたらでも俺のトップシューレットは話せないぜ」

「確かにそうでしょうね」

恋歌さんはくすりと笑い、話を続ける。

「ここはなんの組織なんだ？ 超常現象研究所、と気持ち程度に立て札がされていた記憶はあるが」

「建前上は調査機関よ。いわゆる中立、私達の元締めもあなたのいたところも多少のつながりはあるでしょうね」

「おうおう、そりゃあ話が早いこつて」

工藤は楽しそうに口元を緩めながら、膝を叩いて喜びを表現する。僕はあくまで調査機関で、あくまで上に報告するのも調査だけで、結果得られる調査報酬と調査結果で運営されている、ただの便利屋。

なのに、今回は自称殺し屋の相手をしないとイケないのだから、難儀なものだ。

「まあ依頼つてのは簡単なことで、俺が元いた組織から匿ってほしいうってだけだ。大丈夫、結構汚いこともする組織だから、君らの良心は傷つかないだろうさ。ちなみに、報酬はそれなりに用意できると思う。殺し屋つてのは手取りがいいからな」

それはつまり、この優男も『汚いこと』をしてきたということだった。

けれど、それを許せてしまうような雰囲気が目の中の男にはあった。何故かはわからないが……。

「あ、タバコいいかな」

「どうぞ。有理君に怒られない程度になら」

「おっと、そいつは難しそうだ。残念だが、今はやめとくぜ」

工藤が笑いながら、こちらにウィンを飛ばしてくる。

最初に抱いた印象通り、こいつは油断ならない変な奴だ。それが表情に出ていたのか、僕は彼を睨みつけていたようだった。

三歌(3)

「さて、今回ばかりはさすがに社長に連絡つけないといけないかしら」

恋歌さんは自称雇われ社員だった。僕はその社長さんを見たことはないが、形式上僕の上司にもあたる、この場所で一番偉い人。

といっても、なにやら世界中を飛び回ってるような忙しい人みたいなので、僕たちの仕事に関わってくることは今までほとんどなかった。

「しかも、都合よく今、一時的に日本に滞在してるのよねー、これが」

工藤の依頼内容を聞き終え、束の間の小休憩。

お客さんである工藤は応接室のソファに残して、僕らは生活スペースの方でまったりしていた。あんなチャライ男は適当に扱っていいだろう。依頼人だけど。

「今回の依頼って相当やばいんですか？」

「……まあある意味最強の有理君がいるから、大丈夫っちゃ大丈夫だけど。もしかすると荒事になるかもね」

それは勘弁願いたい。

「オカルト分野に精通した戦闘組織だもんねー。しかもそこから逃げようだなんて、命がいくらあっても足りそうもないわ」

「異能力、ですか」

「そんなもの、戦闘利用して何になるっていうのかしら。ほんとにクソ喰らえってところね」

超常現象的变化の、戦闘利用。そんなのは恋歌さんの、僕らの考え方とは真逆の思想だった。超常現象なんてのは、ただの人間が、ただの悩みで発現する病気のようなもので、それはごくごく普通の誰にでも起こる事象なのだ。

決して僕らは特別ではない。

特別だと思つて、力を振るつてはいけない。

ましてや、人を殺すなんていうのは……。

否定はできない、生きるために強いられる人もいるし、異能なんてハンデを背負わされれば、日常世界で生きて行くのは辛くなる。誰もかれもが、僕や霞美さんのような恵まれた人間ではないのだ。

この先、工藤のように割り切った利用されているだけの人間ならまだいいが、エゴむき出しの人間に出会った時、僕はどこまで耐えられるだろうか。

「ダイジョブ、ダイジョブ。有理くんはそんなのじゃないから」

恋歌さんが優しく頭を撫でてくれる。

それだけで、沈んだ気持ちが軽くなる。

「いざつて時は守らせてもらいますよ、恋歌さん」

「頼りにしてるわよ。有理君！」

ぽんつと額に軽いデコピンを飛ばされた。

恋歌さんも単体で十分強いから、僕が守らなくても大丈夫だろうけど。そこはまあ、男の意地というやつだ。吸血鬼特有の弱点も恋歌さんには有ることだし……。

「あー暑い、暑い。毎日こう暑いとやる気も出ないわよね。太陽が憎らしい」

窓から入り込む太陽の光に、目を細める自称吸血鬼。

苦手、ではあるらしい。日焼け止めも欠かせないらしい。

綺麗な色白の肌を守っていただくのは大いに結構だが、吸血鬼としてそれでいいのかとは、たまに言いたくなる。

「危険がある分、たんまりと報酬はいただいちゃいましょう。それでエアコンやら扇風機新調するのもいいわね。ほら、あれほしい。羽のない扇風機」

知的好奇心よりも、守銭奴としての顔が覗く恋歌さんの横顔はちよっぴりいつもより悪そうだった。

三歌（4）

「うわ、カプチーノじゃねえか、これ。渋い趣味してんなー」

「くー、わかる、わかる！ いいわよねこの車！ 軽くて小さいのにすっごいのよー。しかも藍色が夜の闇に溶け込むさまといったら……」

恋歌さんと工藤がガレージ付近で盛り上がっていた。

社長に会いに行くため早速車での移動が必要だった。日が暮れ始めて、気温が下がってきたのはいいのだが、なんだか二人が勝手に盛り上がっているのが気に入らない。

「有理君は車に全然興味ないしさ……。カプチーノなんて、ただのコーヒーの飲み方だとしか理解してないのよね」

「はっはっは、そりゃあいただけないな少年。ま、そんな無垢な所も魅力だが」

二人はなにやら、カプチーノがどうのこうのと騒いでいる。僕には意味がわからないが、馬鹿にされたことだけはわかった。

「あー、てかさー。恋歌さん？ カプチーノってことは二人乗りだよね、これ」

「そりゃそうだけど」

「それってさ、あそこの少年がはぶられるってこと？」

「あなたは一応依頼主ですから、私が送って行くつもりですが」

工藤がこちらをすまなさそうに見ている。

話をなんとなく理解してきた。要するに今我が社にある車は二人乗りなわけで、今から移動するのは三人。なら単純な引き算で誰か一人が別の手段で移動しなければならない。

「有理君。確か今日原付だったわよね」

「そう……ですけど」

わかっている。一応工藤は依頼主なわけで、しかも僕は今日原付でここまで来てしまった。

どうするべきかはわかりきっている。けれど、なんとなく気に食わない。きつとそれは、僕がこの工藤って男を警戒しているからだろう。

もちろん、独占欲や嫉妬とかもあるかもしれないけど。

「じゃあ、悪いけど、原付でお願いねー。私達先に行ってるから」「了解しました。おまかせください。それでも大学には原付で通ってるんです」

もつとも、その大学への通学は週1〜3という残念な数字を残していた。

「悪いな、少年。でも安心しろ、俺は……俺はな……」

恋歌さんに催促され、工藤が無理やり助手席に座らされた。

工藤は車のドアが閉まる間に僕に何か伝えようとしたみたいだけど、すべてを聞き取ることはできなかった。

「じゃ、有理君また後で！ だいたい、この車についてくればいいからー。一度だけ行ったことのある場所だから大丈夫だと思うけど、わかんなくなったら電話してねー」

一人残される僕は、原付のエンジンを、虚しい気持ちを振り払うようにキックで、スタートさせたのだった。

三歌（4）（後書き）

一応イメージとしてカプチーノという実在の車を持ってきました。
唐突に思い出したせいで、将来的に乗ってみたいくなるという罠。

三歌（5）

30分ほどで着いた、大通りの脇道。

ビルの地下駐車場へ下りて、原付を止める。ヘルメットを脱いで周りを確認すると、社長がいる一階へと続く階段の傍で、恋歌さんが妙に疲れた表情をしてうなだれていた。

「恋歌さん。なんでそんなにげっそりした顔してるんですか」

「いやね、こいつが逃げ出した理由を詳しく聞いてただけど……」
基本的に（お金をおとしてくれる）依頼人には優しく、丁寧に接する恋歌さんにはあるまじき、こいつ呼ばわり。

工藤への態度があからさまに嫌悪感丸出しのものに変わっていた。
「否定はしたくはないの。ええ、でもなんていうか生理的に無理。妙に生々しかったし」

「どういうことですか？」

話が見えず、睨むように工藤の方を向く。

「ああ、俺ホモなんだよ。ゲイでも可」

きつとこの時、僕はぽかーつとあほみたいに口を開けていたのだろっ。

「じゃ、じゃあ、そ、その、僕のこと魅力的だとか言ってたのって

……」

「うん、そのままの意味だ」

そして、同時に身の危険を感じる。

冷や汗がフーッと首筋を伝い、反射的にぶるっと身体を揺らした。そんな人もいる、と頭ではわかっているけれど、いざこれほど大っぴらな人間に出会った中インパクトがあるもんだ。

「有理君。気をつけて、ほんとに気をつけてね。特に背後とかお尻とかお尻とか」

「いや、それはさすがに……」

恋歌さんが半ば本気でそんなことを言うので、僕まで心配になっ

てくる。

「とつとと行かないのか？ いやすまん。俺も命を狙われてる身なんで」

お前が言うのか、という感じだったが、工藤の進言はもつともなことだったので、恋歌さんとアイコンタクトで慰めあい、社長のもとに向かうため階段を上り始める。

コンクリートがむき出しの無骨な雑居ビル。

足音が無機質な響きを鳴らし、一定のリズムで室内へと反響する。

「クロネコさんの次に、会いたくない相手ってところよね……」

「僕なんて、会うの3度目ぐらいなんですよ……」

恋歌さんですら、焦った表情をしている。

当然、付き合いの短い僕の方が、精神的な準備は足りていないわけ、足がすぐみそうになるのを必死で抑え、階段を上り続ける。

「社長に会っただけだったのに、随分大層なんだな」

唯一、状況が飲み込めていない工藤だけは、脳天気な顔で、僕の背後を嬉しそうに歩いていた。

地下階段から上った先、徐々に社長が居るだろう部屋の、豪華な装飾がほどこされた場違いな扉が見えてくる。一階には他のテナントが入っておらず、パツと見た感じだと他の階の企業も訳ありな臭いが香ばしい。

「つと、確かにこりゃあビビるわな。大層お強い御仁がお待ちのようだ」

さすがというところか、自称殺し屋だった工藤も社長の威圧感に気づいたようだ。もつともあの人は、基本的に自分に厳しく身内に鬼畜で、他人（特にか弱い乙女とか）にめっぼう甘い、という感じだからして、工藤へのプレッシャーはたいしたものではないだろう。僕だって、特にとって食われるわけではないと思う。

まあ、まともに闘って勝てるはずもないけど。

「さて、それじゃあ……行くわよ！」

緊張しているのか、声を震わせながら、恋歌さんがドアの取っ手

を掴む。額に汗を浮かべ、緊張と、嬉しさの同居したような、なんとも言えない高揚した表情が、なんだか色っぽい。

社長は恋歌さんにとって、目標で憧れで恩人みたいな人なので、そつなるのも仕方がない。もつとも、相手が相手、憧れも強すぎれば、自身のコンプレックスを浮き彫りにされているのと同じだ。

「あら、こんにちわ。待ってたわよ。恋歌、それと……有理君♪」

開口一番、僕が名指しで出迎えられた。それだけで、危機感が加速する。

一階のほとんどを占拠する社長の事務所。奥の窓際に位置する一対のオフィス机と椅子、そして手前には余りきつたスペースに適当に置かれたドデカイソファ。窓際の椅子でくつろいでいた社長が、僕たちを迎えるように軽く手を振ってきた。

長すぎる髪の毛を無理やり結いつけたような綺麗な後ろ髪には、和風なかんざしまで刺さっている。それがまた似あっているのがこの人のコワイところだ。一見して年齢不詳、恋歌さんも美人だが、この人は美しいというよりも造形が完璧だった。一つ一つが洗練され、研磨されつくし、一切の無駄がないような感覚。

それがなんだか、気に食わない。

「今日わ急ぎですまないわね。仕事の説明と行きましょうか。みんな、よろしくたのむわよ」

けれど、僕は恋歌さん以上に、この社長という人に逆らえるはずもなく、ただただいじめられるのだろう、ちよつと先の未来が容易に想像できてしまった。

三歌（6）

「こちら有理です。どうぞー」

「はい、大丈夫ですわよ。有理君」

耳に装着されたヘッドセット。ハンズフリーで会話ができるように装備されたものだ。本職の仕事の人が付けているような、本格的なものではない。携帯電話に繋いだだけの簡易的な通信手段。

場所は先程の地下駐車場、無造作に止められた大型車の影。折角上がったオフィスは早々に追い出されて、階段の下に逆戻りした形だ。

「なんといいですか、毎回ながら社長様の手腕にはびっくりさせられっぱなしです」

「それわそれわ、毎回ごめんなさいね。でも、これわ期待の裏返しなのだよ」

奇妙なイントネーションが、耳によく馴染む。なんだかんだで、この人は恋歌さんに似ている部分も多くあって、嫌いなタイプではない。

単に、出会うたびに、酷い目に会わされると、威圧感というか王者の貫禄みたいなのが強すぎるのが、小市民な僕には辛いだけだ。「相手は殺し屋の組織。わたしの方から情報をリークすれば、あなたたちを追わせるなんていうのわ、朝飯前なのだわね」

「それを僕らみたいな素人だけで返り討ちにしようってんだから、恐れ入ります」

「まあいざって時わ、命ぐらいわ助けてあげるわよ」

もともと恋歌さんだけでなく、社長が出張ってきている時点で、僕らに負けはない。こうやって社長がブレイン役をやっているのは、僕らの力を試しているだけなのだろう。

「恋歌さん、大丈夫ですか？」

「大丈夫もなにも、今回の私はフォロー要員だからね、有理君こそ

大丈夫？ 久しぶりじゃないの、こんな実戦って」

一旦社長との通話をきり、恋歌さんへと繋ぐ。

「なんとか頑張ってみます。自信、ないですけど」

掌を開き、ゆつくりとぐーとぱーを繰り返す。

感覚は悪くない、だけど握力やら腕力はいつも通り、絶望的に足りてはいなかった。

「まあ工藤も頑張ってくれるみたいだし、最悪あいつになすりつければいいんじゃない？」

仮にも依頼主だというのに、ひどい扱いだった。

「おい、有理君。聞こえるか？」

「なんですか気持ち悪い」

そんな僕たちの会話に割り込む形で、工藤から通話が入った。仕方なく恋歌さんとの会話を中断して、工藤の相手をする。

「おいおい、いくら俺がゲイだからって、その反応は傷つくじゃないか」

「いえ、ゲイとか関係なく、工藤さんはそこはかとなく気持ち悪いですから」

第一印象からして、そんなのだからタチが悪い。イケメンなのに、これほど人に嫌悪感を抱かせる容姿や雰囲気というのはどうなんだろう。

「わかってないねー。そうやって嫌がる相手を籠絡していくのが楽しいんじゃないか」

ほんとに、どうしようもない人だった。

「まあ冗談はこのぐらいにして、どうやら戦闘要員？ つばいのは俺と君だけみたいだから、軽い打ち合わせを、と思ってな」

「社長から必要最低限の説明しかされなかったですからね」

すぐに追手が来るから準備しろと、今の配置に付かされるまでに5分もかからなかった。まあ、社長の作戦だから、僕らが普段どおりに動けば成功は容易いのだろう。

「有理君はどうなの？ だいぶ強かったりするわけ？」

「戦闘力は成人男性より遥かに劣ります。能力、というのが使えれば……まあ大概のことはなんとかなると思いますよ」

「使えれば、ってことは不安定だったりするの？」

「普段は封印されている、と思ってください」

恋歌さんのおかげで僕は普段、一般人として生活できている。けれど、今回は荒事になりそうだからと、吸血タイムはなし。

もっとも吸血行動を封じられて、一番辛いのは恋歌さんのはずだけど、……なんとなく寂しく思ってる僕は随分と調教されてしまったらしい。

「さて、楽しい楽しいお話の時間はここまでみたいだな。ま、俺にまかせろ。良い男の前では張り切らないわけにはいかないからな」

「気持ち悪いですが、戦力としては期待させていただきますね」

さて、と気分を切り替える。

駐車場に入ってくる車の音が、工藤の携帯越しに聞こえてきた。

ドキドキと高鳴る胸を抑え、気持ちを落ちつかせる。

というのが、リラックスする方法だと思ったのだけど……。

どうもそうはいかないらしい。

僕は、というより人間というのは、異能の力なんてのを振るうのが、楽しくて、嬉しくて、待ち遠しくて、しょうがないらしかった。

三歌（7）

敵が銃を持っているというのは、ある意味想定内だった。けれど、予想できていたからって対処できるわけじゃない。

「激しい銃撃戦っぱいのが始まってしまったんですが……」

「あらあら、頑張らないといけないわね」

なのに、社長は余裕綽々な風に高見の見物という感じだ。

車が地下駐車場に乗り入れてきてからの行動はさすがはプロ。車を盾に、入り口を塞ぎつつ、実行部隊が攻めてきた。

「有理くん。こっちも援護してくれよ。さすがにこの数はきつい」

黒塗りのワゴン車で現れた屈強な男が6人。銃を主体とした兵装、隊列での攻撃。

当然僕たちは防戦一方なわけで……。僕は囷役として入り口付近で戦っている工藤に近づくため、恋歌さんお氣に入りの藍色スポーツカーを盾にするはめになっていた。

「つく、銃なんて生っちよろいもん使ってんじゃねえよ！」

工藤が叫ぶと、空中に赤い炎が輝き始める。高熱が帯のように広がって、銃弾を防ぎきっているようだ。

「ベタな能力なんですね、工藤さんのつて」

「うるさい、俺は熱い男なんだよ」

工藤はおちゃらけた雰囲気が消え、言葉使いも乱暴になっている。「有理くん、私の見たところ、敵は能力者が3人。残りが対能力者装備のプロつてところね。工藤みたいな能力頼みの奴らじゃなくて、全員ちゃんと訓練を積んだプロみたい。物量と火力で制圧するつもりだったんでしょね」

「思ったより、異能者は少ないみたいで」

「その方が、チームとしては優秀なんでしょ。所詮は異能なんてのは、異常だからこそその、副産物だから」

そっという相手の方がやかいだった。

異能バトルなんて、馬鹿馬鹿しいものを始めるつもりはないけれど、所詮戦闘力皆無の僕は、正攻法で勝てるわけがない。必然的に奇襲やら能力の隙をつくなり、一方的に攻撃できるチャンスが必要だった。

「私は念のため一階事務所側に移動するね。別働隊がいるみたいでさ」

「れ、恋歌さん？ 気をつけてくださいよ……」

車の陰から一歩足を踏み出し、前へ出る。恋歌さんも心配だが、今は目の前の敵を倒しきるのが先決だ。

「あらあら、ごめんないね。別働隊がビル側に回ってるとは、わたしなりに誘導したつもりだったのだけど、十分じゃなかったみたい」

「いざって時は頼みましたよ」

社長からの着信に、そんな言葉を返す。

少なくとも命だけは、命ぐらいは守ってほしいものだ。

「喋ってる暇も、ないか」

舌を噛む、ってほど素早い動きをするつもりはない。だけど、避ければ銃弾の餌食になってしまう。出来ないことは出来ない、けれど、やらなければ死んでしまう。

そういう危機感が大切だ。そういう危機感が、僕の奥底の何かを覚醒させてくれる。銃弾が顔の傍を通って行くのが見えた。意識は結果へ、そして自分が行動するべき事だけを頭の中で一杯にさせる。避けなければならぬ、移動しなければならぬ、近づかなければならない。

相手は二人。工藤に一番近い位置にいる奴らだ。

「失礼、なんとか間に合ったようです」

工藤が炎で牽制していた、映画に出てくるアメリカの特殊部隊みたいな男たちから、物騒なごちゃごちゃした銃を奪ってやった。

突然現れた僕に面喰らっているのか、敵の反応が一瞬止まる。そこを見逃さないのは、さすが殺し屋ってところか。

「こいつら、俺のこと知ってるからって、炎の対策しやがって……」。

「まあ俺は殺し屋だからさ。銃撃戦は得意じゃないけど、殺し合いは得意だぜ。蹴りや殴りも、能力の使い次第で威力ぐらいはアツプできるしな」

むこうだってプロだろうに……。所謂パイロキネシス能力があるといっても、相手を圧倒できるのは、工藤自身の戦闘能力も十分高いからだろう。

応用、転用、異能というのは奥が深い。使い手次第で、どんな形にも、どんな事にも利用出来る。

「さつて、後一人……だな。つっても、こうなるのを待ってたんだろ、なあ！」

ついには後一人。通話越してはない、直接地下に響くほどに声を荒らげて工藤が叫んでいた。

相手が弱すぎる、とは僕も思っていた。社長の手回しがあつたとしても、これほどすんなり行くのには違和感があつた。

「工藤、よくうちの部下をこんなにもやってくれたな」

「手抜きしてたのはあんただろう？ それに、殺しちゃいねえよ」

「ふん、『あいつ』のことは殺したのになあ！」

最後に残った男は、装備していたヘルメットを脱ぎ捨て、白髪頭をさらけ出した。悲しみや怒りや感情がグチャ混ぜになったような奇妙な表情をした、中年の男。白髪頭ややつれた表情も相まって、随分老けたようにも見えるが、姿勢や雰囲気はまだまだ若々しく、戦士として現役だと教えてくれた。

「銃はいらん。どうせ、効かんしな。お前は直接俺の手で殺す……というのが、この気持ちを晴らす方法かもしれない」

「あんたの能力は、聞いたことなかったな。なんでも眠るように静かに人を殺すのが得意らしいが」

「お前なんぞを楽に殺してやるほど、お人好しではない」

銃を投げ捨て、ボクサーのような構えで、工藤に対する中年の男。工藤のようなひよろひよろの身体ではなく、ガッチリとした鍛えこまれた姿からは、強敵の雰囲気がある。

「始まった、わね」

「社長ですか……、これ知ってたんですか？」

「依頼人の抱える『問題』を解決する。恋歌風にいうのなら、研究調査する。っていうのがわたしたちの生業なのだよ」

社長が電話越しに、くすりと笑う。

どうやらこの戦いの舞台は仕組まれたものらしかった。僕は彼らの再開をお膳立てしてしまっただけらしい。

「そんなことより、ドアの前の音を聞く限り、恋歌が苦戦してるみたいだよ。フォーに行っただろうが良いかもしれないわね」

「それを早く言うてください！」

車の陰から走り出す。タイミング良く、敵さんは銃を手放し、工藤と昔ながらのタイムマンっぽいのはっぴだった。

恋歌さんがいる一階事務所前の廊下へ向かいながら、二人の男を横目で見ると、工藤が炎も出さずに、苦しげな表情で蹴りを繰り返しているのが確認できた。

その姿はどこか、死に急いでいるようにも見えたのは……僕の気のせいだということに、しておいた。

三歌（7）（後書き）

戦闘シーン？ って描写が大変ですね。意味不明な言葉を書いていないか、心配ですw おかげさまでめずらしく一話が3千文字近くに……。

そろそろ三歌も終わりが近づいてまいりました。

三歌（8）

「あらあら、急がないと恋歌が大声では言えない、所謂成人同人漫画のような事になってしまいかもしれないわよ」

社長の、独特のイントネーションがこの時ばかりはうざったい。

地下駐車場から、ビルの一階へと続くコンクリートの階段を、息をきらせて上って行く。

「わたしわ思うのだわ。男の子が一番力を発揮できるのわ、案外こういう状況なのでわないかとね」

足りない筋力や速度は、心臓を、身体の細胞を、全宇宙の時間を、すべて止めることで補っていく。いや、本当に止められたかなんて知る由もないけれど、僕ができるのは結果を導きだすまでの過程をすっ飛ばすだけなのだ。

何でもいいから、少しでも早く、恋歌さんの所に向かいたい。

もう一段上ろうと足を踏み出す。そして記憶が飛び、奇妙な感覚のまま、気づいた時には先程より一段上の段に足を降ろし終えた自分がいる。意識と結果のズレ。

目的を意識し、行動することによって得られるはずの結果。過程を飛ばし、そこにダイレクトに到達するような、奇妙な感覚だけを重ね続ける。

それはある意味、今やったような、階段を一段飛ばしで駆け上がるような方法なのだろう。

「時間を止めている。というのわ、いささか早計なのかもしれないのだけれど、そう現すのがわかりやすいのだわね」

「おかげで、僕は二十歳も間近になって、小学生並みの身体能力ですよ」

「噂に聞くとところによると、あそこもつるつるなんだったわよね？」

「うわあああああああああ。こんな時に、凹む情報を

喋り出さないでくださいよ」

半ば、ヤケになりながら叫んでやった。いったい、どこのどんな噂を聞いたのか……とてつもなく不安になる。

大丈夫、最近は恋歌さんの吸血行為による、異能の一時的な封印のおかげで、成長というのが戻ってきた。

身長だって、徐々にだけ伸び始めている。ギリギリ150mしかない僕の身体も、きっと気づけば160くらいにはなるはずだ。だから、なにも焦ることはない。

階段を上りきり、事務所前の廊下を見渡す。

二人、黒スーツの男が倒れているのを確認して、その奥で恋歌さんが、銃を持った剃り込み頭の巨漢に、掴まれているのが……。

それを意識し、認識しきったとき、気づくと僕は、その男のことをぶん殴っていた。

もちろん、一発では足りない、僕程度の攻撃力じゃあ、一度や二度叩いただけでは足りないのだ。恋歌さんに教わった合気道や、太極拳の知識をフル動員しつつ、殴り、叩き、押す、という結果だけを残し、身体の急所とやらを執拗に狙い続けた。

やがて、男が倒れ伏すのを確認して、呼吸を再開。

新鮮な酸素が身体に循環し始め、徐々に感覚が元に戻って行くのを感じた。

「あれま、戦ってる相手が突然倒れるなんてオカルトってのは、中々奇妙なものね」

「だ、大丈夫ですか、れ、恋歌さん」

階段を全力疾走。その後能力を使って即戦闘開始。

ぜーはーぜーはー、と情けなく肩で息をするには十分すぎるほどの運動だった。

「有理君の方がとても大丈夫には見えないけど……。とりあえずありがとっ、おかげで怪我しなくてすんだわ」

銃で武装したそっち方面のプロに対して、1対3の戦闘をこなしてしまうのだから、僕がいなくても、きっと恋歌さんは怪我なんて

しなかったのだろう。

案外、僕が先程必死こいて倒した剃り込みの男は、恋歌さんが合気道的に相手の力を利用して綺麗に投げ捨てる、一歩手前だったのかもしれない。

けど、それでも真っ先に、恋歌さんのことは僕が助けたいというのは、男として当然の、ある意味どうしようもない欲求だった。

「ごくろさまだわ。……こいつらわただのヤクザかなんかだわね。金で雇われた……囧？ 違うわね、邪魔されないようにアッチも手を打ってたつてところかしら。おかげで裏をかれて地下以外の侵入経路からやられるとわ。してやられたのだわ」

ゆつくりと、事務所のドアが開き、社長が姿を現した。ぴつちりと着こなされた藍色のスーツ姿が眩しい。

社長は、廊下に転がる、怖い顔のお兄さんたちを物色し終わると、楽しそうに笑いながら、僕たちにアイコンタクトを飛ばす。あれは今から何か楽しいことがあるから、期待してなさいという顔だ。「工藤の方も、終わったようだし、そろそろ依頼完遂といきたいのだわね」

和風に結わえられた髪の毛に、深々と突き刺さった一本のかんざし。先端に付けられた金色の装飾を揺らしながら、社長が優雅に歩き出す。

その姿を見て、僕はやっと事が終わったのだと安心するのだった。

三歌（9）

社長、恋歌さん。

この二人の趣味趣向というのは、似ている。要するに彼女たちがもつとも楽しいと思うこと。それは人の中身を丸裸にして、手助けしたり、きっかけを与えてやったり、分析してみたりする、正義のヒーロー？ みたいなことなのだ。

そのやり方や手口はあまり趣味の良いものとは言えそうもないけど。

「よっ、お疲れさん。皆無事だったみたいだな」

階段を降りたどり着いた地下駐車場の奥、『組織』とやらが置いて行ったワゴン車にもたれかかりながら、工藤がタバコをふかしていた。

「一番大変だったのはあなただったでしょうに。目的わ達成できたかしら」

「あんたの差し金だろ……。ったく、ケツタイな舞台を揃えてくれたもんだ」

工藤が顎で指す先には、乗り込んできた組織の連中が簀巻きにされ、まとめられていた。けれど、僕の記憶が確かなら、一人足りない。

最後に僕が見た、工藤と一対一で戦っていた中年の男の姿がなかった。

「工藤さん。あの人は？」

「あいつか……。ったくあいつめ、空気中の酸素をいじれる能力だったか？ 俺の炎がまるで効かないでやんの」

「いやいや、戦いの結果は工藤さんが無事なのを見れば勝ったってわかるけど、そうじゃなくて」

「タイムンだったよ。男と男同士のな」

それだけ言うと、工藤は再びタバコに集中し始めた。先端の赤い

熱に心奪われたように、ゆっくりと確認しながら、そこだけを見つめ続ける。

「そう、ですか」

ここは素直に引き下がっておくことにした。

工藤の能力だ。もしかすると、灰になるまで相手を燃やすこともできるのかもしれない。それに、卑怯な方法を使えば、後日恋歌さんにでも訊けば事の詳細はわかる。

でもまあ、こんな変態でおちゃらけた奴にも、知られたくないことぐらいは、あるのだろう。

「それじゃあさっさと行くのだね。せつかく追手を一時的に撃退したのだから、逃げるなら今、なのよ」

さあ行こう。僕たちは何も戦いたくて、戦ったわけではない。

困っている人がいたから、その人を助けるために、戦ったのだ。なら、ここで焦燥感に身を任せている暇はない。

「そういえば、恋歌さんの姿が……」

駐車場出口付近のワゴン車から、振り向いて恋歌さんを探す。

「私の、私の車が……」

恋歌さんは愛車の変わり果てた姿に絶望し、涙目になりながらボンネットに頬ずりをしていた。そのボンネットには痛々しい無数の銃痕が残っている。

「うええええええん、私の、私の可愛いカプチーノが」

「れ、恋歌さん。きつと、治りますよ、これぐらい。たぶん、きつと、絶対」

思わず飛び出した変な日本語で、恋歌さんを慰める。言えない、言えやしない。交戦中、仕方なくこの車盾にしましたなんて、とてもとても。

にしても、子供のように悲しみ、涙目になる恋歌さんは予想以上に、可愛かった。正直、恋歌さんには悪いが、もうしばらく眺めていたい欲望にかられる。

「ほらほら、その二人、さっさと行くのだね。恋歌もいつまでも

そんな軽自動車のことで悲しんでないで、わたしの愛車に乗るのだよ」

「おいおい、今度はFCかよ……」

工藤はなにやら、ロータリーがどうのこうのと言いながら、助手席に乗り込んでいた。

駐車場の奥のほうにでもしまわれていたのか、完璧に無傷な白色の社長の車。恋歌さんの軽自動車と比べると、随分大きく、ずっしりとした安心感があつた。

「恋歌もロータリーにしないで。良い機会だし」

「なんで社長の車は無事なんですかぁー。どうしてですかぁ？」

伊達メガネを外し、とうとう泣き出しそうな恋歌さんに寄り添い、背中をさすりながら、社長の車へと向かう。

よほどショックだったのだろう。ごめんなさい、恋歌さん。

「さて、空港までフルスピードだわ。そこいらに転がってる侵入者の後始末わ安心して、すでに手回しておいたのだわ」

僕らが後部座席に座ると、早速社長はアクセルを踏み、急発進。

恋歌さんよりも乱暴そうな運転に、僕はシートベルトをしつかりと装着するのだった。

三歌（9）（後書き）

予想以上に長くなった今回の話。もうちょっとだけ続きます。
社長は思いつきで口調設定を加えましたが、良く味が出て、動かしやすいです。

では、何か御座いましたら、お気軽にweb拍手やらで私のやる気支援、または技術向上のためにフルボッコにしてやってください。読了ありがとうございます。

三歌（10）

一番近い国際空港に着く頃には、すっかりと日が傾いていた。これでも移動時間はかなり短縮されたほうだ。社長の運転技術と車の性能によって……。やっぱ普通自動車ってすごいんだな、なんて車に詳しくない僕ですら思ってしまった。

「それじゃあ、行ってくるぜ」

うつすらとだけ残る夕日をバックに、さわやかな笑顔でこちらを向く工藤は、ムカツクほどに様になっている。これがホモで変態だというのだから、もったいない話だ。

「元気で暮らしてくださいねー。色々大変だとは思いますが」

「ありがとうな。男と結婚できる国でやり直すつもりだから、よかったらいつでも俺の所に嫁ぎにきてくれ」

「やっぱ死んでください、お願いします」

最後まで、おちゃらけた人だった。

「恋歌さん。社長さん。お世話になりました。もうちょっとまお世話かけますが、宜しくお願いします」

「あらあら、わたしたちは恋する乙女の味方なのだわ。気にすることないわよ」

「私は……十二分にお金がもらえたので、問題ありません」

恋歌さんと社長にとって、『恋する乙女』の定義には大変開きがあるようだった。

「じゃあな、世話になった！ きちんと、決着もつけてさせてもらったし、安心して第二の人生が歩めそうだぜ……」

「工藤！ 精々足掻いて、もがいて、苦しみ続けるのだわ。生きていれば、どうにだってなるのだから」

そんな、社長の言葉に送り出されて、工藤が搭乗ゲートと歩き出した。キザったらしく、額に指をあてカッコをつけていたのを伸ばして、挨拶を返してくる。

最後まで一貫して、楽しいふざけた男を演じ続けてくれたのは、僕にとつてはともありがたかった。

「やっぱり、あれって演技なんですか？」

ゲートから離れながら、こっそりと恋歌さんに話しかけた。

「さあ、どうだね。少なくとも工藤本人があの手性格だったことだけは確かだよ。人を殺した後まで、そうだったかどうかはわからないけど」

工藤と何やら因縁がありそうだった、男の言葉が脳裏をよぎる。

『あいつのことは殺したのにな』と……。仕事で殺しをやっていた工藤にとっては、人を殺すのは日常だ。咎められることはない。

ただ、もしも、私情で『殺し』をやってしまったのだとしたら……。

「さてさて、二人は喫茶店にでもよつてゆっくりしていくのだから。なんなら近くのホテルに泊まってもいいわよ。お金はお姉さんに任せるのだわ」

社長は豪快に笑いながら、お洒落ながま口財布から万札を三枚ほど取り出し、ヒラヒラさせ、こちらに押し付けてきた。言っちゃ悪いが、どこことなく、田舎のおばあちゃんを連想させる姿だった。

「お駄賃よ。わたしは忙しいから、もう行くのだから。工藤の後始末、クロネコさんにお願ひしといてね。これ、資料」

嫌な名前があがった。

渡された資料はずっしりと重い。おそらく、ネットやらデータベースに残った工藤の痕跡の消去を、黒猫さんに依頼しに行くというお使いだろう。

それ以外にも、新しい国籍や身元の調達やら、工藤の資産の移動やら、色々あるだろうが、社長がすでに手を回しているのだろう。ほんとに、仕事の早い人だ。

「それと、あなたたちも、チマチマとやってるのだから。噂は聞いているわよ。異能というのも、大変なのだから」

まるで人事のように言いながら、社長は愛おしそうに、手のかか

る子供を見るように、こちらを向いて嘆息した。そういうあの人が
つて、聞くところによると、『言霊』なんてのを使うプロらしいの
に。

『力』に振り回されている側と、『力』を振り回している側の違
いを見せつけられたようで、なんだか自分が情けない。しょせん僕
の『異能』なんてのは、たしかに病気のようなものでしかないのだ
ろう。

「恋歌、有理君。二人とも達者でね」

お小遣いを渡され、ポツンと立ちすくむ僕たちを置いて社長がス
タスタと去っていく。

「それと、有理君。手加減以外ができるように、リハビリしといた
方がいいのだわ。これから、恋歌の隣にいるつもりなら、トラウ
マなんて消し飛ばしてしまいなさい。死なない程度に、死なないた
めに」

そして、去り際に、耳元でそつとそんなことを言われてしまった。
何もかもお見通し、ということらしい。

「有理君。どうしよつか？」

恋歌さんが万札をひらひらさせながら、困った表情でこちらを覗
き込む。

「そうですね。ホテルも……悪くないと思いますよ？」

そんなことを言ってやった。

今日は本当に疲れた、今から事務所に帰るのだって大変だろうし、
ホテルに泊まるのだって選択の一つだ。あ、そういえば、僕の原付
や恋歌さんの車も社長の事務所の地下に置きっぱなしだ。たぶん、
手を回してはくれているだろうけど。恋歌さんの車……治るといい
けど。

「ゆ、有理君？ ほ、ホテルに誘うって、え、ええ？」

隣で目をぱちくりさせている恋歌さんは、耳まで真っ赤になりな
がら、混乱しているようだ。

相変わらず、変なところでうぶな人だった。普段なら、これぐら

いで許してあげるべきなんだろうけど、今日の僕は疲れているし、頑張ったからご褒美だってほしい気分だ。

「さ、行きましょう！ 恋歌さん」

「え、ええええええええええ？」

きちんとした行き先は、まだ言わないでおいた。

後ろには、照れた顔を隠すように、下を向く恋歌さん。

慌てふためく恋歌さんの手を引っ張って、歩き出す。

とりあえず、さつきちらつと見えた、美味しそうなパフェが出る

喫茶店を目指して……。

三歌（10）（後書き）

なんとか三歌（10）にて、終わりました。

エピソードの、三歌（喫茶店）にて、完全終了。次話の四歌に入ります。詳しいあとがきは土日にするとして、とりあえず、いただいたコメントへの返信を……。

07/24 16:50 こういうの大好き！

<私も大好きです！（笑） 好きな設定、好きなキャラで小説が書けるのはやはり楽しいですね。趣味丸出しですが、そんな趣味で、皆さんに楽しんでいただけるのが一番の喜びです。

今後とも、web拍手でコメントなどいただいた際には、返信していききたいと思います。コメント、感想、文句、批評などはメールでもかまいません↓アドレスはブログへ（<http://mitukou.exblog.jp/>）

返信不要の場合、コメント引用に問題ある場合は、一言連絡いただければ対処いたします。

なんかかんや言っとりますが、どうぞ皆様気軽に言葉をぶつけてやってください。必死に捕球しますのでw

それではまた次回、お会いしましょう。

三歌（喫茶店）

「恋歌さん、おいしいですね。ここの抹茶プリンアラモード」

「そうねー。おいしいですねー」

すっかり日も暮れた空港の喫茶店。

客はチラホラで、どちらかと言えば夕食を食べるために利用する人の姿が多い。寂れたアンティーク調の店内が心を落ち着かせてくれる。

磨きこまれた机の上に、どんつと置かれたアラモード。抹茶アイスの苦味とプリンの甘みが溶け込んだそれは、まるで宝石のようだった。通りかかった時に美味しそうだとは思ったけど、まさかこれほどとは……。

「恋歌さん、機嫌悪いんですか？」

「べつにー、少し忙しかったんで疲れてるだけよ」

あきらかに拗ねていた。仕事終わりの一杯にと、カップに口をつけ、恋歌さんがちびちびとカプチーノをすすっている。

「にしてもすごいかったわね、有理君。おかげで私、助かった」

恋歌さんはふと顔をあげると、ニヤニヤと意地悪な表情を浮かべた。

「なんだか、嫌な予感がする。」

「いえいえ、僕は何時でも恋歌さんのナイトでいたいですから」

「ふーん、そういえば工藤のことだけど……」

僕が反撃にと放ったキザったらしい台詞はスルーされ、社長から渡された分厚い資料で扇がれる。

「彼の経歴、知りたい？」

「知りたくないわけじゃないですけど」

本当のことを言えば、工藤が追われる原因というのが気になっていた。地下駐車場で、本気の表情で睨み合う男の戦いというのを見て

た時から。

「工藤勇太、18の時バイクで大事故を起こすが、奇跡的に生還する。その時に異能力を発症。暗部の組織に発見され、以後その殺し屋としての日々を過ごす」

「僕らの上司連中……機関のいけ好かない国家公務員さんたちよりも前に、悪い人に捕まってしまったってことですか」

「そういうことね。燃え盛る事故現場から、やけど一つ無く生還するなんて、わっかりやすい発症のしかたよね」

命の危機から生還する。

というのは、人間のどこかに欠陥を生じさせるには十分すぎる原因だ。生きるために、あるいは後遺症によって、人が本来持ちもしない力を具現化させる。

「僕らが見つけきてない人の中には、そうやって、暗部に引っこ抜かれる人もいますよね？」

「それはそうね、それも隠し切れない一つの真実。力を持つものはそれを自由に振るうことを望む。国やら機関に規制されるなんて、まっぴらなんでしょうね」

僕らの仕事は、そんな人たちを救う目的もある。

霞美さんのように早期発見、あわよくば治療が出来れば、過ぎた力や異常によって、道を踏み外すことはなくなるはずだ。

「で、色々あって、その組織を逃げ出したわけ」

「その色々がとてつもなく重要なんですけど」

僕が目細め、見つめると、恋歌さんはニンマリと、アヒルみたいに唇を尖らせていた。

故意に僕の事をいじめているらしい。色々と溜まっていたんだろ。社長という格上のいじめっ子がいる状況では、僕も恋歌さんもただのいじめられっ子にしかすぎなかったから。

「そのものズバリ、恋よ恋」

「恋、ですか」

なんて、簡単に納得できるわけがない。

ジトリと睨み続けると、恋歌さんは満足したのか、話を続けた。

「うーん、有理君。現在世界における殺人事件の動機で、ポピュラ―なものって何があるかしら？」

「金銭問題……とかですか？」

「それも正解。でも、今回は違う。その動機が恋愛絡みだっただけね」

恋愛で人を殺す。痴情のもつれというやつだ。

それは、頭では理解できるけど、抱いてはいけない感情のようにも思える。

「工藤と……彼の職場の上司が一人の人間を取り合った。結果、付き合っていた相手に浮気される形で上司に寝取られた工藤が、殺ってしまったわけね」

「あの時の人がそうですか」

「社長つては手が早いなんのつて、私もびつくりしたわ。まさか依頼人の『治療』まで行おうとするなんて」

おそらく、その恋敵を工藤は地下駐車場で殺したのだ。

愛した人と、それを奪った人を両方消して、彼は解放されたのだろうか……。それとも、自分の感情で、自分の意思で殺しをしたことを背負い続けて、無様に苦しみながら生きていくだけなのだろうか。

人の心を完璧に理解することはできない。僕の、理解したいという思いはただの強欲で、理由を求めることがナンセンスなんだろう。殺すほどの愛。

殺されるほどの恋。

どちらも完璧に理解することはできない、人の心の異常性だった。「有理君は私のために殺してくれる？」

「……」

とてつもなく、意地悪な質問だった。

「わかりません。わかりませんが、殺しちゃいけないとは思ってます」

それでも僕は殺してしまうのだろう。

人間としての異常がある分、それが可能になってしまっているから。だから、だからこそ僕にとって、恋歌さんの存在はとてつもなくありがたい。彼女といえれば、僕は普通の人間のようにすごすことができるのだから。

「さて、そろそろ帰りましょうか。もちろん、タクシーでね」

「ホテルはおあずけですか？」

「おあずけです。その代わり、家に帰ったらたんまり吸わせてもらうから」

ぺろりと舌を出して、犬歯をのぞかせながら、恋歌さんは茶目つ気たつぷりの表情でこちらを向いた。

今回の功績に、吸血というご褒美が必要なのは、恋歌さんの方だったらしい。

「そういえば、工藤ってホモ？　なんですよね？」

喫茶店の会計を社長の万札ですませて、タクシー乗り場へと向かいながら、ふと思い出したことを呟いた。

「そうよ。だから、そうね、今回のあれやこれやは、男三人の三角関係のもつれてわけね。当然、彼らの取り合っていた『相手』というのも、むさつ苦しい筋肉隆々の男だったから」

「いやな、いやすぎるトライアングルですね」

恋の形は人それぞれ。

でも僕は、

「なに、私の顔になんかついてる？」

「いえなににも、早く事務所に帰りましょう。日付が変わる前に」

恋歌さんのように、美人な年上のお姉さんのために、殺すほうがまだ納得できそうだと、ウキウキと首筋の絆創膏の下にある噛み痕をうずかせながら、思うのだった。

三歌（喫茶店）（後書き）

そんなわけで、三歌目も終了。

いやー、なんというか、長かった。ふと描写を増やそうと思うと、あれもこれも説明不足な気がして文章を増量してしまう今日この頃です。

この三歌目、で一区切り、起承転結でいうなら、起承まで終わったというところです。

基本的には各話で独立して楽しめるような連載なんですが、色々と伏線回収しつつ、収束していけたらなと思ってます。

次は承→転への変化、四歌目です。最終的には今までの三話とは少し違った話になる予定。

そういえば、空想科学祭に参加致します。

詳しくはブログ（<http://mitukou.exblog.jp/>）の記事にでもあげたいと思いますので（記事はこの小説投稿後に書き始めますが……）そちらもご覧いただければと思います。

それでは、宜しければ今後共付き合ってやってください。読了ありがとうございました。

四歌（1）

生者か死者か、人か人外か、そんなの些細な違いなのよ、きつとね。

「あのー、私つてやつぱり死んでるんですかね」

街を歩いていると、唐突にそんなことを尋ねられた。極々自然に、まるで人に道を尋ねるようなノリで。

なんとか期末試験を乗り越え、大学も夏休みに突入した8月の上旬。お盆は近いけど、まさかこんな質問をされるなんて。

「いやー、死んでないんじゃないですかねー。見えますし」

その問い掛けに、無責任かつ不透明な答え方をする。

20台前半の、誠実そうな長髪の女性。OL風のスーツとストッキングがよく似合う初々しい新入社員のような姿が見えていた。視覚で相手を認識できるというのが、生きているという定義に当てはまるならば、間違いなく彼女は生きている。

「はあー、でもあなたには見えるんですね。私の姿」

「それは、こうやって会話できてるわけですし」

イマイチ意図のわからない台詞だった。

最初は宗教か何かの勧誘かとも思ったが、彼女の初々しい、ホントに困ってますという表情を見るに、その手の輩ではないように思う。

「ちょっとびびっときて話しかけちゃって……。おかげでちょっと手がかりがつかめました！ありがとうございますね」

なんて、少し後ろが透けそうな存在感で、わざわざお辞儀までしてくれた。

「えっ……」

まぶたをこすり、思わず二度見する。

昨日は寝付きも良くて、明日は朝一番に恋歌さんのところに行っ

てイチヤイチヤしてやろうと妄想しながら、気持ちよく眠りについた。

だから、体調はすこぶる良いはずで、目の錯覚とは考えられない。そう、確かに透けている。

去年の冬に恋歌さんに連れられ、テレビ番組よろしくな心霊現象に挑んだ記憶が蘇る。最近出会った、草薙さんの家にいたらしい、目視できないほどの空気のような概念ではなく、意思や表情を持った、より人間に近い幽霊という存在。

似ている、確かに似ている。

「ちよつと待つてください。なんだか、よくわからなくなってきました」

OLさんにお手上げのポーズでこちらの困惑を伝える。

さっきまで普通に会話していた人が、もしかすると幽霊か何かだなんて、信じられるほど僕は常識を逸脱してはない。そういうこともあると聞いて、そういうことも少しだけ経験したただけだ。

「もしかして、話しかけたのって、僕だけですか？」

「ええそうですね。皆さんあたしのお話を聞いてくれなくて、困ったところだったんです」

見ると、通行人たちは僕の方を怪訝な表情で見ている気がする。

まるで、独り言をつぶやき続ける痛い人を見るかのようにだ。

「えーと、そうですね。ちよつと待つてください。多分、力になりますから。というか、一応仕事なんで、——なんというか、ご協力お願いします」

と、支離滅裂な言葉で彼女に待ってもらいながら、助けを求めて僕は携帯電話のダイヤルをプッシュするのだった。

四歌（１）（後書き）

今後の展開等を考えて、ジャンルを恋愛↓ファンタジーに変更しました。

一〇三歌は、ジャンル恋愛と言い張れないこともなかったのですが、今後の話しはさらにファンタジー色が強くなる予感です……。

主題の一つが『恋』だったりもするのですが、とりあえず暫定ジャンルとしてファンタジーへ。

伝奇とか現代ファンタジーに近いのかもしれませんが。ライトノベル、娯楽小説という位置付けで考えていただければ間違いありません。が、結局は登場人物がイチヤイチャとくっちゃべるだけの話でもあります。ジャンルの区分って難しいですね（笑）

四歌（2）

「有理君。まじめだね、私的には今日は夏休みだったんだけど……」
夏休みなんてものが、僕らの仕事にあったのには驚きだ。

寝起きの恋歌さんはとても機嫌が悪かった。

最近購入した最新式の羽なし扇風機で涼しみ動いてくれなかったのを、なんとか引つ張り、応接間で待つお客さんのところまで案内する。

僕の後ろでぶつぶつと文句を言う恋歌さんの姿に、若干後悔しつつも、ここまでできたからには後戻りできない。

「あのー、この方が困っていたみたいなんで……。連れてきました」
「あのー、よくわからないですけど、よろしくお願いします」

背中 of 辺りで切り揃えられた髪の毛をゆらしながら、一礼。やっぱり社会人なのだろうか、とても礼儀正しい。久々に正しい、社会人像というものを見た気がする。

「へー、これはまた、奇っ怪な……。いえ、失礼しました」

メガネケースから、『心霊』を観察する能力がある、疑惑の伊達メガネを取り出しかけると、恋歌さんは難しそうな顔で、お客さんを眺め始めた。

「失礼、お名前は？」

「はい、私は三津金商事のこはやかわ あかり小早川明理と申します」

「明理さんですか。私は恋歌と名乗っています。私たちのことは、そうですね……。便利屋とでも思っていただければ結構です」

ニコリと笑いかけながら、恋歌さんは商談モードに入ったようだ。「明理さん。率直に申し上げて、あなたはいま、いわゆる霊体と呼ばれるような状態になっています」

「それはつまり、幽霊みたいなものなんですよね？」

「そうですね、カテゴライズするならば、浮遊霊というところでしょうか。好き勝手に動き回れるわけですから」

幽霊かあ……と、明理さんをじーつと眺めてみる。

どこからどう見ても、ただの人と変わらないように見えてしまう。「私とその彼は、霊体という概念がごくたまに人間社会に混じっている。という事実を知っていたので、あなたのような存在をキャッチできたというわけです。これは相性や環境などにも依存しますが、あなたの姿を認識できる人間は基本的には『普通』ではないということになりますね」

いつの間にやら、僕も異常者の仲間入りというわけだ。

「えっと、それですね。つまりその……私って死んでるんですかね？」

僕と出会った時に投げかけていた質問を、明理さんが再び口にする。

「それを調べるのが私たちの仕事というわけですね。経験則から言わせていただけるならば、あなたは死んでいると確定したわけではありません。『死んだ』にしては、意識や行動がしっかりとしていますから」

どうやらそういうわけであるらしい。

霊体というのは、僕らの生活に色々な形で溶け込んでいる。それをカテゴライズしきるのは珍しく、時たま人間に害をもたらす奴らがいると、僕らみたいなのが葬除を行うのだ。

「あー、それで、ですね。お金あります？ お身体がこの世にないのでしたら、ご親族の方からでも結構なので、ご遺産や、自分だけしか知らないへそくりとかでもかまいませんよ」

恋歌さんは満面の笑顔でお金の話を始めていた。

多分この人はこの人で、出来る社会人なのかもしれない。礼儀とかルールとかそんなもん糞喰らえな人なんだろうけど……。

四歌(3)

「行方不明、というやつらしいわね」

クロネコさんからの電話を置き、恋歌さんが小さく息を吐き出す。客間で明里さんに待機してもらい、事務所から捜査を開始して早2時間ほど、普通の探偵や警察のような仕事は意外と簡単に済んでしまった。

「行方不明、ですか」

それなら少しは希望がある。

浮遊霊のようなものになってしまった、彼女の生死は未だわからずじまいではあるが、可能性がなくなってしまうよりは、十分マシな結果だといえるだろう。

「彼女の意識や、自我の度合いからいって、生きている可能性も否定できないわ。……もしくは」

「死んだことに気づいていないというやつですか？」

そうそう、と恋歌さんは頷き、パソコン越しにクロネコさんの送ってくれた捜査資料を指で差した。

「彼女、会社の資料によると今出張中らしいわね。ありがちな、旅行中の事故ってこともあるかも」

「事故……ですか」

よくある人が死ぬ理由。

交通事故、旅行先の山や川、人と人の殺し合いが表では行われなくなっても、人が死に至る理由なんてのはそこら中に転がっているのだ。

「浮遊霊つてのも、難儀なネーミングですね」

「霊体を等しく定義しろなんて難しい話だけどね。使いやすいから、昔の人のネーミングセンスを借りてるわけ」

ふらふらと行き先もなくさ迷うから浮遊霊。

それは生前の記憶から、同棲していた彼女の家に縛られているわ

けでもなく、通り続けた道を毎日往復し続けるわけでもない。なんのしがらみもないから浮いているのだ。

「そういう意味では、最近出会った草薙さんとこのアレは地縛霊つてところですか」

「私としては、真実の愛をもった、いたいけな青年霊という説を押したいところだけだね」

とかく、恋歌さんはそういうものの味方をしたいらしい。

「で、だね有理君。私は今結構怒り心頭してるわけだよ」

声のトーンを落とし、恋歌さんが景気良い音を上げて、パソコンのキーを叩いた。

画面に現れたのは、とある会社のプロフィール。注意深く見るとどうやら明里さんの会社の関連企業のようなのだ。

「どうやらこの企業が、霊体やらに興味心身みたいでさ。商業利用？　なんて馬鹿らしいこと考えてるみたいなのよ」

霊体を自由自在に取り出す。

なんてことが出来れば、世界が変わる。それを商売にしようものなら、金持ちが食いついてくるというのは十分に想像できる事だった。

「まったく人間の分際で死後の世界の真理に触れようだなんて、おこがましいにもほどがあるわよね」

絶対のタブーという程ではない。

人間は不可解なものがあれば、解を導き出したいと考える生き物だ。だから、過去未来、死後の世界を紐解きたいと願う探求者は現れ続けるのだろう。

「恋歌さんてきには、これも、わかりもしないものですか？」

「そりゃあそうよ。行けもしないところの情報なんてどうやって引き出すつてのよ。死後の世界から帰ってこれた奴がいるなら、とくに解は得られるはずなんだから」

死後の世界は、死んだ人が行く所。だから、死んでもいない浮世の人間が、その境地に辿り着くというのは不可能な話だった。

「しかも、その方法が人の魂こねくり回そうだなんて、許せるはずもない話よね」

「明里さんのためにも、僕らの出番ってわけですか」

客間で、僕が家から持ってきた据え置きゲーム機で遊んでもらっている明里さんを思い浮かべる。

すると、ぎゅっとまっすぐに唇を結び、肩をわなわなと震わせてパソコン画面の方を見ていた恋歌さんが、僕の方を振り返った。

「気になってたんだけど、小早川さんのこと、明里さん、だなんて呼ぶのね。珍しい……」

「いえ、えーっと、これには深い理由はないんですよ。なんとなくです、なんとなく」

急にこちらに飛び火する恋歌さんの怒りに戸惑いながら、言い訳の言葉を並べる。

依頼人たる明里さんのことは、普段なら、小早川さんと呼ぶべきところだ。というか、そうするつもりだったのだけど……。しばし考えああっと、勝手に納得する。

なんとなく、呼びやすかったのだ。

年上だし、

落ち着いたお姉さんみたいな人だし、

……どうやら僕は、お姉さん属性に目覚めきっている、らしかった。

四歌（3）（後書き）

次回更新は土曜日の予定です。

今週末には空想科学祭の方もあげたいなーと思う今日この頃。

・追記

次回更新は20日の予定です。お待たせしてしまい、申し訳ございません。

四歌（4）

「恋歌さん、お尻が痛いです」

「その台詞、なんだか誤解を招きそうで嫌だわ……」

お尻をさすり、とぼとぼと歩く。

場所は県境付近の片田舎。昼頃に事務所を飛び出し、鈍行電車に揺られること数時間、僕のお尻という高い代償を払い、なんとか目的の地に到着した。

いつもなら車で移動するのだが、生憎と恋歌さんの愛車は先日蜂の巣にされており、ただいま修理中。曰く、パワーアップして返ってくるまでしばらくお休みだ。

無人駅の改札をくぐり、うーうー唸りながら歩みを進める。

「いやー、自然が一杯ですな」

「夏っぱいわね。まあ今は仕事だけど」

駅前は閑散としており、僕ら以外の客は帰省目的っぽい若者が一人だけ。

居ても居なくても変わりなさそうなタクシーが一台だけ、ぽつんと止まっていた。

立ち止まりあたりを眺めると、ロータリーの少し奥の道路は、両脇を田んぼに囲まれているし、ポツポツとした住宅街の奥には、大妖怪でも潜んでいそうな巨大な山々が続いている。

「社長に聞いた通り……、霊験あらたかな土地のようね」

伊達メガネの奥に何を見ているのか、恋歌さんはメガネの縁を握りながら、そんなことを呟いた。

「しかし、暑い暑い」

「軽装で来たんですけどね……」

半ズボンのものは、あまり好きじゃなかったけれど、暑さに負けて装備した和風ステテコから飛び出したスネに、涼しい風があたる。

「つく、有理君。女の私が嫉妬するほどのツルツルっぷりねえ」

「だから半袖とか、半ズボンっぽい長さは嫌なんですよ。子供っぽく見られそうで」

スネ毛に憧れるわけじゃないけど、体毛が薄いのはなんとなく、大人への成長を拒否されているようで、嫌だった。

恋歌さんの格好は、いつもより少し長い黒のスカートに、涼し気な白のブラウス、ポリシーなのか黒ネクタイと袖際のもふもふも忘れない。

いやいや、恋歌さんの生足だって、ツルツルじゃないですか、手入れしているんだろうけど。なんて、言えもしないことを、いつものニーソックスやストッキングから解放された生足を堪能しつつ思っってみました。

「さて、社長とクロネコさんの情報によると、問題の社屋はここを道なりに進んでいけばいいようね」

「もしかして……歩くん、ですか？」

「Yes!」

親指を伸ばし、グットサインを返されてしまった。

僕たちの目的とする、明里さんの手がかり。彼女の『結果的』な出張先となっている関連会社が、この片田舎にあるらしい。社内的情報には、隠蔽が入っていたらしく、社長やクロネコさんの力がなければ、この情報に達するのは厳しかっただろう。

「タクシーという選択肢は？」

「有理君。田舎って車が通ったり近づいてくるとすぐにわかるものよ。静かだから」

「これ、徒歩30分ぐらいかかりますよね？」

「Yes!」

気に入ったのか、再びのグットサイン。

相手は靈的なモノに興味津々な怪しげな企業で、近づくのに注意を払いたいという気持ちや、一般人を巻き込みたくないというのもわかるのだが……。

「まあ、夏っぽいですね。田舎の散策なんて」
お尻をさすり、もってくれよ……、なんて呟きながら、僕たちは
目的地に向かい歩き始めた。

四歌（４）（後書き）

色々とズレ込み、久方ぶりの更新です。

お待たせしてしまい、申し訳ございません。

登場人物二人と同じく、田舎に帰省しておりました。

日曜日も更新の予定です。

空想科学祭用の話も公開しないと……ぐぬぬぬ。今週末、来週末あたりでばちばちと公開していきたいと思っております。

四歌（5）

「わちきに道を訊ねるとは……。旅行客かえ？」

「ええ、そうですけど」

目的地に向かい、歩いていった道の途中。田んぼの脇のバス停で、ぼーっと座っていた女の子に話しかけた。

高校生ぐらいのＴシャツにホットパンツという軽装の女の子は、左右に結わえられた長めのツインテールを揺らしながら、ん？ と小首をかしげる。

「ええっと、大体の場所はわかってるの、ほんとに、でも一応、確認というか、なんというかね、ほら」

恋歌さんが女々しく言い訳をしていた。

スマートフォン地図の地図にべったりと目を寄せてはいるが、どうやらあまりにまわりが殺風景すぎて、道順が不安になってきたようだ。

「ほうほう、ここに行くのか？ そりやまた珍しい」

「珍しい？」

「ん、文字通りの意味じゃよ。その建物に『行こうなんて思うやつ』は珍しいからな」

地図を見せ、簡単な説明をしてみると、女の子は八重歯をのぞかせ笑いながら、ニヤリと笑った。

「旅行者さんやものねえ。ウチの土地じゃあ、そこに行こうなんてモンは誰もおらんよ」

「でも一応、大きな企業の関連会社で、再生紙やらの工場なんですよね？」

「そうらしいね。まあウチのモンで働いとるのはほとんどおらんで、皆さん外からこられたようやけど」

一呼吸ため、

「あんまりいい噂は聞かんの。やから、わきちらでそろそろどげんかせんといけんと思ってたところや」

なまっただ独特の口調で、女の子は溜息まじりにそんなことを言う。どうやら近隣の住民さんとの関係はあまり良くないらしかった。こんな高校生ぐらいの子に、どげんかせんといけん、なんて言わせるのだから。

「どうも、ありがとうございました」

「ん。そちらも、気をつけてな」

屋根付きのバス停で、何をしていたのか、少女は再びぐてーっと座り込み、何をするでもなく空を見上げ始めた。

「そちらの女の方。ずいぶん、良いメガネやの」

「ええ、結構な値打ち品なんですよ。便利ですし」

去り際にそんな言葉を投げかける、時代錯誤な喋り方をする少女。手を左右に振り、別れの挨拶で送り出される。

「風神様の、ご加護でもありゃあいいの」

最後にそう呟いているのが、微かに聞こえた。

ぶわっとな風がふき、背中を押されるような感覚がほんの少し心強かった。

四歌（5）（後書き）

次回更新は、水曜日の予定です。

空想科学祭用の小説も来週あたりに、数回にわけて投下予定。ぐぬぬぬ、土日は、カードゲームとルービックキューブと執筆で終了してしまいました。

四歌（6）

「目標発見、これより潜入行動に入る」

「たしかにスパイモノっぽい状況ですけど……」

田舎道を直進し、辿り着いた先に待っていたのは巨大な建造物だった。

「見えるわ、見えるわ。魂の残響があっちこっちに」

伊達メガネ越しに、ぶるぶると震えながら、恋歌さんは興奮したようにあたりを見る。

田んぼに囲まれたのどかな田舎町。その一角を占領し、防風林のように高く伸びた木々に隠れながら、鉄筋コンクリートの工場があった。

「風、強いですね」

「そうね、このあたりは昔からそうだったみたい。社長に聞いた時も、さつき道を聞いた時の子も、風神様がどうのこうの言っていたし、心霊的なモノが昔から寄りやすかったんでしょね」

だからこそ、利用された結果、明里さんのような浮遊霊を生む『何か』があそこで行われている可能性がある。

もくもくと煙をあげる煙突の下は怪しく、薄暗い。ワゴン車やトラック、高級そうな自家用車が止まった駐車場の近く、正面ゲートには、作業着の男が座り、じっとタバコをふかしていた。

「素人……ですよね」

「そうね、至って普通の一般人。奥にいるのも、暴力団関係の腕自慢が精々でしょうね」

以前出会った、殺し屋の組織とは比べるまでもない、ただの作業員に会社員。

潜入から戦うハメになったとしても、これなら僕らで対処できそうレベルだ。

「オカルト的な……仕掛けとかはどうなんですか？」

「簡易な結界、的なものはあるのかもね。こういうのは、門外不出で色んな術式やら儀式方法があるから、一概にはいえないところはあるけど。うーん、空気の感じだと、出来合い物を業者からもらって使ってるだけね」

人を寄りつかせないための、無意識下の意識修正。それぐらいの準備は、この手の施設に用意されていて当然だ、と聞いたことがある。そしてそれは、いくなれば、陰陽道の流れをくむ、言霊使いの社長の専門分野だった。

「恋歌さんは社長の弟子、なんですよ〜」

「正しくは落ちこぼれの落第生ってところね。恋歌、なんて名前はもらえたけど、言霊使いとしては三流もいいところよ」

「結界とか、大丈夫なんですか？」

「心配無用。こんなのよほどの熟練者の仕業じゃないかぎり、経験則でオカルトへの抗体ができてしまった私たちにとっては、子供騙しみたいなもんよ」

事実、結界による人払いがあるだろう状況で、僕たちは無事にこの工場まで辿り着けている。『そういうもの』が存在すると知っているだけでも、僕らは一般人のように簡単に騙されたりはしないということなんだろう。

「さて、行きますか！」

「れ、恋歌さん？ 潜入ですよ、潜入？ 今にも殴りかかって行きそうな勢いに見えますけど……」

「うーん、有理君。やっぱり私、この人たちに腹がたってるみたい、一発殴らないと気がすみそうもないや」

オカルトの境界線を、なんの覚悟や代償もなく、土足で侵入してしまった一つの企業。

利益を得るために、人の命を弄ぶような行為。

「そうですね、……好きに、暴れてください。今回は僕も、能力なんて使うほどじゃなさそうですし、血を吸うならどうぞ、遠慮なく」
そんな彼らを許す理由は、どこにもなかった。

四歌（6）（後書き）

世間では8月も終わりかけ、夏休みの宿題を必死こいてやった記憶がよみがえります。

さて、色んな×切りが迫ってきます。空想科学祭、土日あたりを目標に頑張って仕上げていきたいと思います。

次回更新は、土曜日の予定です。（更新は、別シリーズの作品の場合あり）

四歌（7）

「ちよいとそのお兄さん、そこ、通してくれる？」

入り口でタバコを吹かす強面のお兄さんに近づくと、恋歌さんは満面の笑みで話しかけた。

「ああん、なんや姉ちゃん！ ココはあんたみたいなのが来るとこや……って、ひでぶっ！」

そして、珍妙な叫び声をあげて、宙を舞う成人男性。

「あ……あでえ……」

くるりと一回転し、背中をもろにうつたのか、コーホーコーホーと苦しげに息を漏らし続けるその姿は、中々滑稽だった。ありていに言えば、ザマアミロってところだ。

「さーて、今日はお姉さん、頑張っちゃうんだから」

工場の正面入口から正々堂々と侵入する。さっきまでの潜入がどうやら、という前振りには、どうやらゲームに影響された恋歌さんの戯言だったようだ。

「恋歌さん、気をつけてくださいよ」

「大丈夫、大丈夫、相手は素人みたいなもんみたいだしね、私らにとっちゃあ！」

慌てて駆けつけてくる工員たち。

思った通り、相手は素人みたいで、訳もわからず手伝わされているだけの作業員もいるかもしれない。実際、事の異常さを感じ取った社員の中には、腰を抜かして逃げ出した人もいた。

これで、警察なんかでも呼ばれたら、僕らは傷害罪で捕まったりするのかもしれない。

もつとも、そうはならない。

「おい、お前ら、取り押さえろ」

そうさせないように、キチンと彼らの上司は、対応しているはずだから。

稼働していないベルトコンベアーの奥から、スーツ姿の男がガタイの良い男を連れてやってくる。最近使われた形跡のない、食品加工用のオートメーション工場はフェイクで、本丸はこの奥にあるってことなんだろう。

「つてめえら！ おとなしくつかまれ！」

「あら、ごめんなさい。今日は私、機嫌が悪いんです」

さらりと拳を避け、恋歌さんが足をちよいつと男にかけ、掬い上げる。

それだけでバランスを崩した男は、宙を舞い、受け身を取れずに地面に叩きつけられた。合気道……僕もちよつと教わったが、恋歌さんレベルになると、あまり参考になりそうにない。

型とか、パターンとか、そういうものじゃない。手を添える、肩を押し付ける、足をはらう、そんな些細な行動だけで相手のバランスを崩してしまう。

とらえどころがないが故に、相手も対処に困るはずだ。

結果、恋歌さんはこの程度の相手なら、ちぎっては投げを、地で可能にしてしまう。

「てい！ 恋歌サーン、ホントに今回、僕暇なんですけど」

実は隣にいるチッコイ男の方が弱いんじゃないかと気づいた一人が、僕の方に迫ってくる。その攻撃をなんとか崩しながら、合気道の体捌きで入身投げをかましてやった。

「いいじゃない、たまには。お姉さんにも暴れさせなさい」

背中合わせに、恋歌さんと頷き合う。こんなストリートファイト紛いなことをしたいわけじゃないが、相手が思いつきぶん投げてもいい相手だと、結構やる気もでるってもんだ。

「ちい！ 話が違うじゃないか！ いいから全員、アイツらを抑えろ！ こら、お前、逃げるな」

事情を知らない、純粋な一般人っぽい人たちだけでなく、ガタイの良い、戦闘要員として雇われたっぽい人たちまでもが逃げ出し始めた。

きつと、この仕事が、『何か』やばいということを知っているの
だろう。

「さーって、種明かし、生者と死者を冒読する、おたくの会社の商
品、是非私たちにも見せていただけるかしら」

にっこりと、恋歌さんがスーツの男に笑いかける。

一方、管理職っぽいスーツ男は、青白い顔で、ひきつった笑いを
浮かべるだけ。

まったく、美人の恋歌さんが笑いかけてくれるってのに、その
リアクションはどうなんだ。僕ならきつと、喜ぶっていうのにさ。
まあ、いつも、無表情だからとかで、気づいてはくれないけど。

四歌（7）（後書き）

皆様、お久しぶりです。有恋歌、更新再開です。
次回更新予定は水曜日です。

ええ、ここ最近何をしていたかと、（言い訳）させていただきます
と、空想科学祭2011に参加しておりました。

よろしければ、作者ページからそちらも拝読していただければと思います。

と共に、どうやらある程度の投票、アンケート結果が必要なようで、是非興味がございましたら、

企画サイト（<http://sf festa2011.tuzikaze.com/>）のつております、作品群を拝読してみてください。
面白い、驚かせる作品がたくさんありますので。

投票期間が終わるまでは、まだまだ祭りを盛り上げていきたいな
と思う今日この頃なのです。

ではでは、今日はこのあたりで

四歌（8）

「そこを、『動くな』ってね」

恋歌さんが異質な声色で、男に命令を下す。その一瞬だけ、こちらまで伝わるほどに、言葉に重み加わっていた。

直立したままぶるぶると筋肉を揺らすだけで、身動きがとれないスーツの男を知り目に、問題の『何か』が眠っている工場の奥へと急ぐ。

「今の、言霊ですよね？」

「まあ、そんなものね。言葉に霊的な概念を乗せて飛ばす、私なんかのは、ちんけな小細工だけだね」

「見るの……というか、聞くの、久しぶりです」

「そりゃそうよ、こんなの普通に生きている分には役に立たないし

……」

一呼吸置き、恋歌さんはあっけらかんとした口調で言葉が続ける。
「私のは混戦状況だったり、相手が一般人でも精神力で跳ね飛ばされたり、第一、動きまわってる相手を止めるほどの拘束力はないもの。使えるのはさつきみたいにビビって威圧された相手を縛る、とかね」

「世の中、それほど万能なものはないってことですよね」

「チートみたいな異常があるくせに、その台詞、有理君がいうかな……」

拳を握り、こめかみのあたりをグリグリと小突かれた。

僕としては、こんな欠陥だらけの能力、万能なんて程遠いと思っている。今だって、恋歌さんの吸血行為で封印されているわけだし、身体の成長どころか、心臓とか臓器の動きすら止めてるような力に、万能なんて言葉は似合わない。

「さて、これが問題起こしまくってくれた原因ってわけかしら」

しばらく歩くと、見せかけの流通ラインは終わり、きっかりと研

究施設の様相をなした空間が広がっていた。

「誰も、いませんね」

「大方逃げたんでしょ、こんな研究してたんじゃ、やましいことしかないはずだし。まあ、後で社長にでも手伝ってもらって、責任はとってもらいましょう」

施設には誰もいなかった。

あたりには、巨大なコンピュータや、精密機械の山、無造作に積まれた資料が、置かれている。よく見ると、慌てて逃げ去ったのか、投げ出された白衣や、床に転がるノートパソコンの姿が確認できた。

「で、まさかこれが」

「魂、つてところなのかしらね」

施設の中心地点にでかかとそびえた巨大な機械。用途不明、冗談みたいな科学チックな管やパイプで繋がれ、外付けのパソコンへと何やらデータを吐き出している様子が見て取れる。

その機械群の中でも、極めて異質さを放っているのは、管やパイプが集約し、『何か』を輸送したのだろう終着点として存在する巨大な、フラスコのような入れ物だった。

楕円に近い透明な入れ物の中では、もやもやとした霧のような何かが、今も動きまわっている。

「信じれません。けど……、霊体っていうのは、実体がないのに、人間の形をなしてますから、イメージとしては近いかもしれませんね」

「私だって、こんなもん、見の初めてよ……。まったく、どんな技術かは知らないけど、とんでもないもんを作ってくれたみたいね」
眼の前のそれが、魂とか霊体とか、そんなオカルトチックなものだとすぐには納得できなかった。普段、不条理な世界や環境、現状や問題に首を突っ込み廻ってはいても、これほどのものだ、さすがに開いた口が塞がらないってところか。

所詮、自分の知らないものには、驚き、脅えるしかなくて、僕ら

もまだまだ、この世には知らないことがあるちよつと踏み込んだだけの人間なのだと再認識する。

「れ、恋歌さん！　ここ……、管が繋がってる先に、人が……」

巨大な装置の奥に隠れるように、人が並んで眠るスペースがあった。

皆が一樣に、病院の患者が着るような簡素な白色の服で並んでいるその様子は、なんだか本当に人を実験道具としか見ていないようで、物哀しいものがあつた。

「大丈夫、大丈夫ですか！」

検査用につながれた細い線を外しながら、なんだか彼らの頬や、肩を叩いてみたが、反応はない。そして、ざつと見る限り、ここに並ぶ五人の中に明里さんの姿はなかった……。

「なるほど、この機械のせいっぽいわよね。魂は基本的に、本来の入れ物に戻る性質があるからして……」

ぶつぶつと何かを呟き、恋歌さんは顎に手をあて考えながら、うろろと歩きまわる。やがて、足取りは自然な感じで、メインモニタっぽい機械中央のコンピュータのところで止まった。

「れ、恋歌、さん？」

思えば、今日の恋歌さんは機嫌が悪い。

一年ぐらいの付き合いで、その上、いつも彼女に首ったけな僕が言うんだから、間違いない。だから、僕が悪い予感を感じてしまったのも仕方がないってものだ。

「つまり、こうしろってことよね！　てい！」

見事な、かかと落とし。

体術の得意な、恋歌さんらしい強烈な一撃だった。

四歌（８）（後書き）

みなさんこんにちは、木曜日の朝にごめんなさい（汗

というわけで、更新です。次回は土日の週末の予定。

ノッてきたのか、最近筆が軽いです。そのせいか、描写が増えて行っている予感。

私自身、先が気になり、はやく先のストーリーに進んでほしい！
ってな人なので、ストーリーの進みはテンポよく行きたいなと思っ
てます。有恋歌も、ここからスピードアップしていきますよ、展
開的な意味で。

さて、宣伝です。

まずブログ「ものかきがり」<http://mitukou.exblog.jp/>

最近自分のブログ内で、私がおつ立てたゲームサークルスタッフ内
でのしりとり日記をやっています。ムチャぶりと下ネタ満載ですので、
よろしければ

次に、空想科学祭 <http://sfesta2011.tuzikaze.com/index.htm>

参加しました。私の参加作は、作者トップページからどうぞ。

現在投票期間中として、投票数が少ないとたいへん困るそうです。
よろしければ公式サイトから、数多ある素敵な参加作品を巡ってい
ただければと。

それでは、長くなりましたが、今日はこのあたりで

四歌（9）

もちろん、一撃で精密機械が完璧に壊れるわけもなく。

「こうなりや、僕だってやけになりますよ！」

僕まで加勢するハメになった。

「うりゃ！」

「僕は力ないんで、素直に、解体っばいものをしていきますけど……」

精密でシヨックを加えたら壊れそうな部分を狙い、恋歌さんの足や手を落ちる。機械相手にぶつかって、恋歌さんの身体の方が強いというのは、完全に人を超えている証拠だった。

まあ、恋歌さんの師匠は社長なんだから、それぐらいできて当然なのかもしれないと、こっそりと嘆息する。

「そろそろ、いいですかね？」

管やコードを無理やりひっぺがし終わると、僕は首をかしげ、半笑いで恋歌さんに向き直った。

「……やりすぎちゃったかな？」

「そうですね。なんか、変な煙出てますし」

機械というのは、本当に壊せば煙が出てくるものだったらしい。

内部でシヨートや発熱が起こっているのか、やがてあたりに焦げ臭いにおいが充満してきた。

「けど、本来の目的は果たせたようですね」

本来の目的、魂……と呼ばれるものだと思われる、白い靄を救出すること。巨大な透明な瓶のような球体の中で、靄が蠢きの速度をあげているのが見て取れた。

やがて、閉じ込めていた者たちの力に耐えられなかったのか、球体の一箇所が飛散し、大きな穴を開ける。戻るべき場所を探すように、靄たちが空へと広がっていった。

「これにて一件落着！ だったらいいのだけどね」

それが、現実に可能だったのか、未完成だったのか。恋歌さんの言ったとおり、魂が本来の入れ物へと戻る習性があるとはいえ、明里さんのように、浮遊霊となったような存在までもが無事に帰れたかどうかまではわからない。

「とりあえずは、そこで寝てる人たちの保護ですかね」

ここからは、探偵的な仕事。

なんて、考えているのが、前振りだったのか……。

「あああああああああああああああ」

腕を伸ばす。

ぎゅっと握りしめている。

でもが蠢いているように、彼の身体を蝕んでいた。

「……これは、『普通』じゃないわよ」

もはや、この施設の責任者にも見えたあのスーツ男は、僕らの領域、オカルトへと到達した。

おそらく、言霊から抜け出した彼は、僕らを追ってここまで来ると、タイミングよく、解放された魂によって、その身体を奪われたのだ。

「ふー、ふー、ふー……殺す、殺して、殺す、殺して、殺す、殺して、殺す、殺して、殺す」

そして、「殺す、殺す、殺す」

やがて、平静を取り戻したようにふっと、男はだらりと腕を下ろした。もはや、見る影はなかった。どちらかといえば二枚目で爽やかな、仕事のできる若手リーマンの姿はそこにはない。

いるのは、恨みや、妬みや、負の感情を一杯に凝縮したただの狂人。元となった生身と霊体の人間たちの痕跡は、もはやどこにもない。

「あっちゃー、予想外。これも、魂の行き先の一つってところかしらね」

恋歌さんが、額の汗を拭いながら、笑えないわね、と言葉を続ける。

「戻るべき本来の入れ物がこの世にないなら……せめて、恨みはらさでおくべきか、ってところですか」

たとえ、身体のない、霊体が相手でも、そういう思考回路は想像に難くない。人間の迎えるべき末路の一つ、恨む側にも、恨まれる側にも、できれば、ああはなりたくないものだ。

そして、できればあの魂の中に明里さんがいないことを願いたい。
「く、くけつつつつつつつつつつつつつつつつつつつつつつつつ
つつつつつつえ」

奇声を発しながら、男は近くにあった一台のパソコンを右腕ひとつで粉碎した。強固なボディで守られているはずの、集積回路の塊に穴があき、バチバチと火花が散っている。

彼は普通の人間、乗っ取られ、理性を失ったただの狂人。

恋歌さんのような技術があるはずもなく、振り下ろされた右の指先は変な方向に曲がって、傷つけられた肌は、今も地面に血を垂らし続けている。

「相手は完璧な悪霊。恨みの総量も相当なもの。あのレベルは経験、ないわね……。倒せる、かしらねえ……」

「れ、恋歌さん？」

不安げな声を、恋歌さんが漏らした。

腰をかがめて、戦闘態勢をとる。僕はそんな恋歌さんを見るだけで、何も出来ない。血を吸われて、発育の遅い、ただのチビに成り下がった僕では力になれないのが情けなかった。

でもまあ、いざって時は盾とか身代わりぐらいには成れるかもしれない。そう思い、目をこらし、悪魔憑き、となったスーツ男にじつと、視線を合わせた。

四歌（9）（後書き）

またもズレて土日明けの月曜日更新に………すいません。

今週土曜日までには、四歌、終了予定です。

基本的には一話だいたい10分割ほどの予定。計算しているわけではないので、まだわかりませんがw
今のところ、この四歌もそんな構成になりそうです。

よろしければ、感想なり、文句なり、励ましなり、web拍手等で遠慮なくぶち込んでやってください。
それではまた

・追記

リアルが忙しかったりして、また更新がズレ込みました……。すいません。

お待たせしてしまいますが、9月24日には少なくとも更新を再開する予定です。

四歌
(10)

「まさに相手は人外……ですか」

「霊体や悪霊なんてのも、所詮は人間の成れの果てよ。って考えてでもないかと、戦うのがばからしいわよね……。そう思わない？」

人は人であることを辞めると、これほどまでの破壊力を生むのだと実感する。

垂れ下がった腕は壊れ、血が流れている。血走った瞳は、もはやなにも捉えていないかのように、視線が定まっていない。足取りは複雑怪奇な軌道を描き、真っ直ぐに進めはしない。

けれど、

「うあ あああああああああああああああああああ
ああああああああああああああああああああ」

近くにあった、オフィス机があつさりと宙に浮く。

武術的な技術なんてありはしない、筋力の効率的な流動などありはしない。それでも人は限界を越え、人であることを放棄すればこれほどまでの『力』を得ることができるのだ。

「けど、こんなのはただの、暴走だよな……」

相手は負の感情が凝縮された悪霊に取り憑かれた、哀れなサリマン。

荒ぶつた魂を鎮める。

なんて言ってみると、なるほど確かに『オカルト専門家』っぽい大層な仕事だった。僕らとたいして変わりはない、ただ道の踏み外し方が違うだけ。

だから……ちよっぴり自分の境遇を重ねてしまう。断じて、同じものではないと主張したくなってしまふ。

「『止まれ!』って……効くわけないか。そもそも本来の人格には、聞こえてすらないだろうし」

恋歌さんは、軽く舌打ちを交えながら、机を飛び越え相手の背後

へと回り込む。『言霊』というのが効かない相手なら、僕らは普通に戦うしか道がない。

「おっとつと」

僕の反対側で、相手の気を引こうと立ちまわっていた恋歌さんの方へ、スーツ男が向き直る。

「動きそのものはわかりやすいんだけど、問題は、私がノーミスでこれに対処できるかってことよね」

「ごげよちゃうとあたちゃおつあゝじゃおつあゝ！」

声にならない声を上げ、男は腕を振るう。すると、ひょいっと軸をズラすことでその攻撃を避けてみせた恋歌さんの横にある計測機械が、根こそぎ破壊されていく。

硬いボディも、金属のフレームも、『アレ』の前には意味をなさないようだ。

これはいよいよもって、僕のカミカゼアタックが迫ってきたらしい。ここは僕が食い止めるので先に行ってくださいなんて、一度は言ってみたかった台詞を使う機会があるなんて、思いもしなかった。なんて考えて、静かにあくまで無表情に、機会を伺う。

ぐつと、足の裏に力を込めて、突っ込む準備を整える。さすがにあんな化物だって、体そのものは人間。ボディにアタックしてそのまましがみつけば、恋歌さんが逃げる隙ぐらい奪えるだろう。

恋歌さんが僕を気にせず逃げてくれるかどうか、他に有効な手立てがないのかも、十分に考慮されていない青くさくて、自己中心的な作戦だった。

それでも、これが自分にできる精一杯だと、一撃必殺の捨て身攻撃を避けながら、痛みや消耗など見せない敵相手に奮闘する恋歌さんのことを思い、勢い良く足を蹴り上げたその時。

風、が吹いた。

四歌（10）（後書き）

久々の更新となつてしまいました……。

四歌もそろそろ終わりの予定。

明日も更新して、今週中には完結予定です。

予定が伸び伸びですいません（汗

空想科学祭の投票期間／切りが迫ってきたようです。よろしければ、公式サイトの方（<http://sfesta2011.tuzikaze.com/>）で、投票への協力のほど、よろしく願います。

四歌（11）

締め切っていたはずの工場内に猛烈な風が吹き荒れた。

とつさに両目を瞑り、風に乗って飛び回る小さな機械類から身を守るため、両腕で顔を覆う。そしてすぐさま、こんなことしてる場合じゃないと、反射的な自己防衛から立ち直り、戦闘の様子を確認するために瞳を開く。

すると、そこには、少女が一人、浮いていた。

「わちきの居ぬ間に、ずいぶん面白いことになったもんだ。ちつと、邪魔するぞ」

ふわふわと、重量を忘れたように浮いたまま、涼し気なＴシャツとホットパンツの、栗色のショートカットの少女。浮かべる表情は、まるで、人間にはできるはずもない、壁の上方の窓ガラスを割って風に乗り侵入してきましたと言わんばかりの、したり顔。よく見ると、見覚えがあった……。

この工場までの道中、道を尋ねたバス停の少女だと想い出す。もつとも、空に浮いている時点で、同一人物を認めていいものかは疑わしかったけれど。

「ふむふむ、随分と恨みを買ったようじゃな。それでは身動き取れまいて、難儀なもんよなあ」

奇妙な言葉遣いで、大層偉そうに語るその姿は、歳相応の少女のものではなかった。随分と、上から目線が似合うような、人とは違う何かであるような、そういう態度に慣れているような振る舞い。

「ちよつと、えっ、え？」

恋歌さんでも、こんな体験はなかったらしく、口をあぐりと開け、目をぱちくりさせ、目の前の浮いている少女を驚いたように眺めていた。

「浮遊霊……じゃないよな。そんな希薄な存在じゃないし」

明里さんとは違う、確かな人のような存在感。浮いているという

「あれ、おかしいな。私が驚くなんて……はっはっは、異能力でも、異端者でも、『宙に浮いちゃう』なんていうのは、不可能に決まってるわよね」

僕ら、異能者、あるいはどこか欠陥を生じさせた人間にできることは精々しれている。世界や空間や人や物に干渉して、それらにも欠陥や歪みを介入させるだけ。

「ふわあ、ま、ここは正義のヒロインとして、わちきが場を納めてやろうではないか」

「そこらの若い人には、それ相應の対価を払ってもらうがの」
 楽しそうに笑い、少女が不穩な言葉を口にした。

宙に浮いたまま少女が腕を振るう。すると、小さな竜巻が形成されそのまま突風へと広がってスーツ男へと向かって行く。

断末魔の叫び声をあげ、悪霊が胡散していくのが、専門知識のあまりない僕にもわかった。

「これにて一件落着、つてなところかの」

突然のことに混乱した頭のまま僕たちは、ぼけーとそれに応え

る。

チクリと何かが胸に刺さるような感覚。

ああ、これは恋歌さんに初めて出会った時にも感じた奴だ、と一人納得する。

ひどくあっけなく、簡単にシンプルに表現してしまうなら、これからとてつもなく、面倒で刺激的で破天荒な出来事に巻き込まれそうな、そんな予感がしたのだ。

四歌（11）（後書き）

これにてなんとか有恋歌も一区切り、登場人物が出揃った感じです。まあ短編連作をうたっているので、大筋があつてないような部分はあるのですが（汗一応頭の中で構築した、適当にきりの良いところまでの話、で連載終了？　っぽい予定です。

おそらく6、7歌あたりが目処になるかと。

残りはエピローグをちょっと加えて四歌は一旦終了。

とはいっても、今回出てきた新しい子の詳しい話は、五歌に持ち越しになりそうです……。

今週中には、エピローグも更新する予定です。

四歌（玄関）

「ほんとーに、ありがとうございました」

最大限お辞儀され、感謝の言葉を送られた。

「いえいえ、無事で何よりでした、本当に」

事務所の玄関、僕と恋歌さんがあれやこれやのゴタゴタを収束させ、なんとか帰ってくると、待っていたのは無事普通の人間に戻った明里さんだった。

工場の資料にも残っていた通り、明里さんの身体はなんと工場での変な実験から逃げ出し、幽体離脱しかけの身体で本社のある市内の方まで戻ってきたいたのだ。

その後身元を確認できるものもなく、身体一つで意識を失い倒れていた所を、近くの病院に搬送され、意識が戻らない日々を送っていた。けれど、僕らがあの機械を壊したおかげで、中途半端に被害を受け浮遊霊として縛られていた霊体が、本来の身体に戻れたようだ。

「それより大丈夫なんですか？ 病院も無理やり飛び出してきたんですよね」

「いえいえ、確かに意識を失っていた期間は長かったです、身体は健康そのものです。どうしても助けていたただいたお二人に早くお礼がしたいと思ひまして。それに、霊体でなんとかこうにかプレイしたゲームも大変面白かったんですよ」

ニコリと笑いかけれ、思わず照れてしまう。

そういえば、客間の据え置きゲームで時間をつぶしてもらったっけ。あれをプレイしてもらうのはとても骨がおれた。なんとか頑張っつて、コントローラーを揺らしたりするだけの簡単なやつなら、霊体でも干渉できると発見して二人で喜びあったりしたのは、なんだから不思議な体験だった。

「お金はきちんと払います。今日はお礼だけになりますけど……本当

にお二人ともありがとうございました」

玄関で三人が立ちっぱなしのまましばらく雑談を交わした後、最後に明里さんが改めて頭を下げる。

「明里さん、会社のことは大変だと思いますが、今後同じことが起こらないよう、私の上司が対応しています。明里さんは気にせず働いて、ついでに私たちへの報酬でも払ってやってください」

恋歌さんが冗談を交えて、明里さんを送り出した。

その言葉に明里さんは嬉しそうな、柔らかい表情を浮かべ、綺麗に背筋を伸ばし、頭を下げ玄関を出ていく。誠心誠意、感謝の気持ちをぶつけられたようで、なんだかこちらまで暖かい気持ちになれたような気がした。

「さつて、私たちはゆっくり休みましょうか」

「長旅でしたもんね。ついでに寝てませんし」

工場での一悶着があつたその日の夜、恋歌さんからの連絡を受け、颯爽と現れた社長が事態を收拾させたのが、翌日の午後。

それから電車で揺られ、日も暮れたところに徹夜明けの僕らはなんとか事務所へと帰ってこれたというわけだ。

「はやく、車戻ってくるといいですね」

「もう後少しで完成らしいわよ。お盆終わりには終わってるんじゃないかしら」

この身体にずっしりと残る重たい疲れの理由の一つは、移動手段が車ではなく田舎の鈍行電車だったことにもある。

「社長以外にも、なんだか色んな人が来てましたね」

「さすがに事が大きくなっちゃったからね。お国の『組織』も来てはいたけど……まあ迂闊に手を出せない分野なんでしょうね。あんなのほんとにイレギュラー中のイレギュラーよ。社長の焦った顔、久しぶりに見たわねえ」

焦点の合っていない瞳で虚空を見上げながら、恋歌さんが達観した溜息を吐く。

今回の事件は僕らの思っていた以上に大きくなってしまった。霊

体に手を出した組織、その会社の一部分は完全に国の力で『なかったこと』にされる。さすがに企業すべてが、あの事業に参与していたわけではないし、不要な部分だけの抹消はスムーズに進んでいるんだろう。

たまたま巻き込まれただけの、明里さんのような本社の人間には、それほど影響はないはずだ。

霊体の商業的利用なんていう馬鹿げた技術や知識は、これでまた闇に葬られたわけだ。あの主犯格っぽいサラリーマンの男の末路は、あまり考えたくないような事になっているだろう。

「とにもかくにも、一件落着ですね」

「……だといいけど」

ひどく疲れた表情で恋歌さんが再びの溜息。その気持ちはわからなくもなかった。

「とりあえず、休みましょう。僕も恋歌さんも社長の手伝いで色々走り回されましたからね」

「そうね、昨日は寝てないし、とりあえずベットで横になりたいわ」
「タイミングよく現れた明里さんとの話も終わったし、今日は他に用事はないはずだ。なので、今から明日の昼過ぎまでぐっすりと爆睡することに障害はない。」

「何か食べます？ 簡単なものなら作りますけど」

「うーん、いいや、それより寝たい」

「そりゃそうですね」

恋歌さんと二人、玄関での会話を終了し、寝室へ向かうため、戸に背を向け方向転換する。

さって、寝るぞーなんて、妙なことにヤル気を出していると、ガラガラと古めかしい音をたて、開けられた引き戸。

「ぷっはぁー。ほうほう、それなりに都会やの、この辺りは、ひとつ飛びでやってきたかったが、人間の使う電車とかいうのも中々楽しかったわ」

まるで、当たり前のように、旅路の感想を喋りながら、今帰って

きましたというふうに見えた少女。

「親父の用意したこのキャリーケースとやらも便利じゃな。ついつい転がすのが楽しくなってしまう」

まるで、旅行用の荷物を大量に抱え、これから外泊しますよという装備を見せつける栗色の髪の少女。

「お、久しぶりじゃの、若いの。約束通り世話になる。なーに、わちきは偉いからの、そんなには迷惑はかけんですむと思うぞ」

玄関の塀に腰をかけ、靴置き場で靴を脱ぎ始めたＴシャツホットパンツの少女。

「そういや、ちゃんとした自己紹介がまだじゃったな。聞いとるかもしれんが、わちきは東雲風見^{しのめづみ}。これからしばらく世話になるぞ」

満面の笑みが眩しい、風見と名乗る少女。

突然のことに思考停止し、ぽかんと口を開け放心する僕と恋歌さん。

ゴタゴタの中聞いた情報を、僅かに動く頭の片隅で思い出すに、彼女、風見は、俗にいう、風神とか、天狗とか、そう呼ばれる極めて希少価値の高い、『人外』に分類される少女だった。

四歌（玄関）（後書き）

これにてなんとか四歌も終了です。

今から広島↓関西↓広島の旅へと出かけます。帰りは月曜日に……

執筆中にミスを発見したり（明里さんを一部で明理と書いてたというミスが……。旅から戻ったらなおします 汗）

キャラクターの名前が定まっていなかったり（ふみ という読みは決定していたのですが、史↓風美↓風見 という流れで変化。実際の文内に突っ込んでみると、わかりにくかったり映えない名前なのはある気がします……）

色々ありましたが、なんとかここまで。

さて、新しい話を考えないと……。

やっぱりあれですね、行き当たりばったりはきついですねw

風見さんの詳しい話は五歌へと持ち越しです。更新は来週末あたりを予定しています。

今後ともよろしければお付き合いのほどよろしくお願いします。

追伸：

空想科学祭の投票ページ切りがすぐ間近です。投票の数が大変重要で、まだ足りていないようです。よろしければ公式ページ（<http://sfvesta2011.tuzikaze.com/>）にて投票のほど、宜しく願います。

五歌（1）

女子高なんてあんなもん、魔窟よ魔窟。

「お邪魔しまーす」

適当に頭を下げながら、事務所の玄関を開ける。合鍵の所持を許された、僕にとっての夏休みの習慣の一つ。朝、目が覚めると同時に『超常現象研究所』という名前だけは大層な建物へと侵入を開始する。

昨日は大学の図書館で借りたい本があったので、事務所に泊まらず、大学の傍のアパートに一度戻りそのまま寝てしまった。大好きな人と一つ屋根の下で一夜を過ごすというのは慣れきった今でも大変魅力的だったが、残念ながら決定的な行為は一度も起きないままだ。もともと、完璧に『大人の』身体になりきれない僕では起こしようもないのだけど……。

「今日は朝ごはん作りますね。朝早くこれたので」

24時間営業のスーパーでこさえた新鮮食材を冷蔵庫に詰めながら、そんなことを呟いてみる。当然恋歌さんには聞こえない。だって、まだ寝てるから。

「朝もはよから御苦労なこったの。すまんがいつも通り、わちきのは醤油で味付けしてたも」

しかし、今日は珍しく返事が返ってきてしまった。

「いたのかよ……」

「いちゃ悪いか、わっば」

意地悪な笑みを浮かべて、台所横の長机からニタニタとこちらを見るのは東雲風見。つい二週間程前から加わった、この家の新たな住人だ。

今ではすっかり我社の一員……いや、最初っからこの場所を我が物顔で闊歩し、遠慮なんてものは微塵もなかった。そりゃ生活に馴

染むのも無駄に早くなるわけだ。

「ここにくるまで洋食など数えるほどしか口にすることがなかったが。ふむ、これこそが見聞を広めるということだな。親父が言うところ通り、神たるもの下々の生活を知っておかねばならんからの」などと大層な言い訳を述べながらも、椅子に座り嬉々として朝食の出来上がりを待つ風見。見た目は世間一般の女子高生ぐらいだというのに、この態度と言葉遣い。

自称ではなく、相手は認めたくはないが本物の神様、だからこんな性格になるのも仕方がないと、小さく溜息をつく。

「へい、和風ソースで味付けしたさっぱりオムレツに付け合わせのサラダでございます。あと、パンは自分で焼けよ、いいかげん」

「わっぱの癖に生意気な……。まあ良い、有理は中々良い仕事をしよるからな。特別にわちきも働いてやろうではないか」

小気味良く、くるくると回転して洒落た朝食への期待を表現しながら、風見は食パンを焼きに席をたつ。まったく、調子の良い奴だ。「トースターというのも便利だの。パンを焼くための機械とはひどく限定的な気がしておったが、こいつはオールマイティー意外となんでもこなしてくれる。有理があらぬ時の食事も、こいつがおれば乗り越えられるというものだ」

目を輝かせ楽しそうにトースターのつまみを回す風見の姿を見ると、少なくとも僕にとってはただの女学生にしか映らない。

そりゃあ最初は、相手は神様だと怯えたり、敬ったりもしてみたが……、今となっては遠い過去の出来事のようにだった。

五歌（1）（後書き）

というわけでいわゆる新章突入。

この言葉を使うとそこはかとなく打ち切り臭が漂います……。

例のごとく見切り発進。

うん…… なんとかなるよね。

できれば週末連休中にもう一回更新する予定です。

五歌（2）

思えばネタふりは明里さんの事件解決時には終了していた。

道中、道端でボケーツと作戦を練っていた神様に、僕たちが道を尋ねたのはまったくの偶然。下界で起こる珍妙な事件に出しゃばり、そろそろ解決してやろうかなと思っていた神様と、作戦決行日時が同じだったのも偶然。

それを面白く思った神様が気まぐれを起こしたのは……おそらく、僕らが利用されただけなんだろう。

「あの社長が一目置くほどのVIP扱い……。そもそも国に天然記念物扱いだもんね、あいつ、こんなとこいていいのかよ、ほんとに」
件の神様をきちんと形容する術を僕は持っていない。

けれど、今までの情報を総括するに、彼女たち神様は天然記念物のようなもので、少人数ながら僕たちただの人間の生活を見守ってくれているらしかった。

オカルト方面の事象に首を突っ込み、『吸血鬼』や『異能力』はただの病気だと言いはる僕たちにとっては嘘のようなほんとの話。

「恋歌さん、起きてますか？」

短く急な階段を上がり寝室へと足を運ぶ。

平屋の二階というか、屋根裏部屋のような小さなスペースに、恋歌さんの寝室と、客間が並んでいる。二週間ほど前は空き部屋だった客間には風見と書かれた可愛いフォントの看板がぶら下げられていた。

「起きてますか？ もう朝ですよ」

軽くノックをしてから勝手に侵入。昨日も仕事で遅かったのか、恋歌さんは完全オフモードで夏にしては分厚い布団の中で丸まっていた。

「またクーラーつけっぱなしですか？ まあいいですけど、電気代的には間違ってますが……」

恋歌さんの部屋には年中コタツが出しっ放しだった。いわく、真夏にクーラーで冷やした部屋の中、コタツに温まってアイスなんかを食べるのが至福の一時らしい。

夏の暑さも薄れてきたのか、冷房がガンガン効いた部屋は肌寒いほどだ。

「ん？ もう、朝なのね……」

「今日なんか用事あるんですね。風見なら先に一階で朝御飯食べますよ」

布団越しに肩を揺らすと、もっさりした動作で恋歌さんが起き上がる。恋歌さんはまだ眠いのか、目を擦りながら僕の姿を確認するとゆっくりと口を開いた。

「有理君がこの時間にいるってことは……じゅく、じゅく？」

「半熟のいい感じのが出来ましたよ。冷めないうちに」

カーテンを開けながら、僕が答えるやいなや、恋歌さんは素早い動作で身支度を整え、一階へと下りて行った。

「相変わらず、一手間かかった朝食は恋歌さんへの一番の目覚ましなんです」

なんて呟きながら嘆息してみたりする。

食い扶持が一人増えたことだし、料理のレパートリーを増やすというのも、悪くないかもしれない。

五歌（2）（後書き）

更新速度があ……。があ……。

忍びねえ、忍びねえなあ。

週一更新だけは守っていききたい今日この頃。

そんなわけで、新章突入。まだ話が動き出してないですが……今回
は戦闘やら敵もないゆったり仕様の予定です。

五歌(3)

「というわけで、本日は女子高に行きます、女子高」

時刻は朝の9時過ぎ、通勤ラッシュが終わり空きだした大通りを車の助手席からぼーっと眺めてみたりする。

「唐突なのはいつものことなんで別に驚きませんが……車、やっと戻ってきたんですね」

「そうなのよ、そうなのよ。私の愛しのカプチーノちゃん。パワーアップして復活よ」

以前の依頼で銃撃戦に巻き込まれ名誉の負傷退場を決め込んでいた、恋歌さん溺愛の軽スポーツ自動車。どうやらつい最近、修理屋から戻ってきたようだ。

「ふむ、この車はわちきも好きじゃぞ。ちと後部座席が狭いがな」

「文句言うんじゃないの、後部座席なんて無茶ぶりもいいところだったんだけど……。いやー整備屋のおじさんに感謝しないとね、さすが社長の知り合い、確かな腕だったわ」

以前は二人乗りだったこの車も、これからはなんとかギリギリ四人乗り。助手席から後ろを見ると、無理やりこさえたような小さなスペースに、窮屈そうな座席が用意されていた。

「ケツ、ケツが痛いわ……。なんじゃわっぱ、ジロジロ見よって」

「いや、そういう格好していると、風見も立派な女子高生に見えるなつてさ」

お尻を押さえながら、狭いシートに不機嫌そうに座る風見の姿は上品なブレザーの制服姿。僕も大学に入ってから電車や街中で時々見かけていたが、なるほどこれがかの女子高のだったのか。

「山ノ宮女子高等学校。いいとこのお嬢さんらも通うような、歴史ある学校……とかいうのらしいわ。周りは山しかないけど。有理君も知ってるんでしょ？」

「はい、大学の友達なんかがよく騒いでます。秋になるとあそこの

学祭の招待券が高額で取り引きされたり……」

「えらくベタなことしてんのねえ。今時招待制の学園祭つてのもどうかと思うけど」

大学の友達の台詞を借りるなら、山ノ宮女子高はレベルの高い可愛い子も多くて、しかも制服が可愛いときている。学園祭という名目で、普段踏み入ることのない彼の地に招かれた者たちは皆一様に、まさにあそこは桃源郷、などと供述し男どもに羨ましがられるというのが例年の決まりごとだった。

「ほうほう、そいつはいい事を聞いた。わっぱ、用意してやるから学園祭の招待状……言い値で買えよ。主にわちきのお小遣いのために」

「自称神様がえらく小市民的なことを言ってくれるなあ……」
半ば呆れつつ言葉を返す。

「だってなあ、恋歌は思いの外厳しいし、ここじゃああのだ田舎のように貢物やらお賽銭も期待できんからの」

「私だって、最初は戸惑いもしたけれど……。神様たって、中身は『コレ』なんだものね。それにあなたの父上からも、ついでに間接的にウチの社長からも、くれぐれも宜しくされてんだから半端はできないわよ」

「うち、こんな予定ではなかったんじゃがなあ。もつとこー、こちらでも崇め奉つてもらうつもりだったんじゃが」

僕らとしては、『こんなの』が神様でありがたかった部分も大きい。

自分とは違う、圧倒的な力を持っている存在でも、話が出る見た目に同期した歳相応の反応を見せてくれたおかげで、今となっては僕も恋歌さんも風見への遠慮は完璧なほどになくなっていた。

「風見もついに女子高生デビューですかあ」

「そうねえ、嬉しいやら恥ずかしいやら。今日は転入手続きだけだつてのになんだか私までそわそわしてきたわ」

隣でハンドルを握る恋歌さんの方を見ると、なんだか緊張したよ

うに頬を硬直させていた。どうやら、タイトな黒のスーツにストッキングという今日の格好は正装ということだったらしい。

一方で僕は、適当に自宅から着てきたジーンズにパーカーなんてラフな格好だけど、よかったんだろうか。

「ところで、この場合僕は風見の何として学校に行けばいいんですかね……」

「私は名目上保護者になってて、暇そうにしてた有理君を拉致した張本人だけど……どうしょ。さすがに家族ってわけにもいかないし。親戚、従兄弟とか？」

「その場合、どっちが上で、どっちが下なんですかね？」

無表情で恋歌さんに訊いてみた。

「さ、さあ？　どうなのかしらー」

棒読み＋愛想笑いで返された。僕が年齢に対して成長しないこの見てくれを気にしているのを知っている恋歌さんは、この手の話題になると焦ったような態度になる。

曰く、そういう時の僕は怖いらしい、オーラとかが。

「もちろんわっぱが下に決まるところが。内面も、外見もあきらかにわちきの方が成熟しとるからの」

人よりも遅い時の流れで生きているらしい神様であるところの風見は自信満々にそう答えを出した。

長い年月を経て、どうやらこいつは気を使ったり、他の人間に配慮するなんてことを学んでこなかったらしい。

けれどまあ、そんなところが人間らしくて、庶民派の神様というのも悪くないと思えてしまう。

「どの口が言うんだか……。まあ、お前が僕より成熟してるってのは認めるけどさ。いや、冷静さでは僕のほうが上かな……。なんだか負けを認めたくないし」

ついつい口では悪態をついてしまうけど。

そついう意味では僕もまだまだ子供っぽいのだろう。

五歌（3）（後書き）

色々設定不足が露呈してきた今日この頃。

うーん、事務所とか今書いたのと、昔書いたので、情報が違ってる場所とかが現れたりしてきます。

気づいた所はその都度修正。

プロットとか設定とかあんまり書かないんですが……。こういうのは長期連載になるとやっぱり困るのですね。

なんか矛盾があつたらごめんなさい（汗

追記：

カプチーノという軽自動車かつ、スポーツカーな車は実在していて、実際は四人乗りに改造するのはものすごく大変らしいです。っていうかほぼ無理くさい……。

トランク潰したり、ボディをちょっといじったりだとか……。あんな詳しくないんですがw

恋歌さんのは、神の腕を持った整備工が、運良く手元にあったパーツを使い、カプチーノの元の外観を損なわずに、奇跡的にトランクを潰すことで後部座席の増設に成功した。

ぐらいの設定にしておきましょう。

きつと有り得ないぐらい狭いです。後部座席は多分車検ぎりぎりの安全性に達しない。

うん。

ファンタジーですから（逃げ口上）

五歌（4）

車を止めて、でかい敷地内をキョロキョロしながら進む。下駄箱へと向かい歩く最中、部活動が何かで夏休み中だというのに朝から登校する女の子たちの姿が見えた。

女子高っていいものだなあ、なんて無表情で喜びながら下駄箱をくぐり来客用のスリッパを拝借していると、こちらの到着を知っていたのか、すぐさま若い女の人がやって来た。

「あなたが、東雲風見さんね。9月からよろしく、あなたの編入する2年百合組担任の高梨です」

綺麗にセツトされたボブカットに小振りな顔。清楚な服装に、肌寒いのかお嬢様みたいな手袋をしたお姉さんが僕らを出迎えた。

いかにも女子高、女子大学を経て純粹培養された箱入り娘っていうのを連想してしまい、こういう人がお嬢様私立女子高の先生をやっているんだなあ、とまじまじと見てしまった。

「保護者の方もわざわざご足労くださりありがとうございますね。たいした話は出来ませんが、校内の雰囲気だけでも体験して行ってください」

応接室まで案内するとのことなので、担任の高梨先生の後を着いて行く。女子高初体験の僕としては、つつい校内をキョロキョロしてしまう。

「皆さんはご親戚かなにかですか？」

「ええそんなところですよ。田舎の親戚がこの子に都会の生活を教えたいということで、今は私の家で面倒を見ているというわけですね」

「僕はこいつの兄貴分みたいなもんで、一応大学生です」

訊ねられる前に、先手を打って釘を差しておいた。

「そうですか。ご両親とは離れているということ、少し心配していたのですが、皆さんのような方たちが周りにいれば安心ですね」

「ふむ、わちきも感謝はしておるぞ……一応」

社交辞令なのか、けれど嫌味のない笑顔で話す高梨さんに、風見がドヤ顔で言葉を返した。

「風見さんも面白い子みたいです。今から新学期が楽しみです」
面白い子というよりは、ちょっと頭の残念な子に分類されそうなのが気がかりだ。特に学校という空間では……、まあいじめられるなんてことは万が一にもありえないだろうけど。

「さて、ここが応接室です。あつ、風見さん、すみませんがここに座ってちよつと待っていてもらえませんか。保護者の方に少し話があるのです」

「うお、ソファーがふかふかじゃ。こいつは気持ちいい」

高級そうなソファーやら、芸術品が置かれた応接間に早くも興味津々なのか、風見は楽しそうに室内に入っていく。

「すいません、お二人には……廊下で申し訳ありませんが、少しお話がありまして」

「なんででしょうか？」

突然の事態に戸惑う僕の横で恋歌さんが爽やかに笑顔を浮かべ、会話を続ける。

「お二人はそのオカルト専門の何でも屋、みたいなことをされてたりしませんか？」

「ええ、そう思っていたいただいて問題ありませんが、なんでまたご存知で？」

「実は私のクラスに宮城霞美さんという生徒がしまして……顧問をしている華道部の部員でもあるんですが。彼女の話聴いて、もしや、と思っていたんですが、やっぱりそうでしたか！」

高梨さんが、少し表情を崩し、先生の顔というよりは一人の人間として嬉しそうに笑う。

「本当にありがとうございます。彼女、学校を休みがちだったので、一学期の終わり頃からきちんと来てくれて……お二人にはなんて感謝していいものか」

「いえいえ、そんな先生にまで感謝されるなんて……」

霞美さん、といえば春の終わり頃に依頼で関わったポルターガイスト現象を起こしていた女の子だったと記憶している。

「あなたが噂の有理君ですよ。恋歌さんのことは、風見さんの保護者資料で拝見して、もしかやと思った程度ですが、あなたのことはすぐにわかりましたよ。霞美さんが話す特徴通り、ほんとに可愛らしい容姿で」

「それはそれは、光栄ですね。噂してくれてるなんて」

感謝してもらえるのは嬉しいけれど、霞美さんからは別の感情まで向けられている気がして、半ば返答が投げやりになってしまった。そもそも可愛いと言われても、嬉しくともなんともない。

隣では恋歌さんが、あらあらうふふ、みたいな顔をして楽しそうに微笑んでいた。

「お二人に会えてよかったです。さ、まずは風見さんの編入案内などを……」

そして、少し小声になりながら、高梨さんが言葉を続ける。

「その後でいいので、少し時間をいただけないでしょうか？ 山ノ宮からの正式な依頼ということになるかと思いますが、少し困ったことがあります」

意外な言葉に驚きつつ、恋歌さんへとアイコンタクトを送る。

そしてお互い、ニカリと笑い頷いた。

「わかりました。是非、ご相談ください」

風見の付き添いだけでは退屈しそうだと思っていた所に、これ幸いと言ってきた興味深い話。なんだか面白そうなことになってきたと、ついワクワクとしている自分がいた。

五歌（4）（後書き）

なにかを言うつもりだったのに、なんだっけかなー。
とか思いながらのあとがき。

とくに明記してませんが、

有理君は本名で、苗字があります。

恋歌さんの恋歌というのは、称号というか、芸名とかそんなものに近いです。でも、正式な書類でもそっちで通るので、今はそれが本名みたいなもんなんでしょう。
なので苗字もあるのでしょうか。

考えてませんが。

……いえ、当初からそういう予定ダタンデスヨ。

まあ、

社長とか

クロネコさん、

とかそういうニックネームで通っていきたいなーと思っていたのです。

なのでメインの二人も、苗字で呼ぶことはおそらくないかと、予想中です。

五歌（5）

「風見さん？ 後は自由見学でいいのね？」

「わちきにどんとまかしておれ、これから世話になる場所じゃ、色々と回るところもあるでな」

一通り、編入案内として、高校の生い立ちから施設や部活動、試験や学校規則などのややこしい説明を受けた後、風見は真っ先に自由見学を切り出した。

田舎から出てただけあって、色んなものに興味津々なのだろう。神様が故郷でも学校に通っていたかは定かではないが、少なくともこんなハイソでナウい女子高の施設は初体験に違いない。

「気をつけてねー。なんかあったら連絡すんのよ」

恋歌さんの呼びかけに手の甲をひらひらさせて応えながら、風見はさっさと廊下の角へと消えていった。

「さて、お二人への相談なんですが、事情がありまして、すいませんが私から説明させていただきます」

高梨さんに招かれ、再び応接室のソファへと腰を下ろす。

「保護者の方、というよりは学校に来られる業者の方として話さないといけませんかね。すいません、なんだか混乱してしまつて」

おどけたように笑いながら、高梨先生は仕切り直し、手元に持っていたクリアファイルからいくつかの資料を取り出した。

「今回の依頼内容ですが……こちらの案件について調査してほしいというところでしょうか」

渡されたコピー用紙を手に取り確認する。

「七不思議ですか」

「七不思議ですねえ」

僕と恋歌さんがそれぞれ間の抜けた言葉でそれを表現した。

資料の最初の方に白紙のスペースを大量に取りながら、7つの言葉が印字されている。

- ・トイレの鈴木さん
- ・動く人体模型
- ・校長ズラ疑惑
- ・13階段
- ・ベーターベンの絵画
- ・切り裂き女
- ・保健室の佐藤

「これまたベタなもんが出て来たもんだ」

「さすがに僕もびっくりです。あ、驚いた顔になってます、僕」

自分でも珍しい表情になってしまった気がしたので、恋歌さんに確認してみたりした。

「校長先生まで話題にされていて……。これを小耳に挟んだ学園長から、私が個人的に相談されていたというわけです」

苦笑いを浮かべ、高梨先生がおどと頭を下げる。

「校長先生のズラは実はホントだったりするんですが。それはいいんです、ただ生徒に実害が出ていて……。ほんとうに心霊的なものなのか人為的なものなのか、すみませんが生徒の安全のために調査をお願いします」

校長のズラは本物なんですな。

と声には出さずに突っ込んでみたりする。

「お任せ下さい。個人的にもこういう話は大好きですから」

恋歌さんは高梨先生の両手を握り、まかせてくださいとばかりに頷いている。

けれど、その横顔は頬がつり上がった見覚えのあるものだった。僕をいじめる時にもよく見かけける、楽しいおもちゃをみつけた、そんな感じの表情なのかもしれない。

五歌（5）（後書き）

約一週間ぶりの更新に

（遅れた的な意味で）くやしいのう、くやしいのう

とかコネタをはさみつつ。

やはり習慣は大切ですね。ちょっと時間が空いたため、というよりはタイピングなんです筆のノリが悪かったような。

日々精進ですね。

五歌（6）

「さて、捜査開始と行きましようか」

風見は何処かへ一人旅、高梨先生とはいくつかの資料をもらい今は仕事に戻ってもらっている。僕と恋歌さんの二人だけのほうが動きやすとの判断だ。

「女子高と言っても、夏休み中となると結構静かなもんですね」

「男にありがちな幻想は捨てるもんね。女子高なんてね……女子高なんてね……」

ぶつぶつと、忌々しげに呟く恋歌さんの様子から一つの疑問が浮かぶ。

「ずいぶん女子高に詳しいみたいです、恋歌さん」

「そりゃそうよ。私の最終学歴も女子しかいない学校だったから」

思い出したくないと頭の押さえながら、唇を噛む恋歌さん。どうやらよほど大変な目にあってきたようだ。

「それにそもそも、女というのは陰か陽で言えば陰。オカルト的に言っても、女子高つてのは色々惹きつけたりもするらしいわよ。ま、そんなのよりも先に疑うものがあるとは思っけど」

意味深な笑を浮かべ、恋歌さんがある一室を指す。

「というわけで、さっさと行きましよう。まずは音楽室ってことで通常授業が行われる教室が並ぶ棟の隣側、音楽室や美術室文化部の部の部室等が並ぶ特別棟の三階。高梨先生からもらった見取り図通りの位置に音楽室という札が確認できた。

「ベートベンの絵画の目がキョロキョロと動き出すなんて、えらく古典的な怪談ですよ」

「古典的だからこそ普遍なのよ。まあ時代が育んだ様式美ってところかしら」

教室の前で耳を澄ますと、細々とした声が聞こえてくる。時折、管楽器特有の音色が響いてくるところを見ると、吹奏楽部の部員た

ちが、本格的な活動の前に駄弁っているところだろう。

「というわけで早速お邪魔しましょうか」

「なんか面倒臭そうなので、設定は恋歌さんにお任せします」

ニツコリと、笑いかけられてしまった。楽しそうに……。

「お邪魔します、吹奏楽部のみなさん。OBの山宮麗華といいます。こっちは弟の雄輔といって……」

ドアを開け、がやがやとした音楽室に突撃する。案の設定は僕が弟、偽名なんかを使って適当に誤魔化すつもりらしい。

キョトンとする女子生徒に軽く会釈して音楽室の中央へと進んでいく。

この先は恋歌さんの話術頼り、まあ女の子をたらし込むのに定評のある恋歌さんのことだ、きつと上手くやってくれるだろう。

「これ雄輔っていうんですけど、どうです、可愛いでしょ。これでも大学生なんですけど」

僕としては自分に火の粉が飛んでこないことを祈るばかりだった。なんかもう手遅れっぽいけど。

五歌（6）（後書き）

今日は祝日です。

なんでも文化の日とかいう日らしい……。

主に寝てるだけの休日でしたが何か
と意地をはってみる。

五歌（7）

「果てしなく疲れました……」

「あらあら、女子高生に囲まれて大人気だった人がいう台詞かねえ」
隣を歩く恋歌さんは意地悪な顔でこちらに笑いかけてくる。それに仏頂面で返しながら、小さく溜息を吐いた。

「そうなるように誘導したのは誰ですか、まったく」

音楽室を出て次の行きさへと移動中、隣の恋歌さんを睨みつけながら先程まで行われていた茶番劇を思い返す。

「情報を訊き出すためだからって、僕をダシに使う必要はなかったように思いますが」

恋歌さんあらため、麗華さんの弟雄輔として紹介され僕は、女子生徒たちの警戒心を解かせるためのダシに使われたようだ。

可愛いだの。

アドレス教えてだの。

また来てくださいだの。

持て囃されて嫌というわけではないが、どうせ僕みたいな童顔は可愛い可愛いいわれるだけの客寄せパンダ。まあ僕は恋歌さん一人に操を立てているつもりだから、関係ないけどさ。

「次はどこに行くんですか？」

「保健室ね。怪談の舞台になってるし、ああいう場所は情報が集まりやすいのよ」

高梨先生からもらった資料をたどり、保健室の場所を確認する。保健室は特別棟の一階らしく、スリッパの音を響かせながら、音楽室のあった三階から下の階へと向かって行く。

「で、収穫はどの程度」

「そりやもうばっちりとおかげさまでほとんど解決したも当然」
自信たっぷりそんな返事が返ってきた。

「僕にはあんなどうでもいい会話の中に有用な情報がそれほどあつ

たとは思えませんが」

「有理君もちょっとは女の子の慣れないとね。あれぐらい普通よ普通」

女性が三人寄ればかしましいなんて言葉もあるけど、その通りで僕みたいなうぶな少年がそんな会話に書いて行くのは無理だった。

情報を拾ってちょっとは貢献してやろうとも思ったのも最初だけ、後は周りの勢いに押されるばかりという結果だ。

「怪談なんてのはほとんどが勘違いか錯覚、あるいは『人間』の作業なのよ」

その『人間』というのは、霊体やらを含めているのだろうか。恋歌さんの表情は音楽室を出た時からかけている伊達メガネのせいで読み取ることができない。

「その理屈で言えば、ベートーベンの絵画なんて動くはずもないですよね」

それぐらい僕にだってわかる。どうせ暗い室内で、『なんとなく動いたような気がした、というのが何時の間にやら怪談にまで拡大解釈されたにすぎない。

「それはどうかしら？ 錯覚なのか、本当にそういう気配がしたのか、本当の所は簡単にはわからないようにできてるのよ、世の中つてのは」

意味深に笑いながら、恋歌さんが言葉を続ける。

「音楽室で聞いた話を総括するに、一番生徒への実害が出てるのがこの切り裂き女ね……。なんでも、人や物に突然切り裂いてくる物騒な女がいるって怪談らしいけど」

「言ってみましたね。友達の友達？ がなんでも力バンを切り裂かれたとか」

「物騒な話よまったく」

呆れた風ではない、棒読みの白々しい同意。

「ま、一番の実害は怪談という噂話が生徒たちに広がってるってとこね。疑心暗鬼、怪談という土台があれば本来居ないものまで現実

のものにされてしまう。いうなれば、怪物や妖怪も、人が創りだしたものだとも言えるわね」

リアリストなのか、そうでないのか相変わらず恋歌さんはわかりにくい人だった。

もつとも、自分自身が異常なのはまだしも、身近に『神様』がいる僕たちとしてはそう簡単にオカルト現象を否定するわけにもいかない。

「次は保健室ですね。さっさと行きましょう。どうせ、恋歌さんは答えまで教えてくれませんか」

だから自分で考えるしかない。

足りない頭を使って、ぼんやりと考えてみるけれどすぐに挫折する。そもそも、霊体が視えるらしいメガネを持っている恋歌さんと僕とでは、前提知識も情報もすでに大きく差があった。

精々僕にわかるのは、『いる』ような気がするとかそんなあやふやな感想ぐらいで……。

「有理君？ ついたわよ？」

考え事をしているうちに保健室に着いたようで、恋歌さんが一声かけてきた。

「あ、大丈夫です。ちょっと考え事してただけなんで」

そう返事をする、恋歌さんが保健室のドアを軽くノックする。

やがて女性の返事が返ってくるのを確認してさっそく入室するためにドアをスライドさせた。

ぞわりとした感覚。

保健室の中に足を踏み入れた第一印象はまさに、『何か』人以外のモノが部屋の中にいるという感触だった。

五歌（7）（後書き）

休みの日、最近ずっと雨な気がします。

現在愛用中の原動機付き自転車、雨天時は起動確率が絶望的になります。

というわけで今日も引きこもり。

が基本なのですが、外出しないわけにもいかないのが一人暮らし。今日はスーパーに買い出しに行つて、カレーを作ろうと思います。

と意味もないつぶやきをあとがきに……。

五歌（8）

「あらあら、こんなお客さんがくるなんて珍しいねえ」

保健室の先生と言え、どんな人物を想像するだろう。優しい、知的、聖母、なんやらかんたら、医療関係者は白衣の天使と揶揄されたりもする、そういう意味でそれらのイメージを抱くことは普通の発想だ。

年上のお姉さんスキーを自称する僕としても、その辺りはぬかりない。最近、明里さんや高梨先生とか、綺麗な年上に会う機会も多かったし、期待するのも仕方がないと思う。

そして、期待して入室した僕を出迎えたのは。

「ちようど夏休みで暇してたところなんだ。ちよつと座って行かないかい？」

どこにでもいるただのオバサンだった。

もしかすると、もしかすると、数十年前は絶世の美女だったのかもしれない。品のよさそうな動作や、優しそうな表情からはそれを感じさせられるような気もしないでもない。

「すみませんわざわざ、私こういうものでしてちよつとお話を……」

『外向き』用の名刺を差し出し、保険医の先生へ適当な社交辞令を述べながら恋歌さんが今回の依頼について掻い摘んで説明する。

聞こえる情報をまとめるに、どうやら今回はそれなりに信用のある探偵事務所という設定らしい。

「こちら、助手の有理君です」

「ど、どうも」

探偵事務所という、我らが超常現象研究所の一つの側面から紹介したこともあり、今回は本名での紹介だった。

軽く会釈を返し、さっさと入室させてもらうことにする。綺麗な年上お姉さんを何気に期待していた僕は、意気消沈しさっさと差し出されたパイプ椅子に腰掛けた。やさぐれた僕は中々保健室の雰囲気

気にマツチしていると自負してみる。

本来この場所は、サボりたい盛りの高校生だとか、ホントに調子の悪い生徒がやってくる場所だ。

だから、こんな気配は異質だ。

冷たい、背中を微力でなでられ続けるような感触がこそばゆい。

営業トークと、社交辞令を続ける恋歌さんと先生そっちのけに、気配の先をたどってみると、カーテンで仕切られたベッドの列の一番奥。窓際のベッドに気配があった。

今のところ危険な感覚はない。

以前出会った、大学の同級生草薙さんのとこの地縛霊とも違う。けれど、心霊関係初級者であるところの僕からしても気配を感じることができるとするのは、それなりに形ができているということだ。

「すみません、それでは私も座らせていただきます」

「いえいえ、この時期になると楽しみはあんださんみたいなお客さんとの会話ぐらいでねえ。恋歌ちゃん面白いし、おばさん大歓迎よ」

社交辞令を終えてずいぶん打ち解けた恋歌さんと保険医さんが僕の近くに椅子に腰を落とした。

「さて、何から話そうか……」

「そうですね、怪談話についても興味深いところなんですけど、まずは上村さんの昔話なんか、私とても興味がありますわ」

植村さんというのがこのオバサンの名前らしい。

植村さんは、恋歌さんの言葉に機嫌を良くしたのか、滑舌の良いはつきりとした口調で、昔語りを開始した。そんな女性特有のかしましそうな話題に僕はひっそりげんがりしていると恋歌さんがこちらに向かい意味深な笑を浮かべていた。

そして、視線で一番置くのベットを指す。

ということは、この保健室で感じる超常現象のヒントが上村さんの話の中にあるということだろうか。

「中々興味深いお話です」

そう思うと、聞き入らないわけにはいかない。

作った、愛想のよさそうな表情と声色で、上村さんの話に合の手をいれる。話はちょうど、上村さんの若かりし頃の武勇伝へと突入していた。

なんでも、この女子高に赴任する前は、男子高生に言い寄られただの、モテただの……。話を聞いていると、品が良くて優しいのに、このフランクさだ。

生徒に人気があるのはわかるが……。

ベッドに潜まれるほどの思いの影は見つからない。

ましてや、心霊現象というのは人が死後、形を変えて現世に留まるからこそ生まれるのが基本だと思う。人が死んだりというのは、先生にとってはとても大きな記憶だ。

あえて伏せているという可能性もあるが、

「あら、それでその生徒さんとは——ほんとですか、それはすごいですね」

恋歌さんの話術で聞き出せないとなるとホントにそんな出来事はなかったかもしれない。

思考停止し、ヒントを求めるように恋歌さんの横顔をちらりと見る。会話の合間を見て帰ってきた返答は、綺麗なお姉さんの意地悪で魅力的な笑顔だった。

五歌（8）（後書き）

昨日は12時間ほど惰眠をむさぼりました……。

時は金なり。

ご利用は計画的にですね。

五歌（9）

「あら、もうこんな時間、お二人はお昼はいいの？」

早朝から山ノ宮に缶詰状態、色々と駆け回っていたせいで時間を忘れていたけれど、ケータイで時間を確認するとすでに正午を少し回っていた。

「失念していました……購買ぐらいは夏休みでも営業しているんでしょうか？」

「ええそうね。教員用のお弁当も幾つか用意されてるし、おばさんがついでに恋歌ちゃんたちの分もないか、掛けあってみるわ。それでここで一緒に食べなさい。ね、ね、最近生徒たちで流行ってる吸血鬼怪談なんかもまだ話してないし」

上村さんはまだまだ話し足りないといった様子で、わざわざ昼食の世話までしてくれるようだ。

「そうですね、ではすいませんがお願いします。それと」

恋歌さんが一呼吸タメ、今まで少し違った声色で言葉を呟く。

「『とつてきてもらえますか？』私たちはこちらで待っていますので」

「わかったわ。ちょっと待っててね」

上村さんは気のいい返事を返すと、さっそく購買へと向かって保健室を出ていった。

「部外者だけ残して出ていく保険医さんですか……。恋歌さんもワルですねえ」

「あらわかった？ でもそんな言い方は侵害だわ。これは言霊と呼べるほどの強い制約じゃない。ちよつとした『お願い』程度の言葉なんだから」

恋歌さんの言葉の力に縛られて上村さんは保健室から去り、残されたのは部外者二人。恋歌さんの目的はおそらく、あそこの何か。視線は窓側一番置くのベッドへと向けられる。

「あれって、やっぱり幽霊なんですか？」

「うーん、これは中々希少な在り方をしている見ただけど……まあそんなもんね。私に言わせれば所詮は人の範疇なんだけど」

頑なに、超常現象を人のサガで説明しようとする恋歌さんは、取り出した伊達メガネ越しに、ベッドの周りを調べ始めた。

「ところで、これの原因はなんなんですか？ 上村さんの話を聴くかぎりだと、人が死んだり殺されたりなんてことはあったとは思えません」

幽霊なのだから、原因は突き詰めればそんなもの、事故や事件、悲惨な出来事もなしにこの世に留まる魂なんてのは考えにくい。

「ふっふっふー、今回も私好みの現象で、つつい頬が緩んでしまっわ」

嫌に楽しそうな声を上げ、恋歌さんはベッドに近づきしゃがみ込むと、四つん這いになりながら、ベッドの下へと腕を伸ばした。

恋歌さんのタイトなスーツスカートとストッキングの奥、見てはいけないけれど、とてつもなく魅力的な黒色以外の色合いが微かに見えそうになる。

「……見てた？」

「いえ、なんでも」

目的を達したのか、すんでのところで服装を整え立ち上がった恋歌さんと視線が合う。疑惑の眼差しを向けられたが持ち前の無表情で返事をする。たぶん、誤魔化せてはいないだろうけど。

五歌（9）（後書き）

最近年を感じます。

というよりも、大人になってしまったんだなーと。辛うじて学生ながら。

20代でいられる時間も限りがあります。

なので、色々焦っていこうと決めた今日この頃。

とりあえず、軽く文庫本一冊サイズの物語を、書けるような人間になりたいです。

五歌（10）

「まっさか、こんな簡単に見つかるなんて思わなかった」

「それが、原因だっというんですか？」

ベッドの下の探索を終えた恋歌さんが手にしていたのは一枚の古ぼけた紙切れ。じっと観察してみるに、どうやら乙女チックな外装の未開封の手紙のようだ。

「そうかな、幽霊君？」

恋歌さんが何もない空間を見つめ、そう声をかけた。もちろん返事が返ってくるはずはない。伊達メガネの下では、どういう光景が広がっているのか、うんうん頷くと恋歌さんはニンマリを頬を緩めた。

「まあなんていうのかな。今回も乙女チックな思念によるところの超常現象だったというわけだよ」

勝手にまともに入りだした恋歌さんの言葉に、耳を傾ける。僕には何がなにやらちんぷんかんぷんだったが、さっすりあの手紙は……。

「そうラブレター。これが保健室の奥のベッドの下に貼り付けられてたわけ。上村先生の話からするに、おそらく先生宛に過去誰かが残していったんでしょうね。恥ずかしい、でもこの思い伝えたい！泣かせるじゃない乙女じゃない、お姉さんこういうの好きよ」

恋歌さんのゴキゲンの原因は、どうやらそういう乙女な現象が過去にあったからということらしい。ついつい呆れて溜息を吐き出しながら、僕はジト目で恋歌さんを見つめた。

「で、なんでラブレターで霊体なんですか？ 僕でもわかるほどに、なんらかの『存在』がいるようですが……。誰も死んだりしたわけじゃないですね？」

ラブレターを隠し、その後突然の死を迎えた生徒がいれば問題は解決。そりゃあこんな保健室の端っこに隠れて、現世に留まる理由

もあるというものだ。

けれど、今回はそんな大それた事件はないように思う。霊体から感じる雰囲気も雑罰とした感じではなく、ただそこにいるという存在感を放っているだけの、無害なもののように思えた。

「時に強い思いっていうのはね、残留思念としてその場所にこべりつく。生霊なんて表現が近いから」

ベットのの上に居座る『何か』を指さしながら、恋歌さんが語り始める。

「まあ本来は、いくら乙女チックな恋愛感情だからって、これほどの存在感を放つわけもないんだけど。この女子高は今、それなりに厄介な『場』を形成しちゃってるからなあ」

そのわりには深刻さなんてまったく感じられないぐらいに恋歌さんは余裕綽々だ。

「逆に言えば、学校なんてのはこういう『場』が生まれやすい構造をしているんだけどね。閉鎖された空間、感性豊かなティーンエイジャーたち、思春期特有の感情のうねりや歪み、そんなのがひしめき合っているのが学校ってわけだ」

そう言葉の上で言われると、ずいぶん物騒な場所に思えてきた。自分の中学、高校時代を思い出す。僕自身はその年令ですでに無感情無表情なクールキャラ（笑）を形成していたせいで、傍観者になることが多かった。

けれど、あの時代はクラスメイトたちにはそれぞれの悩みがあった、それぞれの戦いがあったように思う。実際、殴り合いの喧嘩やら、色恋沙汰の恨み辛みやら……。十二分にカオスフルな状況だったと言えるだろう。

まあそう思えるのは卒業した今だからこそ。あそこに通う間はなんの疑問を持たずに毎日同じように登校していた。

「保健室の佐藤ねえ。名前ぐらいは、間違わないでもらいたいわよね……」

指先でぐるりと回転させ、恋歌さんはラブレターの宛先をこちら

に見せてきた。

「田中さんですか。佐藤なんて呼ばれたら良い気はしないですよね」
なんともかわいそうな生霊さんだった。

「ま、それでも生徒たちの勘違いやウワサ話のおかげで顕現できたわけなんですよけど。こいつは気づいて欲しくて仕方なかったんでしょね先生に……、これだけの存在感だもの。さ、とっとと逝った逝った、この手紙は私たちが責任を持って届けとくから」

語りかけるように、何も見えない空間に言葉をかける。霊体に目や耳があるかどうかはわからない、そもそも僕には相手の姿は見えない。けれど、一瞬ふっと空気が緩やかになり、そっと優しく何かの存在が胡散していくような感覚が伝わってきた。

「さ、一件落着。上村さんの持ってきたお昼でも楽しみにしましょう」

「ところで、ところでですよ、恋歌さん？」

ただ、一つだけ疑問が残った。顎に手を当て混乱する頭を落ち着かせようと意識する。

「ここ、女子高ですよね？ 昔っから、そりゃあ何かの表紙で男の人が上村さんと出会うつてことも考えられますが、それにしたってやっぱり女性からのラブレターという可能性の方が」

便箋も乙女チックだったし、字体もことなく繊細な感じがした。そりゃあ、それだけで確定させるには不十分だけれど。

「ふふ、どっちなのかしらねー」

恋歌さんはすつとぼけ、答えを知っているのに教えてはくれない。「女、女同士？ いや、工藤じゃあるまいし……。否定する気はないけど、え、でもさすがにそれは……。いやまてもしかすると女子高に出入りする業者の男性という可能性も。なにも生徒に限る必要はないはずだから……」

どうやら僕の思考はぐるぐると空回りするばかりで、答えに辿り着くことはできそうにもなかった。

五歌（10）（後書き）

なんか寒いと思ったら、もうコタツを出すような時期でした。

部屋を片付けねば……。

五歌（11）

「まったく、あんなのが怪談の種だなんて、やってられませんよ」
つい愚痴を言いたくもなる。すっかり日も暮れ夕方、廊下の窓からは夕暮れの明かりが差し込んでいた。僕達は保健室を後にして、再び学校内を歩いていた。

「往々にして、あんなのが、怪談の種ってことなのよ。ま、お弁当も美味しかったし上村さんの話も面白かったんだからよかったじゃない」

恋歌さんの言うとおり、それなりに有意義な時間が過ごせたのは認めよう。けれど、わりと真面目に取り組んで七不思議なんて解決してやるぜー、なんて一人で息巻いていたこの気持をどこに落着けさせればいいのか、わからないのだ。

「残る七不思議は……。恋歌さん的にあるんですか？」

窓の外では楽しそうにはしゃぎながら下校する生徒たちの姿が見えた。時間も時間だけに、そろそろ今日の仕事は切り上げたいところだ。

正式な依頼でもあるし、今日のところは引き上げて後日また調査に来るというのもアリだけど、恋歌さんの表情から察するに事態はほぼ解決に向っているようだ。

「そうね、例えばトイレの鈴木さん、動く人体模型、13階段。なんてのはよくある怪談よね？ それに特に実害もない。この手のは大体錯覚だとか、七不思議にするための数合わせってのが相場なんだけど。わざわざ私たちが捜査することではないわね。念のためお札の一つや二つ後日貼ってればすむ話でしょうし。と、なれば……」

もったいぶったように呼吸をタメ、恋歌さんは楽しそうに話を続ける。

「ヅラを除けば、私達向けなのは、ベートーベンの絵画だの、切り裂き女、保健室の佐藤の怪談ってところが私の予想だったの」

「僕はそれも他の怪談と同じような、よくある話のように思いますけどね」

「そうね、たしかにそう。でも、ここの人達の話を総合するに、保健室のベットからあるいはベートベンの絵画からは視線を感じることもあったし、カバンを切り裂かれた生徒がいるって話もあった」
後できちんと調べてみないといけないけど、と続け恋歌さんが急に歩みを止めて、僕の方へと身体をすり寄せてきた。

「だから、私たちできることをやりましようってことでね。有理君、ちよつと職員室に行つて音楽室の鍵を借りてきてくれる？」

突然の申し出に、ひとまず無言で頷く。

「にしてもなんで音楽室ですか？ もう昼に一度行つたじゃないですか」

「あの時にいた人達、今はいないでしょ？ 部活が終わつて」

つまり、恋歌さんは空の音楽室に用事があるというこらしい。

「妖怪やらお化けの対処も私たちの仕事だけれど、本質はもっと人間的問題の方でしょ？」

どうやら錯覚や、空想の類な噂話にまじつて、人の業が生み出した現実的な現象が混じっているようだ。それは確かに僕たちの得意分野だった。

五歌（１１）（後書き）

ベートーベンではなく。

ベートーヴェンのが近い発音らしいですね。

これは恥ずかしい。

とはいっても外国の方の名前をカタカナ表記にするのは中々難しいらしいですが。

さてカレーを作るか。と意気込んでみる、休日の夕飯時でした。

五歌（12）

「女子高ねえ……、もう生徒さんも帰っちゃったからあんまりありがたみないけど」

職員室で鍵を借りて、本日二度目となる音楽室に向かい廊下を歩く。

日が暮れ始め生徒たちの姿がなくなった校舎内はどこか寂しくて、女子高だなんて甘い言葉が引っ付いていても、良い香りがするわけでもなくなるとなく幻想を打ち砕かれたような気分になった。

「音楽室にもう一度来るってことは、ここに何かあるんだろっなあ」
呟きながら状況を整理する。午前中に音楽室には一度情報収集にやってきた、その場では他愛のない話に終始していたけれど、どうやら恋歌さんには音楽室という場所を確認する狙いもあったようだ。音楽室での話、保健室での話……それぞれを頭の中で改めて思い出す。まず切り裂き女、というのが一番やかいそうで生徒への実害がある怪談だ。

音楽室でも被害があったらしく、吹奏楽の部員の人たちもやられたっていうのにきやぴきやぴと騒ぎながら楽しそうに話していた。察するに、この学校では怪談の出来事が『よくある事』になっているんだろっ。自分一人だけなら物騒な事件も、皆であたれば怖くない。

むしろ、そんな非日常体験の共有がちょっとした学生生活の刺激やコミュニケーションに一役かかっていてますます止まらない始末。

そしてさらに、出回り、拡散し、浸透した七つの怪談。それらは隠れ蓑でもあり、超常的な現象が力を得るための土台でもある。

保健室の先生が、人体模型だのトレイの妖怪だの最近巷を賑わしているらしい吸血鬼事件だのを楽しそうに話していたのを思い出す。美形な吸血鬼が人を襲うだの、一番奥のトイレには何かがいるだの、夜の人体模型はすっごい速いだの、眉唾ものの話ばかりなのに、あ

あやつて数人でワイワイと話している分には、そんな人外な奴らがいってもよさそうな気がしてくるから不思議なものだ。

「あやしいのはベートーベンの絵画の怪談とかかな」

肩がけのシヨルダーバックに無理やり突っ込んでいた怪談の資料を取り出し確認する。誰もいない音楽室でふと絵画を見るとベートーベンの瞳が動いていてこちらを見ていた。とかとか。

なんとも勘違いっぽい怪談だった。そもそも歴史上の大偉人様がわざわざ動いてくれているんだから、感謝ぐらいしてもいい気さえする。特に音楽で成功したい人とかさ、御利益あるよ多分。

「恋歌さんお待ちせしました」

どうにか頭の中がある程度まとまってきた所で音楽室に着いてしまった。もつと時間をかけて考えて推理なんてそれっぽいこともしてみたかったが、所詮僕は恋歌さんの助手、事件解決を優先してプロフェッショナルらしくフロアに回ろうと、これまたなんだかそれっぽいことを思ってみたりした。

「ご苦労様、有理君。私の方も準備万端よ、車から持ってきたからね。あんまり遅かったら、久々に頑張つて不法侵入しちゃうかと思つてたところよ」

「それ、たしか探偵七つ道具的な奴でしたっけ……」

恋歌さんはたまに依頼で使っている探偵七つ道具的なもの（ピッキグや改造スタガンなんてイリーガルな物も含まれる多分探偵とか関係ない代物たち）が入っているバックパックを背負っていた。「さ、名探偵、恋歌お姉さんの華麗なる推理をお披露目しよう」

とても自信ありげな表情で意気込む恋歌さんを見て、どうせ名推理なんかないんだろうなあと思息しながら、僕は音楽室の力ギを開けた。

五歌（12）（後書き）

現在広島地方では雨です。

最近休日は雨がデフォルトな気がしてならない。

先日はカレーをつくったので、今日はキムチ鍋を作りましょう。

なんか、最近料理の事しかあとがきがきで話してない気がするぜ……。

五歌（13）

「さーって、お仕事、お仕事」

子供みたいな動作でウキウキ感を表現しているのか、恋歌さんは不自然にふわふわした動きで音楽室に侵入するとすぐさま奥の壁にぶら下げられた絵画たちの元に駆け寄った。

昼に訪れたような生徒さんたちによる賑わいもなく、入り口付近にあった電灯のスイッチを押して電気の通った音楽室の中は、どことなく寂しくて不気味さがある。

「有理君これ、なにかわかる？」

「なんですかこの黒いのは」

黒い細長い楕円状の物体を取り出し僕の前で掲げられた。それなりの厚みの中心付近にはボタンがついていて、車のボタンキーに似ているような気がする。

「探偵七つ道具なんだから、探偵つばいものに決まってるじゃない」

あきらかに七つ以上の色んな道具が積み込まれたカバンを自慢気に見せびらかしながら、恋歌さんは断言した。僕はだまって恋歌さんの掲げた道具を奪い取ると、早速ボタンを押してみた。

「なにも起きないですね。壊れてます、これ？」

「真顔でよくも言うねえ。まったく」

恋歌さんはそんな僕の反応にあきれたように笑うと、さてっと仕切り直してベートーベンの絵画の方を指差した。

「使い方はそれで大丈夫なのよね。ボタンを押してなんか反応があればいいわけ、ってことであのベートーベンの近くでボタン押して欲しいんだけど、ねえ」

意味ありげな視線が僕に向けられる。ベートーベンの絵画の方を再び眺める、僕の上背の遥か上、あざ笑うかの如く歴史上の偉大な音楽家たちが並んでいた。

「僕じゃ無理ですね、主に身長的に、どうせチビですよ、ガキです」

よ」

無表情で淡々と悪態について、恋歌さんを睨みつけてやった。

「ごめんごめん、でもどうやって検査してもらおうかしら。椅子に乗ってつていうのも面白くないし、ここは私が有理君を肩車するという方法を進言してみるわ」

「さすがにそれはちよつと……でも、え、肩車？」

二十歳も間近の大人として誰かに肩車されるというのは恥ずかしかったけれど、ちよつぱり心惹かれていている自分がいる。

「それとも、有理君が私の椅子になつてくれる？ 生足で踏んであげるけど」

「それもよさそう……、いえなんでも。肩車でいいです、はい」

普通に教室の椅子やら机やらを使うという発想はないようで、肩車案が採用されてしまった。僕としてはちよつぱり美味しい展開だった、恥も外聞も捨てれば好意を寄せている女性に密着できるのだから嬉しくないはずがない。

できれば、男として下で持ち上げる役目に回りたいものだけど。

「さ、有理君。私の頭みたいで、持ちあげるから」

そわそわしながらも、恋歌さんに背中を向けて、大きく股を開く。すぐさま恋歌さんは僕の股に頭をくぐらせると、軽々と持ち上げてしまった。

ジーンズ越しに感じるさらさらの髪の毛とか、ふともものあたりをぎゅっと握る手のひらの感触とか、楽しめないこともなかったけど、思ったほどじゃない。これは選択を間違つてしまったのかもしれない、あんまりよくないじゃん、肩車。

やつぱり、男が女性の股ぐらに頭を突っ込むという、今とは逆の立場で行われることに意味があるのだろう。

「ほら、有理君。はやく」

「あ、すいません」

やつぱり恋歌さんの台座になつて、生足でふみふみしてもらった方がよかったかもしれないとつっすら後悔していると、下から声を

かけられた。

気を取り直して、ベートーベンの鼻先へと、楯円の機器を向けた。スタイリッシュな髪型が憎らしいあんちきしょうに見つめられながら、ボタンをゆっくりと押しこむ。

ピーピーピーピー。

なんて間の抜けた電子音を響かせながら、黒い機械は赤色のランプを光らせ何かを僕らに伝えてくれた。しかし、この機械の用途を知らされていない僕にとってはなんとも実感に乏しい話だ。

でも想像ぐらいはできる、よく見る探偵の仕事のごとく、こういうので発見できるのは盗聴器だとか危険なストーカー精密機械と相場は決まっている。

「どうやら、ビンゴね。それ、盗撮発見器。ベートーベンの絵画の下になにやらとんでもないものがあつたみたい」

やっぱりね、と嬉しそうに頷く恋歌さん。

どうやら、ベートーベンの怪談にはそんな、人工的な原因が潜んでいたらしい。文字通り、絵画の下から視られていたというわけだ。けれど、そんなことより。

「恋歌さん、はやく下ろしてください」

恥ずかしさとか嬉しさが、今更のように押し寄せてくる。色々と都合が悪いので、とにかく早急に肩から下ろしてほしかった。

五歌（13）（後書き）

そろそろ五歌も終わりが見えてきました。

次の話が本題。最終章のはじまり、的な感じ。

この五歌はわりかし日常寄りですが、思ったより文字数が膨らんでいく。まあこれは自分の書き方がちょっと変わってきているせいでしょうけど。

五歌（14）

「あんなのが、怪談の種ってわけですか？」

「そ、持っててよかった探偵七つ道具的なものってね」

車から持ってきた古臭いバックパック。そこから出て来た小さな機械はあのベーターベンの絵画の前で強く反応していた。あの絵画の後ろに盗撮用の小型機器が設置されている可能性が高い。

「詳しい調査は学校側でももらえそうね。ついでに一齐検査した方がいでしょうし、あそこだけとは限らないからね」

依頼完遂。といっていいのかわからないが、音楽室を後にした僕たちはこの日の調査を終えるため、高梨先生への報告を済ませた直後だった。

七不思議の幾つかは解決することができたし、怪談というまやかに隠れていた人間の悪行を暴き出すことができた。後の処理は学校に委ねないといけない部分はあるが上々の結果と言えるだろう。

「にしても、恋歌さん。色々和高梨先生に助言してましたけど、ずいぶん 指導熱心なんですね」

「ここからは私たちが掻き回していい問題だけではないしね。高梨先生には悪いけど、他の先生と協力してなんとかしてもらいましょ。風見の通う学校なんだから」

学校から帰るために、連絡をとって呼び出した自由見学中の風見と待ち合わせしている下駄箱を指す。

高梨先生との会話を横で聴いていた分では、調査はほぼ終了らしい。けれど、僕はまだ引がかかっていた。動く人体模型やトイレのお化けなんかではない、もっと、一番人間が関与していそうな怪談がまだ一つ残っている。

「恋歌さん、切り裂き女……実際のところどうなんですか？ やっぱり生徒の仕業なんでしょうが、盗撮までするんですから、外部犯ってのも考えられますが、さすがにこの学校のセキュリティもそこ

まで甘くないですよね」

すっかり帰るつもりだったのか足取りも軽く、軽快なステップで廊下の角を曲がろうとしていた恋歌さん呼び止める。

「そうねえ、切り裂き女っていうぐらいなんだから、犯人は女の人なんでしょうね」

「この学校は女の人だらけですよ」

「人体模型を動かすなんてのは、普通に考えれば人間の仕業じゃない。切り裂くなんて単純な行為は、誰にだってできるわよね。つまりはそういうことってこと」

恋歌さんは相変わらず、肝心なところをはぐらかそうとする。

「ま、私だってね、確実に100%わかっているかって訊かれると自信がないわけ。詳しくは学校側の調査結果を待ちましょう」

意地悪な表情で笑って、恋歌さんは話を切り上げようとした。

「人のカバンを斬りつける。人を見張るように盗撮をする。同一犯ってわけじゃないですけど、なんだか関係がありそうですね、音楽室でも『切り裂き』事件はあったみたいですし」

「そこまでわかってればまあ、答えの80%ぐらいは合ってるんじゃないのかしら」

恋歌さんは僕の答えに嬉しそうに笑うと、再び歩き出した。

それ以上問いただすのも野暮なような気がしたので、僕も黙っておくことにする。人の心は複雑怪奇、時に超常現象を作り出し、時に超常現象へと変異する。それらすべてに理由を求めたいというのが僕らの立場だ。

超常現象にだって、理由があつて、原因がある。超常してはいても、原因は人の関与し得る範囲の事柄で、だから僕らは人でしかない。

答えは完璧じゃなくて、人の心の複雑さを全部見透かすというのはとても骨が折れる。けれど、恋歌さんや社長はこの手の推理にいつも自信満々なのだ。

口では正しくないかもしれない言いながらも、そのおおよそは

正解を叩き出す。その理由が少しだけ、わかったような気がした。

すべてを理解するのは無理でも、相手の立場にたって、自分の考えで、答えを導き出すことはできる。自分の答えに納得できるのなら、それは一つの真実なのだ。

間違っていると、怯える必要はどこにもない。

「だっていつでも、まだまだ不安だよな」

僕如きの考えだけでは、自信満々の結論はまだ出せない。近くに恋歌さんという千里眼みたいに見透かしてくる人がいるから、ついつい模範解答を求めてしまう。

まだまだ僕も半人前。今後も恋歌さんの隣に居続けるつもりなら、もっと自分の頭で考えないといけないのかもしれない。そういう意味では、恋歌さんがあやつてはぐらかしてくるのも、僕のため、なんてこともありえるのかもしれない。

「なにやつてるの有理君、はやく帰るわよ。お腹へったし」

「はいはい、今行きますよ」と

この魅力的でときたま意地悪な笑みを浮かべる人のことが、僕は好きなんだから。今より頑張って、隣にたてるような男になりたいと、そう思った。

五歌（14）（後書き）

キリよく15で一段落。

エピソード含めて残り2つでございます。なんか長かったっん。

五歌（15）

「おう、恋歌にわっぱ、えらく遅くまでかかっておったな。まあわちきも学校を隅々までまわれたから、暇はせんでよかったが」

下駄箱に着くと、まだまだ元気が有り余っているのか、風見はやけに大きな声で僕らに話かけてきた。

「悪いな、ずいぶんほったらかしにしてしまつて」

「なーに、どうということはない。ここは歴史ある学校だからな、わちきの同族に近い奴らもある。挨拶回りだけですぐに日が暮れてしまつたわ」

ワッハッハと豪快に笑いながら、風見は上機嫌のまま恋歌さんのバックパックの中を覗きこみ始めた。

「中々使い込まれた道具の気配を感じるな。そのメガネには及ばんが」

「まあねー、これは社長から譲り受けた由緒正しい探偵グッズだもの」

なんと例の探偵七つ道具は社長の物だったらしい。あの人も正攻法以外のやり方とか得意そうだから、納得だ。きつと昔はぶいぶい言わしていたのだろう。……いや、現在進行形でイリーガルにも活躍してそうだけど。

しかし、そんなことよりも風見が意味深な発言をしたような気がするのだが。

「風見、なんか同族に近い人がいるとか何とか」

「ん？ そりやそうだろ。古来より学校は人外の住処。わちきのような高貴なヤからはあんまりおらんが、人ではないのに意識を持ってるやつらもいるからの」

「そりやなんだ、例えば指定されたトイレの個室をノックしたら、女の幽霊が返事をするとか、夜中に人体模型が動くとかいう」

「ああ、ここの学校には中々古くて良きものがそろつておった。人

体模型とかすごかったぞ、ありゃあ長年学生どもに噂されたせいでついには自我のごときものまで形成しておった、付喪神といったところじゃな。所詮は疑似人格でしかないだろうが」

なんとも怪談らしい話だった。

人外とかお化けとか、あんまり認めたくなかったので、恋歌さんに反論を求める。

「ほら、あれよあれ、人が噂することによって、人が残した残留思念やら霊体的なものがより集まって、人間の残り香から自我のようなものを形成してなんやかんや、人とか場所を抛り所にする学校専用の現象が起こってだね。極々局所的な場所限定の超常現象が発見したというわけで」

「まだそんなこと言いよるのか、素直に『人外』とかそんな言葉ですませればいいものを」

「それはほら、私たちの立場的に許せないっていうか。あなただって、ちよつと能力が強くて寿命の進みが遅いだけの人みたいなものじゃない」

神様だって、変わりはしない。ささいな違いがあれど、やっていることも考えていることも、人の範疇。ただちよつと特殊なことができるだけで、人間という定義を拡張すればいいだけの話なのだ、うん、たぶんきつと。

もつとも風見は血が濃ゆい方だからこれだけの力を有しているという話を一度聞いた。となれば、古代彼女たちの先祖となつたような人間は文字通り『神』のごとき力を持っていたのかもしれない。『まあええがな。今度主らがここに来た時は、存分におどかしてもらおうかの、学校の怪談を馬鹿にしておったぞと伝えてな』

はっはっは、何をこの小娘は言っているのでしょうか。

人体模型が夜中に勝手に動いたって、別に殺されたり危害を加えられたりするわけでもあるまいに、心霊現象だって今まで何度か体験してきたんだ。恐いわけ、恐いわけないですよ？

「れ、恋歌さん。早く帰りましようそうしましよう」

「そうね有理君。お腹すいたし」

とってつけたような言い訳を口にして、さつさと山ノ宮女子高校から帰宅しようと歩き出す。

「お、人体模型さんわざわざお見送りに、ご親切にどうも」

背後から、風見が今まで見せたことのないような殊勝な態度で、挨拶を返す声が聞こえた。脳内で人体模型さんと風見が仲良く会話する光景をイメージしてみると、やっぱり不気味だった。

だって、皮をはぎ勉強のためにと人間の中身を露出させた人体模型が、動いて挨拶なんてしゃれたことをしてくれる。害があるとかないとかじゃない。だれだって、怖い。そうに気まっている。進んで出会いたい類の怪異ではない。

今回の依頼にも関係無いだろうし、きっとあれだ生徒の安全を守る妖精さんの立ち位置だろうから。内蔵とか丸見えだけど。

そもそもだ、会話をしているように聴こえるけれど、もしかすると僕らをおどかすための風見の自作自演かもしれない。後ろを振り返るとそこには何もいないかもしれない。……絶対に振り返らないけど。

「おい、主ら、わちきを置いて行くつもりか！ 待たんか！」

気づけば早足になりながら僕と恋歌さんは風見を置いて、学校を後にする。やっぱり一番怖いのは古典的な怪談なのかもしれないと内心納得できてしまった。

五歌（15）（後書き）

大学生の朝は遅い。

最近眠すぎます。というかこたつと毛布が凶悪……。
後はエピソードを残して五歌、終了でございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2935t/>

有恋歌

2011年11月30日10時46分発行